
幼馴染の溜息

ぽんかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染の溜息

【Nコード】

N5453Q

【作者名】

ぼんかん

【あらすじ】

王城内に勤めるフレアには幼馴染がいた。近衛隊副隊長になったばかりの彼はご令嬢方の婿候補として『超』優良物件。そんな彼との関係がバレてしまったばかりに穏やかだったハズのフレアの日常が溜息の嵐に…

——どこがいいんだか、あんなヤツ。

心の中で毒づきながら表面上は笑って流す、つमりのちよつと一騒動な日常のお話。

ノリと勢いで書き始めたので都合主義満載、ざっくり時代背景です
ので、細かい方には向きませんWWW

第1話

「ねえ、聞いた？オーランジュ様がお戻りになったって！」

「…………マジで？」

「知ってるわ！今朝ちらっとお見かけしたものの。相変わらず素敵だったわ」

「……………は？素敵？」

「あのグリーンの瞳が朝日に輝いて眩しそうに細められて。いつもより精悍なお顔立ちでしたわ」

「……………目つきが悪いだけじゃない」

「まあ。あなた朝からすごい幸運じゃない！いいわね。私も早くお会いしたいわ」

「ふふふ。今日一日分の幸運を使ってしまったわ。でもおかげで今日は朝から気分がいいのよ」

「……………そんなことで運を使うなんてもったいない」

「遠くからでも一目でわかるあの立ち姿。近衛隊の深紅のマントがよく映えていらっしやって。オーランジュ様ほど隊服を着こなせる方もそうそういらっしやらないわよね、フレア？」

「え？ええ…」

突然侍女仲間から振られた問いかけに、心の中で毒づいていたフレアはとっさに返事ができなくなる。

アーデルヴァイド王国城内の一室。

侍女たちは部屋の主が留守なのをいいことに、のんきにおしゃべりしながら掃除をしていた。

しかし、そこは腐っても良家の子女上がりの娘たち。口と同時に手もてきばきと動かしながら働いている。

先ほど王城敷地内にある庭園へ散策に出かけられた部屋の主である

王女は、まだしばらく戻らないだろう。一通りの掃除やベッドメイキングなどを終えると、道具の片付けに一行は部屋を後にする。

これから貴重な昼前の休憩に入るため、道具を片付け侍女たちが集う控えの間に向かって歩き出した。

「オーランジュ様といえば、最近近衛隊の副隊長に任命されたんですってね。これでまたご令嬢方がオーランジュ様をめぐって騒がれるでしょうね」

ふふつと笑いながらそう皆に告げるのは王妃付きの侍女で唯一の既婚者アデリーだ。やわらかい栗毛がよく似合う顔でほほ笑みながら、それでも他人事で言えるのは彼女が新婚の夫から溺愛されている事実があるからだろう。しかし、現在恋人募集中真っ盛りの他の侍女たちにはそんな余裕はなさそうだ。

「そうなんですわ！オーランジュ様といえば次男とはいえ侯爵家の方。国内でも1，2位を争う剣の腕前に加えてあのご容姿！ご令嬢方のかっこの婿候補ですわ！」

「なのに、どんな美貌のご令嬢に声を掛けられてもそっけなく返されるばかりで：そこがまたいい、と評判ですわね」

「たしかに、言い寄ってこられる方にはそっけないけれど：でも普段のオーランジュ様はお優しい方だわ。隊の方たちにも普段は厳しいけれどいつもさりげなく声を掛けられて。私たち侍女にも分け隔てなく接してくださって。上流階級のお生まれなのに鼻にかけたりなんかなさらない、まっすぐなお方だわ」

「そのせいで勘違いしてる女性も多いって噂ですけどね」

「でも副隊長に任命されたからにはさすがに侯爵様が黙っていないのではないかしら？オーランジュ様ってたしか24歳、でしたっけ？」

きゃっきゃとはしゃぐ他の二人に苦笑しながらアデリーがこちらに顔を向けて問うてくる。

話に混ざろうとしないフレアにちよつと心配したような瞳を向ける

アデリーにこっそり溜息をついて

「——もうじき25歳になられるはずですよ」

無愛想にならない程度の笑みを顔に張り付けてそう答えた。

アデリーはそれになるほど、と一つうなづいたただけだったが、前を歩いていた二人には驚きだったらしい。

がばっ、と二人同時に振り向くとびっくりして思わず足を止めたフレアに詰め寄ってくる。

「もうすぐ!?! オーランジュ様ってもうすぐお誕生日なんですの!?!」

「25歳なんて、まさに適齢期ではないですか! しかも近衛隊副隊長へのご就任。このタイミングでのお誕生日。: 絶好のチャンスですわね!」

グッとこぶしを握り締めて空に何かを誓うような姿勢の彼女を、もう一人の侍女がどけるようにフレアにさらに詰め寄ってきた。

「フレア: あなたなんでオーランジュ様のお誕生日なんて知っているの?」

「えっ?」

「——: まずった?」

「: みんな知ってると思うんだけど」

取り繕うように言うフレアに、侍女の一人は訝しげな目を向ける。

「まさかあなた:」

思わずドキッとして身を引きかける。しかし、彼女はフレアの両手を自分の手で握りこむようにして押さえると

「あなたまでオーランジュ様のファンなの!?! 『今まで全く興味ありません』って顔しといて、実はお誕生日までしっかり押さえてる隠れファンだったわけ!?!」

「: : : : は?」

「オーランジュ様のお誕生日なんて誰も知らないわ! 『知らない人間に祝われるほどご大層な人間じゃない』って以前オーランジュ様がおっしゃってから誰もお誕生日を聞き出すこともできなかったの

に！」

思いもかけない言葉に半ば呆然とするフレアを侍女は振り回さんばかりの勢いでなおも詰め寄ってくる。

その剣幕にそばにいた二人も止められず困惑していると、思いもかけないところから声がかかった。

「————フレア」

聞き覚えのある低音に、その場にいた4人の動きが止まった。

第1話（後書き）

ノリだけで書き始めたので、きっと読みにくい箇所があちこちに…
あゝ文才がほしい！！

第2話

侍女の控室まであと5歩。

なんでこんな所で立ち止まってしまったんだろう、とフレアは舌打ちしたい気分だった。

自分に詰め寄ってきていた侍女はフレアと向かい合っていたため、声を掛けてきた人物をもろに見てしまったのか頬を赤く染めて固まっている。

「フレア、頼みがある」

フレアの背後から再び問いかけられさすがに無視できなくなってくる。

そっと、まだ固まったままの侍女から手を抜きとるとできるだけ背後の人物と視線が合わないよう、うつむき加減に振り返る。

「——ご用でしょうか、オーランジュ様」

「破れた。直してくれ」

床に向けていたフレアの視線の先にぬっと突き出された布の固まり。思わず受け取ってしまうと

「夕方にまた来る」

そう言って布の持ち主であり、先ほどの話題の人物は踵を返して行ってしまった。

あとに残されたのは異なる理由で硬直したままの、王女付きの侍女が四人だけだった。

「どういふ関係か、伺ってもいいわよね？」

半分目が据わり気味な侍女——濃い茶色の髪を持つリリーは先ほどフレアに掴みかからんばかりだった勢いもそのままに、彼女にじっとりとした視線を向けてくる。

「関係って言われても、別になにも…」

溜息交じりにつぶやきながら手元の布の固まりに針をチクチク刺していく。

先ほどオーランジュがフレアに押し付けていったのは今朝がたもう一人の侍女——淡い金髪のネルが見かけたという近衛隊のマントだ。深紅のそれにぐるりと施されている金の紐で編まれた刺繍飾りが肩口のあたりから一方の裾まで見事に取れている。引っかけたと思われるそれはマントを破ることはしていなかったが、その縫わねばならない長さを見たときフレアはまたしても溜息をつきたくなった。

当然、彼女は他の侍女たちに問われるのを予想して自室で修復しようとしたのだが、一部始終を見ていた他の侍女、特にリリーとネルがそれを許すはずもなかった。

無理やり侍女たちの控室へ引っ張っていかれると奥のテーブル卓を4人で陣取り、フレアが席を立てないよう一人が彼女の肩を押さえて椅子に座らせ、一人がお茶を人数分運んできて、一人が侍女たちが日常の簡単なほつれなどを直すのに棚に常備されている裁縫道具一式を運んできた。

諦めてその場でマントの補修を始めたフレアに、当然のように目の前の席に座りこみ問い詰める気満々のリリーが身を乗り出しながら聞いてきたのだ。

「何もないわけないでしょう！？お誕生日を知っていたことといい、こんな個人的なご用まで頼まれるなんて！ぜったいたいにかある！！」

「ないわよ、本当に」

困ったような笑顔を浮かべながら、それでもフレアは手元から視線を離さない。夕方までにこの長い縫物を終わらせる、しかも自分が私的に使える時間なんてわずかなのだ。言いたいことは山のようにあったが、今は手元をおろそかにしている場合ではない。隣に座っているアデリーがフレアの針の進む方向に軽くマントと房飾りを引

っ張ってくれているおかげでかなりやりやすい。しかし、昼の休憩時間にはたくさんの侍女たちがこの部屋を使うためこんなに大っぴらに作業することはできないだろう。まして、自分が深紅のマントを手をしているところなんてこれ以上多くの人に見られたくない。

——絶対以後がコワイ

ともに仕事をしているリリーでさえこの剣幕なのだ。さほど面識のない、オーランジュの信奉者になど見られたら何をされるかわからない。

今まで心の中で舌を出していたり毒を吐きまくっていたことはあれど、表面的には穏やかに、慎ましやかに侍女の仕事をしてきたのだ。今さら女同士の悲惨ないじめの的にされるのはごめんである。

その思いだけがフレアの指先をひたすら突き動かす。おそらく当初は城のお針子たちが一針一針心を込めて縫いあげたのだろう紐飾りを、猛スピードで縫いつけていく。

その手を隣で見ていたアデリーが、なおも追求しようとするリリーにそっと手をかざして止めた。

「リリー。聞きたいことがあるのはわかるけど、今は集中させてあげたら？」

「アデリーは気にならないの！？私はフレアが吐くまで動かないわよっ？」

「気にならないわけじゃないけど…でもオーランジュ様が『夕方にまた来る』っておっしゃってたでしょう？それまでに仕上げるのはかなりキツイと思うのだけど？」

「そう、かもしれないけど…でも！」

「オーランジュ様にマントの端が引き攢れた物をお召しになってほしくないのなら。今はやめておきましょう？」

結局、なおも言い募ろうとするリリーをアデリーはとどめの一言で押さえた。

しぶしぶ椅子に座りなおしたりリリーだが、まだ目はフレアに恨めしげに向けたままである。

「：後で絶対吐いてもらうから」

しかし、落ち付いてようやく周りに目が向くようになったのか、自分の隣に座るネルが一言もフレアに対して文句も言わなかったのに気がついた。リリーが隣に目を向けると、ネルはそれにもお構いなしにじっと一点を見つめている。

「ネル？どうしたの？」

肩に手を置かれてハッとしたネルは、それでも視線を外さないままリリーに指差した。フレアの手元を。

「：すごい、早いのに」

ネルの視線の先では一瞬も休むことなくフレアの指先が動いている。紐の刺繍飾りをマントに縫いつけるためには紐飾りに糸を一回一回くぐらせていかねばならず、かなり手間がかかる。それも一定の法則で編まれた紐飾りを同じ様にマントからはみ出させなければならぬ。城のお針子でも熟練した者だけが仕上げともいえるこの作業を担当できると聞く。しかし、フレアはそんな精巧な技術を物ともせずいっそザクザクした勢いで縫っていく。それでも紐が曲がることも、布が皺することも無い細かくてきれいな縫い目。

「：…本当だ」

これにはリリーも驚いたようで、その後は黙ってお茶を飲みフレアの作業を見守ることにした。

しかし、たかだか20分程度の休憩で成人男性の身長はあろうかというマントの端を縫い終わるわけもなく、「そろそろ行かないと」と遠慮がちに掛けてきたアデリーの声によりやく手を止めて息をついた。

「やっぱり終わらないわね」

フレアは右手をぶらぶらさせながら冷めてしまったお茶を一気に飲み干す。

「でも半分は行ったんじゃない？フレアならお昼の休憩時間でなんとかなりそうだけど」

マントを畳むのを手伝いながらアデリーが言うのに、フレアは確か

にと頷く。

手にだけ集中していたため、どのくらい縫い進んだのかを考えていなかったが、これならアデリーの言うとおりにお昼中ににどうにかできそうだと。

「そうね、大丈夫だと思う。アデリーもありがとう。助かったわ」
この日フレアはようやく心の底からの笑顔で答えた。

その日の昼過ぎ。フレアは城の裏手にある脇道とも呼べるような影を走っていた。

———あんの、馬鹿ぼっちゃんが!!

決して口から出すことはないが今のフレアの真実の声である。

昼前の休憩後、結局修復が終わらなかったオーランジュのマントは人目に付かない方がいい、というアデリーの忠告によりフレアの自室に置いてきてあった。一度部屋へ戻るため休憩の後リリーたちとは別に王女の元へ戻れるのも、追求を逃れたいフレアにはうってつけだった。このまま昼の勤めを果たし、休憩中にマントは完成するはずだったのだが、フレアにはその後予想外のことが起こってしまったのだ。

第3話

その日の昼前。

王城敷地内にある自室から足早に王女の部屋へ戻ったフレアを待っていたのは、主であるサーシャマリー王女だけではなかった。居室のソファで優雅にお茶を飲んでいた王女の隣の椅子には、彼女の兄王子でありこの国の皇太子でもあるユーリックと、その背後に控える近衛隊のデュークが立っていた。

「フレア！よかったわ、戻ったのね」

飲んでいたカップを置くとサーシャマリーはフレアに向かってにっこりと微笑む。

フレアは部屋にユーリック達がいたことに一瞬驚いたが、すぐにサーシャマリーに向けて腰を折ると

「サーシャマリー様、遅くなって申し訳ございません。私に何か御用でしたでしょうか？」

顔を床に向けたまま視線だけでチラリと部屋の端を伺うと、他の侍女たちは皆大人しく控えている。

どうやら誰でもいい用事ではないらしい。フレアの胸中に嫌な予感がよぎった。

ユーリックが妹であるサーシャマリーの部屋を訪れるのは別段珍しいことではない。兄弟仲の良い二人は何かというとお互いの部屋を訪れるため、今さら驚きもしないが。しかし、ユーリックの背後に控えているデュークをこの部屋で見るのは初めてである。いつもはもう少し年嵩の第二近衛隊長のハロルドがつき従っているはずだ。ちなみにハロルドはオーランジュの直属の上官であり、第二近衛隊は主に皇太子であるユーリックの側近くに仕える。

——現在近衛隊は五つに別れて編成されており、第一が国王夫妻、第二が皇太子、第三が王女となっている。国王夫妻に今後子が増え

れば第四、第五もその子の周辺警護から政の際に必要な手足となつて動く。実際にハロルドは近衛隊の隊長を勤める傍ら、ユーリックの貴重な助言者でもある。おそらく、副隊長となったオーランジュも今後その仕事の一端を担うことになるのだろう。

しかし、現国王夫妻には今のところ次の子の予定はなく、現在ある第四、第五近衛隊は総指揮官である近衛隊の総隊長直轄の部隊であり、その任務の多くは城下の巡回・警備や城内で催されるパーティなどでの賓客の警護が主である。また、第三までの近衛隊と違い重要な任務に就くことが多いため一部では『貴族の子息の箔付け』隊と囁かれることもあった。ユーリックの背後に控えるのは、そんな『一部で囁かれている隊副隊長』候補の男だ。デュークの顔を頭の情報棚がら引っ張り出したフレアは眉をひそめそうになる。――

「ユーリ兄様がフレアにお願いがあるらしいの」

「私に、でございますか？」

穏やかな笑みを張り付けてゆっくりと顔を上げると、申し訳なさそうな顔をしたユーリックと目が合う。

「すまない、フレア。用があるのは実は私ではないんだよ」

「では、もしかして……」

小首をかしげるフレアに、ユーリックは自分の後ろに立つ男を指した。それを受けてデュークはフレアに対してまさに『にっこり』というような笑顔を向ける。

「はじめまして、フレア嬢。第四近衛隊のデューク・ウィンストンです。お噂を伺ってずうずうしくもやってきてしまいました……こんなに美人だったとわ」

「フローレディア・ダングレイでございます。お褒めに預かり光栄ですが、サーシャマリー様の御前であございますので」

肩をすくめておどけ気味に言うデュークに、フレアは内心イラっとした。

敬愛する主を差し置いて褒められても全く嬉しくない、どころかそのデリカシーのなさに思わず棘のある声を返しそうになる。なんとか声は取り繕ったが、表情までごまかせたか自信がなかったのゆえに、つたりと礼をすることで顔を伏せてごまかす。しかし、そんなフレアの内心を無視するかのようデュークは大げさに驚いたような身振りで続ける言葉に彼女は顔を上げられなくなる。眉間にしわが寄って、いそうな気がしてなくなったのだ。

「ご謙遜を。もちろん、サーシャマリー姫もお美しいがあなたの淑女の魅力も素晴らしい！特にその珍しい髪の色が大変よくお似合いだ！」

「…ありがとうございます」

「…デューク、無駄話をしに來たのなら私はそろそろ部屋へ戻るが？」

思わず力を込めていたフレアの手に気付いたユーリックがそれとなく話を止める。視線を床に向けたままだったフレアはその声に知らずほっと息をつき、ゆっくりと顔を上げた。その先では難しい顔をしたユーリックと、こちらも兄の言葉と同様の非難を込めた眼差しのサーシャマリーの視線の先で当のデュークは変わらずおどけた表情だ。

「おっと、申し訳ありません殿下方。では、サーシャマリー様。フレア嬢をちょっとお借りしてもよろしいですか？」

「フレアは物ではありません。彼女に失礼な態度は慎んでください。…フレア、あなたに頼みがあるのはデュークなだけ…」

困ったような表情も愛らしい王女は、言外に『断ってもいいのよ』という視線を向けてくる。

ユーリックもデュークの態度に思うところがあるようで、眉間を押さえながら妹の言葉にうなづいている。

しかし、どうもそのデュークの願いのためにサーシャマリーの部屋を訪れたらしいユーリックに無駄足を踏ませるわけにはいかないと思ったフレアは二人に笑顔を向ける。

「大丈夫ですわ、ユーリック様、サーシャマリー様。デューク様。どのようなご用件でしょうか？」

めんどくさいことはさっさと済ませるに限る。早く言え、とばかりにデュークを促すフレアに、脳内が自分の都合のいいように解釈させるようできているらしいデュークは晴れやかな表情を向けてきた。

「おお、ありがたい！なに、フレア嬢の腕をもってすれば大したことはありませんよ。では、サーシャマリー様、隣の部屋をお借りできますか？」

「ええ。くれぐれもフレアの仕事の邪魔にならない程度にしてちょうだいね。――フレア、お話を聞いて都合が悪そうならお断りしなさいね」

さっさと隣室へ促すデュークに押されるように、今入ってきたばかりの扉へ向かうフレアの背中に優しいサーシャマリーの声がかかる。その言葉に振り返り、退室のためにフレアは室内に向けて腰を折った。

第3話（後書き）

脳内ストックが尽きるまでは頑張って書きまゝす（目標）
それにしても説明くさいorz

第4話

王女の隣室は、普段あまり使われることはない。自室に招くほどでもない客をもてなすために作られた応接室のようなもので、年に2、3回使用するかどうかだ。それでも、王女のための部屋であることには変わりがないので定期的に清掃された室内は、明るく清潔に保たれていた。

そんな部屋の中央にある応接用のソファの上に、無造作に一着の服が掛けられていた。

「頼みというのはこれなんだ」

なれなれしくもフレアの肩に手を置いてきたデュークから逃れるように、フレアはソファに近づく。

「これは：第四近衛隊の隊服ではないですか？」

「そうなんだよ。実は今日の午前中、ユーリック殿下が鍛錬場に行っちゃって剣の稽古をされていたんだ。その時に俺と手合わせしていたんだが：勢い余ってしまわれてね」

そう言ってデュークはソファに掛けられていた、第四近衛隊を示す濃い緑色のラインが入った上着を手にする。市井の娘から貴族のご令嬢達までもが憧れる近衛隊の隊服は、しかし脇が腕の下から裾までぎっくり裂けてしまっていた。

———避けきれなかったあんたが下手なんじゃないの？

心の中で文句を言いつつ、目だけでだから？と問う。

「まあ、普段なら城のお針子のところに持って行くんだが、どうも今は忙しいらしくて早くても明日の昼ごろになると言われてしまったんだ。だが、俺は今日の夜から仕事があつてこれが必要でさ。そしたら殿下が、以前フレアは裁縫がうまい、とおしゃってたのを思いだしてね。君にお願いできないか殿下に聞いてみたんだよ」

「殿下が？」

「ああ。なんでも以前殿下のシャツを直したことがあるらしいじゃ

ないか」

「そういえば…」

さりげなく呼び捨てされたことや、言葉が碎けてきたことにさらにイライラとしながらも、記憶をさぐる。

「だいぶ前にそんなことが…」

「あつたんだろう？それでこうやって君にお願いにやってきたってわけさ」

「でも、それは本当にちよつとのほつれを直して差し上げただけで、ここまですになると私の手にはおえませんよ」

これ以上仕事を増やしたくないフレアは、さりげなくできないとアピールしてみる。

しかし、目の前の男にそんな遠回しな言葉は通じなかったようだ。逆にフレアの逃げ道をふさぎにかかってくる。

「君が直してくれないと俺は今日隊服なしで城下の巡回に出なければならぬ。当然、隊長たちにも理由を聞かれたら殿下のお相手をしていただくまで話すしかない。でも俺としては『力のコントロールを誤って隊員の服を破った』なんて、殿下をなめた目で見てほしくないからさ」

大げさに肩をやれやれとばかりにすくめるデュークへ向けるフレアの瞳は冷たい。

「——自分の醜聞を隠したいだけじゃない。」

ユーリックの剣の腕は確かだ。それは間違いなくこの国で他に太刀打ちできるものはいないであろう彼の父——国王自らが稽古をつけてきているからだ。そんな国王を超えるべく、ユーリックは王との稽古の時間以外でも暇を見つけては近衛隊の鍛錬場へ出向くと聞いている。

ちなみに、フレアが以前ユーリックの服を直したのもその鍛錬の時にできた服のほつれだ。ユーリックの相手をしていたのは、他ならないオーランジュであり、彼との手合わせ中にユーリックは服を引っかけ、破ってしまった。しかし父にその事実を知られたくなかつ

たユーリックのためにオーランジュはフレアを捕まえ、その服を直させたのだ。手も早く、その出来栄を気に入ったユーリックは、その後しばしばフレアに内密の繕いものを頼むことになった。――ユーリックがサーシャマリーの部屋を訪れる理由でもある。

そんな自分のあまり大っぴらに公言していない特技を、うっかりとはいえよりによってデュークのような男に知られてしまうとは。ユーリックの申し訳なさそうな顔は、きっとこの男の性格によるところも大きいのだろう。『バラしてゴメン』というところか。

フレアは今日何度目かの諦めの溜息をつくと

「：私にできる限りでしかできませんよ？」

その言葉にやはり大げさな身振りでデュークは喜びを表し、

「もちろんだとも！でも君の腕は殿下のお墨付きだからね！期待しているよ」

どうやら手を抜くことも許されないらしい。内心のイライラを押さえつけるのに苦労しつつ、デュークの手から上着を奪い取った。

「サーシャマリー様から時間は頂いているから、キレイに頼むよ」

ぽん、と肩に置かれた手を今度こそ振り払うようにしてフレアはソファに腰掛けた。

結局、複雑に裂けてしまった服の修復に思ったより時間を取られてしまい、フレアは午前中のサーシャマリーの仕事どころか自分の昼休みを削ってまでデュークの上着を仕上げなければなかった。デュークが上着が出来上がるまで向かいのソファに座り、フレアに――コイツどれだけヒマなんだ？と思わせていたからでもある。

上着が仕上がったのは昼休憩ももうすぐ半ばかというほどの時間。できあがった上着をデュークに押し付け、背後で感嘆の声を上げながらフレアに何事か声を掛ける彼を、聞こえなかったフリという無視を決め込んで部屋から飛び出して来たのだ。さすがに王城内を走るわけにはいかないので、とっさに裏庭に出ると周囲を確認して人

がないとみるや、フレアは自室に向けて猛烈に走り出したのだ。

「アイツラのせいでご飯抜きだろう」

肩を落としながら部屋に入ったフレアだったが、机の上に油紙で包まれた物と手紙が置いてあるのを見つける。

「――オーランジュ様の大切なマントなんだから！絶対間に合わせてよね！！」

リリーの殴り書きのような字だった。サーシャマリーの部屋で先ほどの様子を見ていた彼女たちは、戻ってこないフレアを気にしてくれていたのだ。おそらく面倒事を押し付けられたのであろうフレアが、昼食にも来ないのを見て差し入れてくれたらしい。それが例えオーランジュのためにしたことであっても、今のフレアにはとてもありがたかった。油紙に包まれた、野菜や肉を挟みこんだ温かいパンに感謝して、思わず気持が上昇したフレアは、今日三度目の針を手に取りマントの修復にかかった。

第4話（後書き）

読みにくいですね〜。

わかってるんです。でも、どうにもできないんです（涙）
ごめんなさい！！

第5話

そろそろ日が傾いてくる時間。夕方の休憩も部屋に戻りマントの仕上げをしていたフレアはようやく手を止めた。立ち上がりバサッと広げて出来栄えを確認する。

「…うん、上出来」

先程まで取れていたとは思えない仕上がりに満足すると、マントを畳んで手近にあった布でくるんでいく。できるだけこんなものを持っているところを人に見られたくない。

残り僅かの休憩時間を確認すると、フレアは急いで部屋を出た。

近衛隊の詰める鍛錬場近くの脇道。普段あまり使われることのないそこが、実は今までフレアとオーランジュがこっそり会う時に使っている場所だ。見えるわけでもなく、隠れるわけでもないここは、一言二言で終わるお互いの要件をやり取りするにはうってつけだった。

フレアは出来上がったマントを持って脇道へ急いだ。オーランジュは『来る』と言っていたが、また誰かに見られるよりはマシだろう。鍛錬場脇を通る姿がオーランジュに見られれば、彼はそれとなく脇道へ出てくるはずだ。

案の定、脇道に隠れるようにしていたフレアの前にほどなくしてオーランジュがやってきた。

「悪かったな」

片手をあげて、しかし全く悪く思っていないさそうに現れた。

「悪かったじゃないわよ！あんな所で呼び止めるなんて！」

フレアはグイッとオーランジュの胸にマントを押し付けると、思わず怒鳴りつける。

「…なんで？」

「なんでじゃないわよ！私とあなたが幼馴染だなんて知られたら大

変なんだから！」

「俺は問題ないけど？」

「私には大問題なの！一緒に働いてる侍女仲間にとって問い詰められたのよ？バレたら見知らぬ人からも何か言われるハメになっちゃう」

「考えすぎだろう？」

普段のそっけなさがどこかへ行ってしまったかのようなオーランジュに、フレアも慎ましやかさを脱ぎ捨ててしゃべりまくる。

「あゝ、もう！本当に自分のことわかってないんだから！下手したら侍女だけじゃなくて、貴族のお嬢さんたちにも敵視されるのよ！」

「…誰が？」

「わ・た・し・が！！」

「なんで？」

「あなたが入り婿候補の『超』優良物件だからよ！！」

「物件…」

「そうよ！侯爵家の出で25歳独身、栄えある第二近衛隊副隊長になっちゃったからには…たぶん今頃ご実家には縁談話が降り注いでるでしょうね」

意地悪く言うと、ようやくオーランジュの眉が顰められる。

「めんどくせーな」

「知らないわよ。せいぜいがんばって逃げるのね。くれぐれも私を巻き！込ま！ない！ように！！」

「いいじゃないか、別に。どうせ『幼馴染です』って言うだけなんだろう？」

「言うか！そんなこと知られたら間違いなく目の敵にされるか、体のいい情報源って扱いだわ。あなただって誕生日のたびに追いかけまわされるのはごめんでしょう？」

「…情報なんてやらなきゃいいじゃねーか」

「じゃあ、今後あんな所で呼び止めないでよね」

「…わかった」

言外に『バレたら道連れ』的な脅しを掛けられ、しぶしぶオーランジュは引き下がった。しかし、フレアの次の言葉にはきっぱりと答えた。

「それと、今後はこんな大きな物、城のお針子に頼んでちょうだい」

「…それは断る」

「何言ってるのよ。そもそも本職に頼むのが筋でしょう？」

「お前のが腕もいいし、早い」

そう言うと、押し付けられていたマントを広げ、満足げに出来を確かめている。

「これだけは譲れないな」

「…じゃあ誰かに聞かれたら『幼馴染』じゃなくて『専属お針子』って言うておくわ」

褒められればまんざらでもないフレアは、照れ隠しにそっぽを向く。が、思い出したかのように

「あ、でも『専属』ではないわね。殿下にもたまに頼まれるし。…

さっきはヘンな奴にまで裁縫の腕がばれちゃうし」

「…なんだって？」

思わず愚痴のようにこぼれた呟きをオーランジュが聞きとがめた。

「？なにが？」

「誰に何を頼まれたんだ？」

一瞬、目を細めたオーランジュに驚きつつ

「ユーリック殿下と…第四近衛隊のヘンな奴よ！デュークなんたらっていう」

「第四のデュークって…あのヘラヘラしたぼんぼんか？」

「たぶん、そうだけど。ヘラヘラって…」

フレアがあまりの言いように呆れていると、意外なほど真面目な表情でオーランジュに問われた。

「お前、ちゃんと口止めしてきたのか？」

「……………あっ」

「フレア」

「…忘れた」

頭の上ではあく、と溜息をつかれる。

「だって、昼休憩まで掛っちゃって…あんたのもあったし慌ててたから…」

つい俯いて言い訳めいたことをぶつぶつぶやいてしまう。

たしかに、オーランジュの言うとおりこれ以上あんな『ヘンな奴』を増やさないためには口止めが絶対に必要だったはずだ。焦っていたとはいえ忘れるなんて、とフレアは自分の失態を呪いたくなった。気まづくなってデュークの上着を縫うはめになったいきさつを語ると、黙って聞いていたオーランジュが突然、

「…殿下がらみか。仕方ないな。俺の方でどうにかしとく」

ぼんぽん、と頭に手を置かれたのが慰められているようでフレアは情けなかった。先ほどまで「バレる！バレたら殺される！」くらいの勢いだったのに、自分はなんて抜けているのか。

だが、おずおずと上げた視線を見下ろしていたのは責める気配なんて全く感じさせない、優しい表情の幼馴染だった。

「…貸し、ひとつな」

にやりと笑って言われた言葉に即座に固まったが。

「…！あんたへの貸しなら山ほどあるけど！？」

「そんなことはないな。とにかく、お前は『余計なことは言わない』、俺は『余計なことを言いそうな奴を黙らせる』ってことだ。お互い様だろ？」

オーランジュは頭に置いていた手をぼんぽんしたまま言っただけ。

「……」なんか負けた気がするっ

言い返そうとしたフレアより早く、オーランジュが

「そろそろ戻れ。遅れるぞ？」

「……っ！わかってるわよ！誰のせいでこんな所まで来たと思っ
てんのよ…」

頭上の手を振り払うと、来た道を引き返すべく踵を返した。だが、

そのとたんオーランジュに腕を掴まれた。

「何!？」

ガバツと振り向くと、目の前にやわらかい笑みを浮かべたオーランジュの顔があつて硬直する。

そんな彼女に、フツと笑うと何かを掌に握らせてきた。

「お礼。ありがとな、助かった」

そう言つて今度は彼がフレアに背を向けて脇道から出て行つた。

第6話

キレイに包装されたアメ玉が4つ。オーランジュに握らされたそれをポケットに入れながら、フレアは王女の部屋へ急ぎ足に向かった。

——マントの補修にしては安すぎるわ。

文句の一つも言いたいところだったが、オーランジュから初めて『お礼』をもらったというのは、案外気分のいいものだった。まして、こんなキレイなアメを彼が持っていたのもフレアにはおかしくてたまらない。——どんな顔して買ったのやら。

そっけないと評判の彼が、その表情のままアメ玉を購入する場面を思い浮かべると笑えてくる。

そんな顔のまま仕事に戻るわけにもいかないので、フレアは王女の部屋の前で一度顔を引き締める必要があった。

「フレア、今日はごめんなさいね」

今日は国王一家が揃って夕食を摂られる、というのでその準備のためにフレアはサーシャマリーの身支度を整えていた。たまたま他の侍女達が部屋を出てしまい、一人着替えを手伝っていたフレアに、サーシャマリーは本当に申し訳なさそうに声を掛けてくる。

侍女たちにも心を配るサーシャマリーには、今日の出来事は心を痛めるに足るものだったらしい。また、サーシャマリーはフレアの裁縫の腕を知っているがあまり公言していない彼女の気持ちを思っ、デュークにそのことを話してしまったユーリックにも怒っているようだった。そんな気持ちの優しい王女の言葉に、フレアは心底から嬉しく思い、笑いながら首を振る。

「まあ、姫様。お気になさらないでください。大したことではありませんでしたし、ユーリック様のお手伝いは以前からさせていただいていたではありませんか」

「でもあなた達が出て行ったあと、ユーリ兄様も心配していらしたわ。フレアに悪いことをした、と」

「そんな！本当に大したことではありませんから。お二人にお氣を使っていたいて、勿体ない事ですわ」

「ううん、事情を聞いたのだけど、今回のことはユーリ兄様の不注意よ。服を破ったことも、フレアのことを話してしまったことも。わたくし、兄様にはキツク言っておきましたからね！」

幼さの残る表情で、それでも憤慨している様子の主をフレアは愛しく思う。また、溺愛する五つ年下の妹からお叱りを受けたのである。ユーリックにも、申し訳ない気持ちになる。

だが、これ以上この話をしていると夕食の場で持ち出さないと限らない。国王に鍛錬場へ出入りしていることを知られたがらないユーリックのためにも、ここはなだめておくほうがよさそうだと考え、フレアは話を変える。

「そういえば、今日はユーリック殿下にはハロルド様がお付きになっ
ていなくてよろしかったんでしょうか？」

「ハロルドは兄様のご命令でどこか視察に行かれていますらしいわ。本来なら、第二近衛隊の者がお側にいるのだけれど……たぶんあのデュークの願いのために特別に連れていらしたんだと思うわ。実際、あなた達が出た後兄様の側に来たのは第二隊の者だったわよ」

「さようでございましたか。ハロルドさまもお忙しい方ですものね」
着替えを終えたサーシャマリーの髪を整えるべく、鏡台の前にそつと誘導して座らせる。鏡越しに伺ったその表情に、もう怒りの氣配はない。フレアはよく手入れされたサーシャマリーの黒髪に櫛を入れていく。

「兄様も今年で十八になられるし、お父様も最近はユーリ兄様へいろいろとお申し付けになっているみたいだから……」

呟かれたサーシャマリーの言葉に落ち込んだ雰囲気を感じ取り、フレアの手が一瞬手が止まった。

「サーシャマリー様？」

「：寂しいって言ったら、きっとユーリ兄様を困らせるわよね」

愛らしい表情をわずかに曇らせるサーシャマリーに、フレアは驚き、そして微笑みかける。くるくると器用に彼女の髪を結びあげながら、「ユーリック殿下なら、きっと喜んでしまわれますわ」

「喜ぶ？」

まさか、と鏡越しに目で問いかけるサーシャマリーに、フレアは大きく頷く。

「はい。愛する妹姫様にそう言われて、ユーリック殿下が困るものですか。今よりもお仕事に精を出されて、少しでも多く姫様との時間を持つとされるでしょう」

「でも、そんなご無理をされたら：」

「姫様。お兄様はご自分のお身体を考えられないお方でしたか？」

「：いいえ。何が一番してはいけないかをよくご存知ですもの。そんなことはなさらないわ」

首を振ろうとするサーシャマリーをそっと止め、結びあげた髪を仕上げる。まだ不安そうな表情をのぞかせる彼女に、フレア優しく囁いた。

「その通りですわ。ですから姫様がご心配なさることはありませんよ。甘えられるのも今のうちにしかできないことなんですから」

たしかに、十八で成人となるユーリックにはそろそろお妃選定の話が持ち上がっている。幸い、国王が「ユーリックの好きにさせる」と言っているので今すぐどうこの話ではない。しかし、我先にと娘を皇太子に薦める大臣や貴族たちがいるのも事実で、そうなってしまうてはいかに妹といえどサーシャマリーも遠慮をせざるを得なくなるだろう。フレアを含みに気付いたサーシャマリーは、ハツとして顔を上げフレアと鏡越しに目をあわせてくる。その瞳はいずれ近いうちに現実となるであろう、兄離れの時期を考え今度は悲しみの色を湛える。

それを見て、フレアは優しく微笑みながらそっと、頭を振った。

「大丈夫です。どんなことがあっても、ユーリック様はサーシャマ

リー様のお兄様であることに変わりはありません」

「そうけど…」

なおも落ち込んでいきそうな彼女の気配に、フレアはいたずらっぽい笑みを向けた。

「では、サーシャマリー様。私と賭けをしませんか？」

第6話（後書き）

だら〜っと続きます。

いつかシリ阿斯になる、ハズー！です（たぶん）

第7話（前書き）

台詞の前後に改行をいれてみました。
読みやすくなるといいんですが。

第7話

国王一家が夕食を摂る広間へ、サーシャマリーに付き従い第三近衛隊の隊長とともに歩いていく。扉の前でちよつとこちらを振り返った王女へにっこりと笑いかけると、フレアは優雅に腰を折った。給仕の侍女は他にいたのでフレアが広間に入ることはない。隣の控室で彼女が出て来るのを待つばかりだ。不安そうな表情を覗かせていたサーシャマリーだったが、フレアの顔を見るとひとつ頷いて開かれた扉の中へと入って行く。扉が閉まったところで顔を上げると、ちょうど廊下の先からユーリックが歩いてくるのが見えた。彼のために道を開け、頭を下げていると視線の先にユーリックの靴が見えて、止まった。

「…あゝ、フレア」

気まずげに掛けられた声に顔を上げると、背後に略式の礼装を着たオーランジュを従えユーリックが立っていた。——マントはこの時のために必要だったんだ。一人で合点がいていたフレアに、ユーリックが不思議そうな視線を向けてきたので、慌てて彼に向き合う。

「今日は、すまなかった。デュークに君のことを話してしまつて…」

わざわざ直接ユーリックに謝られ、フレアは驚いて頭を下げる。

「とんでもございません！ 殿下のお役に立てたのなら光栄でございます」

「だが、オーランジュにも言われてしまったよ。あまり広めるとフレアの立場にとって良くない、とね。それにサーシャにも怒られてしまったし」

整った顔を申し訳なさそうにしかめるユーリックの言葉に、思わず彼の背後に立つオーランジュにキツイ視線を向ける。――なんとか、ってこういうことかっ!!

だが、それを見たユーリックも慌てて

「ああ、彼を責めないでくれ。非があるったのは私のほうだ。デュークには今回のことは特別で、二度目はないことも口外しないことも言っておいたから」

「お氣遣いいただきありがとうございます。ですが殿下。本当にもうお氣になさらないでくださいませ。それに：後ろの方も同罪ですわ」

「なに？」

最後の方は声をひそめて告げるフレアに、ユーリックは後ろを振り返る。だが、背後に控えた男は悪びれた様子もない。まったく、といたげに二人が向ける視線の先でオーランジュはあっさりと

「殿下。皆様がお待ちですよ」

と促した。やれやれ、と再びフレアに向き直ったユーリックは

「まあ、そういうことで、今後のことは気にしないでくれるとありがたい」

「心得ましてございます、ユーリック様」

感謝の気持ちを込めて深々と頭を下げたフレアの前を二人が通って行った。

扉が閉まる前、ちらっと視線を向けるとオーランジュと目があった。その表情が『まったく、手がかかる』と言っているようで、フレアは人目もはばからず地団駄も踏みたくなった。

控えの間に入りフレアは今日ようやく一息つけた、と肩の力を抜いた。

今日一日ひたすら時間に追われていたような気がする。部屋の隅に用意されているワゴンから温かいお茶を注ぎ、椅子に腰かけると知らずほうっ、と息が出る。

「それにしても…お腹空いたな」

食事の付き添い担当になると自分の夕食は遅い。おそらくサーシャマリーが部屋から出てくるのは一時程後だろう。いつ呼ばれるかわからない付き添いの侍女は、その間この部屋を離れてはならない。

———今頃みんなご飯食べてるんだろうな

昼は縫物に追われ結局差し入れてもらったパンだけで済ませるハメになってしまったし、普段なら夕方のお茶の時間に何かつまんだりもできたのだが、今日はオーランジュの下へ行っていたのでそれも抜き。とりあえずお茶でお腹を膨らませようとしてみたのだが、あまり効果はないようだった。

———しょうがない。後で食べようと思ってたんだけどな。

こっそりポケットから出した飴の包み紙を、ゆっくりと開いた。

第7話（後書き）

レイアウト変更お試し版です。

2，3話続けてみて良さそうな方に全体を変更していきたいと思
います。

第8話（前書き）

すいません、長いです。
自分でびっくりしました（涙）

第8話

国王一家の夕食は、豪華すぎることもなく、かと言って王家の名に恥じることない品々が並んでいる。以前は『食事は食べきるものではない』というくらい品の数が並び、その中から好きな物を好きな分だけ食べる、という一般市民からは考えられないものだったが、いつの頃からかアーデルヴァイド城内では『そんなのは無駄』と言われ、以来他国からの賓客を招く時以外に膨大な量の食事が作られることはなくなったという。

そんなある意味一般的な家族と同じようにテーブルを囲んだ国王一家だったが、今日の雰囲気はいつもと少し違っていた。ふだんなら両親や兄に最近の出来事を話したり、また逆に話をせがんだりしている妹姫――マナー的に良くはないが、一家での食事の時のみ王妃が許可をしている。――が、今日は黙々と食事に専念しているからだ。向かいに座るユーリックも『自分のせいかもしれない』と、午前中にサーシャマリーから怒られたことを思い、なんと声を掛けていいのかわからずチラチラと妹の顔を盗み見るばかりだ。

二人の子供の様子に両親も不審に思い、たがいに声には出さず目配せをし合っているため、一家の食事はいつになく静かに進んだ。とうとう食後のお茶が供された時、上座に座る国王が妻に押し切られた形で口を開いた。

「サーシャマリー。ユーリックと何かあったのか？」

低く威厳のある声で父に問われ、サーシャマリーはおずおずと視線を上げるとゆっくりと頭を振った。

「いえ…」

「では、どうしてそんな顔をしているの？」

隣に座る王妃が優しく聞いてくる。ユーリックも心配そうに妹を見つめていた。三人の視線に耐えられないかのようにまた顔を俯かせてしまったサーシャマリーに、王妃が娘の髪に手を滑らせながらなおも問う。

「サーシャ。なにか悩んでいるの？それとも：ユーリックが何かしたのかしら」

「っ！違います！！兄様は何も悪いことはしてませんわっ。私が勝手に：」

両親がユーリックを見つめていることに気付いたサーシャマリーは慌てて二人を止める。

「勝手に：どうしたの？」

「……。あの、お父様？」

娘の呼びかけに視線を戻した国王に、サーシャマリーは意を決したように顔をあげた。

「ユーリ兄様は、もっとお忙しくなるの？」

「いや：しばらくは今の状況に慣れてもらうために仕事を増やすつもりはないが？」

「そう、ですか」

どこかほっとしたように言う娘に国王は先を促す。

「……兄様が、最近お忙しいようなので、その：」

「なんだ、寂しかったのか？」

「……はい」

再び視線を落とす姫に、隣から王妃の優しげ声がかかる。

「サーシャ」

「はい」

「そういうことは、言ってもいいのよ」

「でも：兄様はそろそろお姫様をお選びになるから、わたくしは少し遠慮しなくては、と：」

今にも瞳が潤みそうになるのを必死でこらえるサーシャマリーに、両親は穏やかな眼差しを向ける。

だが、そう言われた兄は眉間をわずかに寄せながら

「サーシャ。誰かにそう言われたのか？」

「いえ。ですからわたくしが勝手にと：」

「ならばそんなことを気にする必要はない。私は好きでお前との時間を作っていたんだ。：たしかに、最近父上から任せていただいた新しい仕事に慣れず、執務に時間を取られてしまっていたが。もう時機に落ち着くはずだから。：すまなかったな」

眉尻を下げながら言うユーリックに、サーシャマリーは目をあわせて聞く。

「：ご無理をさせてしまうんじゃないですか？」

「この程度で『無理』と言っていたら父上から見放されてしまうよ」

肩をすくめながら言う兄に、ようやくサーシャマリーが表情を明るくさせる。

そんな兄弟を見つめながら、王妃も彼女の手を取りながら微笑みかけた。

「そうよ。それにお父様はまだまだご健在ですからね。私たちはユーリックの結婚も急いでいないし。あなた達の時間を大切にしない」

「さっさと引退して田舎にひっこむのもいいがな」

父の言葉に兄弟が目丸くするが、長年の付き合いで冗談だとわかっている王妃がたしなめる。

「心にもないことを言わないでくださいな。：ユーリック。確かに、あなたはこの国の皇太子であり、ゆくゆくはこのアーデルヴァイドを背負わなくてはいけないわ。結婚も、必ず必要になってくるでしょう。でもね、私たちは政略的なことの前に、あなた自身が『大切だ』と思える方と添ってほしいと思っているのよ」

「そうだな。周りほそろそろ騒がしくなるだろうが、お前が納得して決めるといい。妻や妹の心にすら寄り添えない男が王になるべきではない、と私も思う。」

「父上、母上：」

思いもかけず両親から己の将来について語りかけられ、ユーリックも驚く。そんな息子にいい機会だとばかりに国王は飲んでいた茶のカップを置いて続ける。その姿にユーリックどころかサーシャマリまで居住まいを正した。一人、王妃だけはすべてわかつているかのように微笑んでいる。

「アーデルヴァイドでは男児は十八で成人する。それはお前も例外ではない。だが、成人したからといって突然何もかもができるようになるわけではない。だからこそ、以前よりお前にいくつか仕事を任せてきた。だが、それは決してサーシャマリや私達との時間がないがしろにさせるために行ってきたのではない。むしろ、王家な

のにこのような『家族』として関わり合いを持っている国は少ないだろう。だが、私はお前たちの将来にとってこの時間は必ず必要なものだと思っている」

二人の兄弟はじつと父を見つめている。その瞳をしつかりと見つめ返し、最後に妻に視線を送る。すべてを理解しているかのような王妃は、その視線にひとつ頷いて答えた。

「…かつて、アーデルヴァイドは戦いの中にあつた。それはお前たちが生まれる直前まで続いていた。我が国は今もお『大陸に敵なし』と謳われるほどの軍事力もある。かつて知る者の中には『国を広げる』と言って来る者もある。だが、私は二度とこの国を戦乱の中に落とすことはしないと誓ったのだ。人々の声に耳を傾け、その気持ちに添うよう努めようと思った時。…国民の誰も戦いを望んでいた者などいないことに気付いたのだ」

知らず握りこんだ国王の拳に、兄妹はハツとなる。――父は後悔しているのだ。そして、その罪ために負った重みを今なお背負い続けている。血に塗れた過去を繰り返さないために、きつとあえて消さないのだろう。

その父を長年傍らで支え続けてきた母が、そつと席を立ち国王の隣に寄り添った。父は肩に置かれたその手に顔を上げ、自らの手を重ねる。険しくなっていた表情を緩め、再び兄妹に向き直った。

「国を治めるには時には非情な決断も必要だろう。だが、常に人の言葉に耳を傾け、その心の声を聞け。己が最善だと思う道を必ず見つけなさい。そして、ユーリック。良き王となるのだ」

「サーシャマリー。あなたがユーリックを思う気持ちはとても大切よ。自分をわがままだと思ってしまうことも、私は悪いとは思わないわ。でもね。あなたが自分の心を殺さず素直に兄に甘えること

も、ユーリックが人の心を知っていくのに必要なことだと思うの」

「兄を煩わせたくないと思う気持ちがお前にある分には、私たちはお前を止めるつもりはない。それよりも、お前がそんな顔をしていることの方がユーリックの気掛かりになってしまうのではないか？」

温かい言葉に励ましと愛しみを感じられた兄妹は、お互いの顔を見やって、ようやく表情を緩める。

サーシャマリーも本来の笑顔を取り戻し、ユーリックに向かって可愛らしくぺこりと頭を下げる。

「はい、お父様。兄様、ごめんなさい」

「私こそ、気付かなくて悪かった。今度お詫びに何か甘い物でも持って行こうかな？」

ユーリックはその笑顔に応えるように言って立ち上がり、妹の隣に来るとその傍らに跪き、その手を取る。

「サーシャマリー、私の小さな姫君。どうかこの不甲斐ない兄を許してはもらえないだろうか？」

その小さな指先に軽く唇を寄せ、彼女の顔をチラリと見やる。兄の行動に驚いたサーシャマリーだったが、すぐに満面の笑みを浮かべる。

「もちろんですわ、お兄様。これからもいっぱいわたくしのわがままを聞いて頂きますからね！」

「それはこわいな。覚悟しておくよ」

「：ユーリックよりもサーシャマリーの結婚の方が大変そうね」

仲睦まじい二人を嬉しそうに見守っていた王妃の言葉に、兄妹は揃

って笑う。

立ち上がったユーリックはそんな両親に向かいなおり、右手を胸に当て表情を改める。

「父上、母上。私はこのアーデルヴァイドを治める良き王となるよう、ここに改めてお誓い申し上げます」

軽く頭を下げて宣誓するユーリックを王妃は軽く抱きしめた。

「ありがとう、ユーリック。大変でしょうけど、がんばってね」

「はい、母上」

頷き、母を抱きしめ返すとユーリックは席へ戻った。

王妃はそんな息子を誇らしげに見やり、そしてちよつといたずらっぽい顔をする。

「そうそう、ユーリックの結婚の件ですけどね。心配しなくても全然大丈夫よ」

「?はい」

「だって、陛下が私と結婚したのなんて三十ですもの。それまでは逃げられるわよ」

「…二九だ」

いっそ朗らかに笑う王妃に国王がむっつりと訂正すると、今日ようやく広間に一家の笑い声が広がった。

閑話 【国王夫妻の夜】（前書き）

いい年した人たちがイチャイチャしています。
苦手な方は飛ばしてください。

本編には全く関係ありません W W W

閑話 【国王夫妻の夜】

夜。国王と王妃の寝室では、王妃だけが一人、開かれた窓の外を眺めていた。部屋の明かりをすべて落とし、月明かりのみで庭園を見下ろす。その手には一冊の大ぶりの手帳。その表紙を愛おしそうになる。

静かに扉が開かれ、夜着を纏った国王が入ってくる。

「なんだ、起きていたのか」

「ええ。なんだか懐かしくて」

これ、と差し出された手帳を受け取った国王が中を開き、ああ、と目を細める。

「子供らの幼き時の物だな」

「それはまだサーシャマリーが生まれたばかりの時のね。あの時から二人はお互いにべったりで：少々妬けていたわ」

手帳には子供たちの成長記録とともに、折々に触れ王妃が取った二人の手形、足形がうつっている。幼いサーシャマリーの物はどこどころこすったような跡も見られるが、それもまた大切な思い出の一つだ。

ぱらぱらと手帳を眺めて国王は彼女にそれを返す。

「こんなに小さかったのに：あつという間ね」

「そうだな。私が隠居できる日も近そうだ」

「またそんなことを！思ってもいなくせに子供たちを驚かせないで」

王妃が傍らに立つ国王の腕のあたりを軽く叩く。それに苦笑しながら

「まあ、まだしばらくは掛るだろうな。ユーリックに国を渡す前に、私にはまだまだしなくてはいけないことがある」

「…そうね。もう少し、陛下には頑張っていただきませんと」

今叩いたばかりの手で、今度は優しく彼の腕を撫でる。つ、と眉を上げた国王は王妃のその手を取り意味ありげに笑いかけた。

「他人事のように聞こえるぞ」

「そうかしら？ 私も早く田舎へ行きたいですわ、陛下」

「…よく言う」

結婚以来、王妃は今までその立場に付いていた誰よりも精力的に政務に努めてきた。在位十九年でその地位は確固たる物となり、国王から政治についての相談を受けることも多々ある。彼女はそんな生活を大いに楽しみ、励んできた。いまさら田舎でのどかに生活する姿など想像がつかない。

見上げてくる王妃のごく薄い色の金髪に顔を寄せ、彼は楽しそうに呟く。

「では、お前が王都から離れがたくしなくてはならないな」

「…どうということ？」

王妃の体をすくい上げ、窓を閉めると国王は部屋の奥へと歩き出す。

「ユーリックとサーシャマリーは仲が良すぎる。あれでは本当に後々結婚に支障が出るかもしれندらう」

「まあ、確かに。でも、さっきは…」

「あれもまた本心だ。だから、もう一人弟か妹がいればいいのだろ

う？」

「…本気ですか？」

「お前も幼い子を残して田舎になど行けぬであろうしな」

楽しそうに言う国王に、呆れたような、しかし嬉しそうな顔で王妃は答える。

「…五十歳なのに、お元気ですね」

「まだ四十九だ」

———国王夫妻の夜はゆっくと更けていく。

第9話

国王一家が部屋へ戻るとの先触れがあり、侍女が広間の前に並ぶ。フレアも控えの間を出てサーシャマリーを待つとほどなくして扉が開かれ、国王を先頭に一家と近衛達が出てきた。頭を垂れて国王夫妻が通り過ぎるのを待っていると、小さい足音がフレアに近づいてきた。

「フレア！あなたの言ったとおりだったわ！」

「姫様っ！そのお話は…」

満面の笑みで駆け寄って来るサーシャマリーを慌てて止める。何事かと国王夫妻も一瞬足を止め振り返るのが視界の端に映る。その様子にサーシャマリーもハッと自分の口を押さえて周りを見る。彼女の後ろから出てきたユーリックも驚いた顔をしている。

「なんでもありませんわ。行きましょう、フレア」

取り繕ったような笑顔でその場をごまかすと、サーシャマリーはフレアを従えて歩き出した。

ちらっとユーリックの方を見ると、その背後にいたオーランジュが明らかに不審な顔をしている。

————バレたかな？

内心冷や汗ものだったが、足早に部屋へと戻るサーシャマリーに付いていくことでその場を逃れた。

「それでね、お母様なんて『もっと甘えていいのよ』とまで仰ってくれて……！」

「それは、ようございましたね姫様」

「でもね、その後の兄様ったらひどいのよ！いきなり私に跪いたかと思ったら『私の小さな姫君』、なんて言うんですもの！」

「あら、それは素敵ではないですか」

「そりゃあね、ユーリ兄様がそんなことなさったらびっくりするくらいカッコいいのよ。でも、よく考えてみて？」

興奮冷めやらない様子で話し続けるサーシャマリーに、フレアは髪をほどきながら相槌を打っていた。

事の顛末を話そうと、サーシャマリーは他の侍女たちを湯浴みや就寝の準備に追いたて、自分の側にフレアだけを残している。

普段の優雅さよりも年相応のあどけなさを前面に押し出して、サーシャマリーは頬を紅潮させながらフレアに聞く。そんな彼女に鏡越しで視線を合わせながら、フレアは首を傾げた。

「……ユーリック様ではご不満ですか？」

「まさか！不満どころかこれ以上ないくらい満足よ！物語の王子様そのものだわ！でもね、兄様にそんなことされたら、わたくし他の方が同じことをされてもドキドキしなくなってしまうと思わない！？」

「はあ……それは、殿下と比べて、と言うことでしょうか？」

「そうよ！わたくしだってゆくゆくは他の殿方と恋をしてみたいと思っっているのよ。なのに、兄様があんなに素敵では太刀打ちできる殿方なんてそうそういないじゃない！」

「……まあ確かに。」

ユーリックは父譲りの金茶の髪と濃い緑色の瞳を持ち、精悍な中に母譲りの甘さのある顔立ちをしている。剣の稽古を怠らない身体も背が高く、しなやかに筋肉がついていて無駄がない。本人は着痩せする体型を気にしているようだが、皇太子妃の座を狙う上流階級のご令嬢達からは、サーシャマリーはが言ったように『物語の中の王子様』を地でいく風貌は人気が高い。

そんな彼が跪くなど、現在のところ国王夫妻と溺愛する妹以外ないのだろうが、その場を想像しただけでフレアはサーシャマリーはが少し気の毒になった。

「きっと現れますわ、姫様だけの王子様が」

「だいいのだけど。お母様も『サーシャマリーの方が結婚に苦勞しそうね』なんて仰るし…」

「でも、その時はまだ少し先のようではないですか。その素敵な殿方が現れた時に、また考えましょう」

「…そうね。そうするわ。その時はまた相談に乗ってちょうだいね、フレア」

「もちろんですわ、姫様」

解いた髪を梳かしながら笑顔でフレアは請け負った。

そして一通り話し終えて満足したサーシャマリーの隣に膝をつく、今度はその顔を見上げる。

「さあ、姫様。私との賭けの結果はいかがでしたか？」

それを聞いてサーシャマリーはちよつと拗ねたように肩をすくめる。

「あなたの勝ちよ、フレア。ユーリ兄様に嫌われるかも、なんて愚かな考えだったわ」

「では、お約束通り私のお願いを聞いてくださいますか？」

「ええ、なんでも言ってちょうだい」

なかば投げやり気味な王女に、フレアはにっこり笑うと

「では。今度外でのお茶会の席にこれを身につけていただだけませんか？」

そう言って差し出されたのは真っ赤なりボンで止められたレース編みの手袋だった。

驚いてそれを受け取ると、サーシャマリーはフレアの顔を見つめる。

「キレイ…これ、どうしたの？」

「私が編みました。姫様のお手に合う手袋がなく、いつもサイズを直されて使ってたしゃったのを見ておりましたので。レースで編んであるので多少伸びますし、姫様のお手に合うように作ったつもりなのですが」

サーシャマリーの手は指が細く長い。しかし十三の娘の体はまだ成長途中で、ほとんどの女性が使う手袋だと二の腕まで覆ってしまう。腕の長さに合わせると指がキツイ。そのため、いつも彼女が外出の際日除けのために使う手袋は、一度城のお針子の手で直されていた。だが、なかなかしっくりくる物がないのか、彼女は手袋をするのをいつも嫌がっていた。

フレアが渡したのは、白く細いレースで細かく編み上げた繊細な模様の手袋だ。いつも側に仕える主人の手に合うように作られている。

「…いいの？」

「もちろんです。私が作った物を使ってください、なんて差し出がましいようでなかなか申し上げられなかったのですが。ユーリック

様とのことはチャンスでしたわ」

おどけて言うフレアに、サーシャマリーはそつとりボンをほどいて手袋に手を通す。

「ぴったりよ…それに肌触りもいいし。気に入ったわ！ありがとうございます、フレア！」

「お気に召していただけたのなら、私も嬉しいですわ。でも、これは姫様が賭けに負けたせいですので、絶対に使っていただきますよ」
「もちろんよ！久しぶりにお茶会が楽しみになった来たわ！」

本心から喜んでくれているらしいサーシャマリーにフレアも笑顔を返す。そして、おもむろにポケットからもう一つの物を取りだすと、彼女の手袋に包まれた手のひらにそつと乗せる。

「そして、こちらはお約束の姫様が頑張られたご褒美です」

白い手袋の上にきれいに包装されたアメ玉が3つ。城内でなかなか口にするこのない、市井のお菓子は、実はサーシャマリーの好物だった。

「ないしょ、ですよ？」

片目をつぶって人差し指を口に当てるフレアに、サーシャマリーは大きく頷いた。

第9話（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

お気に入り登録、評価も感謝しています！
励みになります♪

さて、そろそろ誤字・脱字を直そうかと…
恥ずかしくなってきた（笑）

第10話

「やっぱりお前の仕業か」

翌日。近衛隊の鍛錬場横をたまたま歩いていたフレアは、オーランジュに脇道に引っ張り込まれた。

昨日の夕食会でユーリックの背後に控え、一家の会話一部始終を見ていた彼は、サーシャマリーについてフレアに聞きたためタイミングを見計らっていたらしい。

最初は驚いていたフレアも、オーランジュの話の内容を聞いてあっさりと白状する。

「姫様があんまりにも考え込んでいらっしやったから。でも、結果オーライでしょ？」

「…あんまり肩入れしすぎるなよ？」

「なんで？ お仕える主人の憂いを少しでも晴らしたいと思っただけじゃない」

それがなぜそんなことを言われるのか理解できない、といった風に顔をしかめるフレアに、オーランジュは呆れたようなそぶりさえ見せる。

「…あと何年働く気だ、お前は」

「うーん、殿下がご結婚なさるまで？」

ユーリックの結婚時に憂うかもしれないサーシャマリーの相談に乗る、ということは必然的にその時までにはサーシャマリーに仕えていなければならない。昨日の国王一家の様子だとあと数年は掛りそうだ。傍らでその会話を聞いていたオーランジュはその先の長さに顔

を顰める。

「…嫁き遅れるぞ」

「しっつれいね！！私が結婚できないとでも言いたいわけ！？」

オーランジュの言葉を曲げて捉えたらしいフレアは声を荒げる。
そうじゃなくて、と言うオーランジュの声も耳に届かない。

そもそも伯爵家の出であるフレアは本来侍女となる必要などなかったのだ。しかし彼女は、生来の行動的な性格によって家の中でおとなしくしお茶をしている、などという貴族のご令嬢の生活が我慢ならなかった。社交界にも一応デビューしたものの、貴族社会にありがちな表面的なお世辞のし合い、腹の探り合いに一度でうんざりした。父親の顔を立てるだけの数の夜会やパーティーに出席すると、その後はどんな誘いにも首を縦に振らなかった。

そんな彼女がある日父親に『働きたい』と申し出る。放っておいたらすぐにでも街で売り子でも始めそうな娘に、頭を悩ませた父親は『王城でなら』という苦肉の策を提案したのだ。伯爵の地位を持ち、城内でも財務大臣の座に就く父の『せめて自分の目の届く範囲で…』という半ば泣き落としの提案に、フレアはしぶしぶ折れたのだ。結果、サーシャマリーという慕うことのできる主の下で働くことのできた彼女は、今の状況に大変満足していた。その仕事を辞めて家に帰るなど、今はとても考えられない。

だが、勤め始めて早3年。フレアもじきに二十歳になる。親の地位も盤石なだけに、それこそ実家には縁談が降って沸いているはずだ。だが、この調子だと自分のことよりもサーシャマリーを優先させて結婚のことなど本当に頭になさそうだ。

オーランジュは目の前で、自分はどうなんだ、とか、この二重人格とかぶつぶつ呟いているフレアの頭に手を乗せてぼんぼん、と宥めるように叩く。

「…まあ、ほどほどにしとけ」

「わかったわよ！あ、それよりもき、昨日のアメってもうない？」

「アメ？なんだ、もう全部食ったのか？」

「ちがっ…わないけど！おいしかったから、もうないかな〜、思
って」

完全に何かごまかした様子のフレアだったが、彼は溜息一つで問い
詰めるのをやめた。

「…ちょっと待っとけ」

そう彼女に言うと、脇道から一人出ていく。残されたフレアは他の
人に見つからないよう、茂みの脇にしゃがみこんだ。

「結婚、かあ…」

フレアだとしてまったく考えてないわけではない。二十歳ともなれば
周りの友達の祝い話などそこらじゅうに転がっている。結婚式に参
列すれば羨ましいと思うことも度々ある。だが、実感が湧かないの
だ。結婚して家庭に収まって大人しくしている自分に。その原因も、
自分では理解しているつもりだった。

知らず、膝を抱え込んで蹲っていたフレアの耳に近づいてくる足音
が聞こえた。

「フレア？」

自分を探している声がオーランジュの物だとわかり、茂みから立ち
上がる。

「何してんだ？」

「…かくれんぼ？」

へこみそうだった気持ちをごまかすため、フレアはわざとおどけて答える。はあ？と呆れているオーランジュの手に目をやれば、またしても布の固まりを持っていた。

「…なに、それ？」

「縫っといってくれ。別に急がない」

そう言って彼女に押し付けられたのは、明らかに私服とわかるシャツが2枚。広げてみればボタンが取れかけている物と裾がほつれている物だった。

「急がないならお針子に出しなさいよ！」

「私服だから無理だろう？」

「じゃあ誰か他の人に頼めばいいじゃない。こんなのも縫えないの？」

「別にいいけど…アメはいらないんだな？」

「いるわよ！」

ずいっと手を出してくるフレアに、ニヤリと笑ってオーランジュはその手を掴む。

「じゃあ縫っとけ。これはご褒美だ」

手のひらに包まれたアメ玉を乗せて握らせる。その言葉にフレアは唇を尖らせる。

「…わかったわよ」

その様子を見てオーランジュは視線をちょっと遠くに走らせ、次の瞬間フレアの腕をグイッと自分の方へ引き寄せた。驚きに目を見張る彼女に視線を合わせ、軽く微笑むと耳元に顔を寄せてくる。

「フレア…」

「な、なにっ!？」

オーランジュの息が耳にかかる。そのくすぐったさとあんまりな体勢にフレアは頬が赤くなるのを感じる。身を振ってもびくともしないオーランジュの体に内心悲鳴をあげていると、耳元でクスリと笑われる。

「…太るぞ」

「~~~~っ!!よ、余計なお世話よっ!!」

顔を真っ赤にして彼の胸を押すと簡単に離れた。預かった服を胸に抱きこみ、2、3歩後ずさって顔をあげれば、オーランジュはすでにフレアに背を向けて歩き出していた。

「こんのっ!セクハラオヤジっ!!」

叫ぶフレアに顔だけ振り返ると、オーランジュは笑いながら手を振って去って行く。

残されたフレアは声をあげながら走り回りたい気持ちを抑えるのに必死だった。

—————本当にどこがいいんだか、あんなヤツ!!!

第11話（前書き）

2つにわけようかと思ったんですが…
説明だけになりそうだったのでやめました（笑）

第11話

フレアと別れたオーランジュは、脇道の角を曲がると表情を消し去った。彼女と話している時こそ変化はあるものの、城内での彼はこちらが標準仕様だ。――王族を守る立場にある自分には感情も表情もいらぬ。オーランジュはそうして常に自分を律していた。鍛錬場には戻らず、しばらく脇道を歩くとぽっかりと開けた場所に出る。以前は小さな東屋があったが4年ほど前の大雨で壊れ撤去されて以来そのままにされている場所だ。

そこでオーランジュは立ち止まると、前を向いたまま声を出す。

「…いつまで隠れている気だ？」

その言葉に、数メートル後ろからゆっくりと人影が姿を現した。明るい金髪をうっとうしそうに払いながら現れたのはデュークだった。

「やれやれ、さすがに副隊長殿にはバレバレだったかな？」

嫌味ったらしい物言いは、先日サーシャマリーの部屋を訪れた時とは違い多分に棘を含んでいる。

「…もう少し気配を殺す訓練でもするんだな」

ようやく振り返ったオーランジュは無表情のままデュークを見据える。その目つきが気に入らない、とばかりにデュークはあからさまに不快そうな顔をする。

「ふん、大きなお世話だね。君こそ、逢引するなら場所を選んだほうがいいんじゃないか？ 貴族のご令嬢方に愛想を尽かされるよ」

「願ったり、だな。いいかげん鬱陶しくてたまらん」

「今のうちに強がっておけ。しよせん侯爵家の二男ができることなどたかが知れている」

「勝手にしろ。俺はお前と遊んでるほど暇じゃないんだ。要件を言え」

取りあう気がなさそうなオーランジュにデュークはますます顔を歪める。だが、今度は勝ち誇ったように胸を反らしてくる。

「あのフレアという侍女、ずいぶん仲が良さそうじゃないか」

「だからどうした？」

『フレア』という言葉に一瞬反応しそうになったが、オーランジュは理性でそれを押し留める。デュークに付け入る隙など与えてやる必要はない。なおも表情を崩さないオーランジュに、デュークは引きつったような笑みを向ける。

「隠さなくてもいいだろう。今さらお前に女がいたところで近衛は誰も驚きはしないさ。それどころかライバルが減って喜ぶ奴ばかりだろう」

「あいつは関係ないな」

「そうやってお前が彼女をかばうことが、すでに特別の証しだ。まあ実際、近衛隊の中でお前にかなう奴なんてそうはいないからな。面と向かって喧嘩を売るような馬鹿はいないけど……」

「…何が言いたい」

回りくどいデュークにオーランジュは苛立ってくる。その様子にデュークはニヤリと笑う。

「私の叔父が後妻を探していてね…城に誰かいないかと言われて参

っているんだよ。若くて美人がいいと言われていたんだが、あいにく私には彼に紹介できそうな女性がなくてね」

「…それがどうした」

嫌な予感に眉をしかめたオーランジュに、デュークはさも仕方がない、という風に肩をすくめる。

「彼女、フレアならきつと叔父も気に入るだろう。なんせあの通りの美人で気立ても良く、スタイルだっていい。それになにより…あの珍しいスマイレ色の髪だ」

その言葉にオーランジュが固まる。

「なん、だと」

絞り出すように出た声に満足げなデュークは、オーランジュを見下すようにしてくる。

「ああ、私の叔父は少々変わった趣味があってね。珍しい物を集めるのが好きなんだよ。彼ならきつとフレアの髪を気に入って、すぐにでも後妻に、と…!!」

デュークが話し終わる前にオーランジュが一気に距離を詰めて、彼の胸倉を掴み上げる。頭半分は高いオーランジュに掴まれ、デュークの踵は地面から離れる。

「二度と！フレアの髪のことを口にするな!! お前ごときが触れていい話ではないっ!!」

「く、くるし…っ!」

「…次はない。叔父とやらには他の女を探すんだなっ」

突き飛ばすようにデュークを離すと、彼は勢いで地面に倒れこむ。

「わ、私にこんなことをしてっ！タダで、済むと思っているのか！？」

オーランジュよりも地位の高い公爵家に連なる家の出のデュークにとって、このような屈辱は初めてであった。顔を真っ赤にして必死の形相のデュークに、オーランジュはゾツとするような冷たい笑みを向ける。

「…俺を敵に回して、タダで済むと思っているのか？」

顔を一気に青褪めさせたデュークにほんの一瞥をくれると、オーランジュはその場を後にした。

協道を鍛錬場へ向けて歩きながら、オーランジュは一人考え込む。――そもそも殿下にフレアを紹介したのが間違いだったか。

フレアが王城で働き出した当時、城内の多くが色めきたった。十七歳になったばかりのフレアは、幼馴染の鼻目目を差し引いても美人だった。当時はまだ愛らしさも残り、さらに明るい彼女は周囲の目を引いた。社交界にも一時出ただけだったので、その姿はなおさら注目を浴びていた。

ただ、ひととき人々の口に上ったのは彼女の髪の色だった。フレアの髪は珍しいスマイレ色だ。この国でその髪の色はまず生まれえない。突然変異で100年に一度、万人に一人いるかいないかとされている。幼いころのフレアは全く気にしていなかったのだが、ある日を境に彼女はその色をいっそ憎むようになった。その理由も、その

後の彼女がどうなったのかも隣で見てきたオーランジュは、フレアの耳にその噂が届く前に一掃したつもりだった。

だが、彼自身もまだ一介の近衛隊員であり、その力が及ぶには限界があった。そこで、彼女の父親が取ったのが『王女殿下の専属侍女』だ。その立場なら他の貴族たちの目に触れる機会も少なく、また教養の行き届いた者だけが国王一家の身边につくので不安要素は最小限に抑えられるだろう、との考えだ。すでに王城で働き始めていたフレアの兄――ランスイットと3人で顔を突き合わせ、フレアが平穩に王城勤めを過ごせるよう尽力してきた。心のどこかで『すぐに辞めるだろう』と高を括って。

しかし、その予想を大いに裏切りフレアは今も王女の侍女として日々を忙しく過ごしている。どうやら彼ら3人が必死に策を弄したにもかかわらず、その効力もそろそろ切れかけているらしい。デュークがいい例だ。

それに、フレアもいけない、とオーランジュは思う。3年経って、彼女は愛らしさよりも華やかさが増してきている。希有な色の髪に負けることなく、その姿は人目を引く。なのに、彼女は周囲に対してオーランジュ曰く猫を被って周りの評価をあげている。どちらかというとこちらの方がやっかいそうだ。だが、彼が最も警戒しているのは別だった。

「問題は、殿下だよな…気のせいだいいが」

頭をガシガシとかき回しながら、オーランジュは鍛錬場へ足を踏み入れた。

第11話（後書き）

明日は小話アップです。

しかし！予想外に長く（またかよ）なってしまったので、別作品として投稿しました。

題して『幼馴染とシスコンの毎日』（どんなんだ！？）です。
よろしかったら見てください。

評価、感想ありがとうございます！

頑張って書きますので、続きもよろしくお願いします♪

第12話（前書き）

相変わらず長くてすいません…

第12話

オーランジュの私服を持って、フレアはこそそと自室に戻った。誰のかわからない服でも、明らかに男物を持っているのはまずいだろう。部屋の前まで来てようやくほっとした時、背後から声を掛けられる。

「フレア！どこに行ってた…ちよつと、なによ、それ！」

振り向けば廊下の先からリリーがものすごい勢いで走って来る。

「————ヤバッ！！」

慌てて部屋のドアを開けようとするが、焦ってカギが開かない。もたもたしている間にフレアはリリーにガシッと肩を掴まれた。服を背中に隠し、そろり、と彼女をみあげれば、怖いくらいににっこりと笑った同僚がいた。

「ほほほ、フレア。ちょーつとお話しましょう？お部屋にお邪魔してもいいかしら？」

「————目がコワイ…」

気迫につられて思わずコクコクと頷くと、リリーは彼女の手から鍵をもぎ取り扉を開ける。二人で部屋に入るとゆっくりと閉めた。

「えつと…お茶でも…」

言い終わる前にさっさとフレアのベッドに腰かけたリリーが自分の隣をぼんぼんと叩く。座れ、ということらしい。諦めてリリーから体一つ分間を空け、座る。隣から流れてくる気配が恐ろしい。なん

と言いつくしょうか、必死で頭を回転させていると、先にリリーが口を開いた。

「それって、また、オーランジュ様、の？」

ドキッとして思わず肩がピクリと動く。それを見逃さなかったリリーはガバッとフレアの両肩を掴んで揺さぶってきた。

「そうなのね！ちょっと、どういう関係なのか、今日こそは白状してもらおうよ！！」

「あゝ、リリー？私そろそろ時間が…」

「何言ってるのよ！それであなたを探していたんだから！今日の夜の当番をネルとアデリーが代わってほしいって。だから私たちは今から夕方まで休憩よ！」

「……なんて都合の悪い…」

フレアは自分の運の悪さに天を仰いだ。

リリーの追求から逃れる言い訳もできないばかりか、この後夕方からサーシャマリーの就寝まで休憩なしだ。本来ならこの休憩時間にじっくり体を休め、軽食でもつまんでおけば乗り切れるのだが、リリーがそうさせてくれるのはおそらくフレアが彼女の気が済むまで質問に答えた後だろう。

チラリと見れば、さあ話せ！とばかりのリリー。オーランジュとの会話を思い出して、まあいいかとフレアは息を吐く。

「…誰にも言わないでね？」

「それは内容によるわね！」

「あんまり広まると彼に迷惑がかかるかもよ？」

「それは、困るわ。わかった、約束する。誰にも言わないわ！」

本当かな、と思わなくもないが、きっとオーランジュを慕う彼女の
ことだ。迂闊なことはしないだろう。明るくて奔放な面もあるリ
リーだが、案外口が堅いのは今までの付き合いでなんとなくだがわ
かる。

なるべくリリーと視線を合わせなくてもいいように、フレアは今
オーランジュから預かった服を直しながら話すことに決めた。

「…幼馴染なのよ」

「…うっそ！だってあなた達の家は近くもないじゃない！！」

「そう、ね。王都の屋敷は全然近くないわ。でも、別荘のあるリュ
ートではすぐ隣なのよ」

王都からほど近いリュートは穏やかな気候の土地で、貴族たちの
別荘地として有名だ。フレアが五歳になる年に父であるダングレイ
伯爵がそこに別荘を構えた。その時敷地を隣り合わせて建っていた
のが、オーランジュの実家であるグレンバック侯爵家の別荘だった。
王都には同年代の友達が大量いた二人だったが、別荘地ではお互い
が一番年の近い相手だったので、フレアの兄を合わせた三人は自然
とよく行き来するようになった。――当時、次期財務大臣候補とし
て頭角を表していた父がグレンバック侯爵と親交を深めるためもあ
ったかもしれない、ということに気付いたのは城に上がる少し前く
らいのことだ。

当時の三人に別荘での休暇は、王都の屋敷での勉強や作法の講義
といった子供には煩わしいことから解放される貴重な時間であり、
フレアとオーランジュは年の差が五歳ありながらもよく共に遊んで
いた。もともと女の子にしては活動的だった彼女も、兄達と野原や
森を駆け回ることをとても楽しんでた。春と秋の年に2回程度だ
ったが、お互いの家族も生き生きとする子供たちのためにリュート

での時間を大切にしていた。

オーランジュの服にボタンをつけなおしながら、そんなことをフレアは語る。リリーは何が楽しいのか目を輝かせながら聞いている。

「まあ、幼馴染って言っても会った回数自体はそう多くはないんだけど。兄と彼は王都でもたまに会っていたみたいんだけど、私は別荘でしか遊んだことはなかったわ」

「それが、お城勤めで運命の再開……」

「そう……って、運命の……っておおげさじゃない？」

針から顔をあげ、リリーを見て驚いた。両手を胸の前に組んで天井を見上げるその瞳はうっとりしている。

「……え？なんで？」

思わず眉をしかめるフレアにお構いなしにリリーは呟く。

「幼いころの淡い初恋の思い出。年に数回しか会えない相手 pensando 胸を焦がす日々。それが勤め始めた城でまさかの再開。運命以外の何だと言うの！」

「……初恋じゃないし、思っていないし！」

慌てて針を置くとリリーの両肩を揺さぶって目を覚まさせる。

「リリー！しっかりして！！何を言っているの！？？」

「いいのよ、フレア。ごまかさなくても」

「ごまかすって何を？それに、私オーランジュが城で働いていたことを知っていたわよ」

その言葉にリリーは一瞬ぱかんとする。が、すぐに気を取り直して

「じゃあ追いかけてきたってこと！？すごいわ、フレア！最初は伯爵家のご令嬢がなんで？って思っていたのだけど。まさか好きな人のために働きに出るなんて！！」

「違うって！！言っただけでしょう？兄と彼は王都でも会っていたって。それで知ってただけよ！」

どうやらリリーの頭の中では完全に物語ができあがっていきそうだな。なんとか誤解を解こうと、フレアは内心かなり焦ってきた。

「彼とは初恋とかそんなのなかったし、きっと向こうは妹くらいにしか思っていないわよ！縫物を頼みに来るのだって、昔遊んでいてよくみんな服を破ったから…それをごまかすためにうまくなったのを知ってるからよ」

「何言ってるのよ！オーランジュ様が今までお針子に縫物を頼まれたことなんて一度もないのよ？」

「それは…今までも私が縫っていたから」

気まずくてぼそぼそと答えると、リリーはそうではない、と手を横に振る。

「あなたが来る前からよ。もともとオーランジュ様は剣の腕もたつ方だったからお怪我をされることも滅多にないけれど、服を破るなんて一度も聞いたことないわよ？」

「…どうということ？」

フレアよりも城勤めが長い彼女の言葉に、え？と思う。フレアが城に上がって三年。その間、オーランジュが服の修繕を頼んできたことなど一度や二度ではない。最低でも月に一度は何かしら持ってきていたはずだ。そのたびに「剣に向いてない」とか「どんくさい」とか言ってきたのだ。間違えるはずがない。

「今のあなたの話を聞いて、私はてっきりオーランジュ様がわざわざあなたに会いに来られたんだと思ったんだけど？」

「わざわざ？ なんのために？」

「だからっ！ 運命よ！！」

再び目を輝かせたりりに、フレアはどっと疲れが出てくるのを感じた。

「あなた、オーランジュが好きなのではなかったの？」

「もちろん、お慕いしているわ。でも、それはあくまでも憧れよ。私みたいな下級貴族の娘では、ね。遠くからお姿を拝見できるだけで幸せなのよ」

一瞬自嘲気味に笑ったりりにハッとなったが、すぐに彼女は夢見る乙女モードに戻る。

拳を握りしめ、フレアに満面の笑みを向けてくる。

「でもあなたは違うじゃない！ オーランジュ様から接触を取ってくるなんて、他の娘には考えられないことよ！ それだけ愛されてるってことなんだから！ それに、鼻持ちならないどこぞの『ご令嬢様』にオーランジュ様が取られるのだって我慢ならないんだから！ フレアには頑張ってもらわないと！」

りりの笑顔にフレアは曖昧な笑みを返す。

「——絶対に『そんなこと』はないんだけどね。」

あっちはいけない。その言葉も、その理由も口には出せなかったが。

第12話（後書き）

お気に入り登録、評価、感想ありがとうございます。
毎日一人でワイワイ言って喜んでいます（笑）

別作品にバレンタインおまけも書きました。

第13話

夕方になり、ネルやアデリー達から仕事を引き継いだ二人はサーシャマリーの部屋へ入る。

今日は国王とともにユーリックが視察に出かけているため、夕食は王妃と二人で取る予定になったようだ。その後のサーシャマリーの行動を確認しながら、二人は自分たちの仕事にかかる。

そんな中、ふと翌日の予定にも目を通していたりリリーが、サーシヤマリーに声を掛ける。

「姫様。いよいよ明日から、国王陛下のお誕生祭にお召しになられるドレスをご用意しなくてはいいけませんわね」

「もうそんな時期なのね。今年はどんなのがいいかしら？」

毎年この時だけは必ず王妃も王女もドレスを新調してくる。もともと贅沢が好きではない王妃も、国王の誕生祭にだけは力を入れてくるので、サーシヤマリーも手を抜くわけにはいかない。それは当然他の貴族たちにも言えることで、この時期仕立屋は大忙しだ。そのため、二月前のこの頃からサーシヤマリー達もドレスを選び出す。生地やデザインは、常に城にいるお針子よりも商人たちの方が流行に敏感だ。最終的な調整はお針子たちが行うこともあるが、まずは城に出入りしている仕立屋や商人たちが呼ばれることになっている。それがいいよいよ明日に迫っていた。

まったく意識していなかったらしいサーシヤマリーに、フレアも微笑みかける。

「姫様はなにかご希望される物がおありですか？」

「そうね…去年はピンクだったでしょう？でも、そろそろもう少し

大人っぽい物もいいかな、とは思うんだけど」

サーシャマリーの普段のドレスは全体的に淡く、暖色系の物が多い。それは可憐な彼女にとってもよく似合っているのだが、思春期に差し掛かる最近是他の色に興味を出すようになってきた。

「今年はフリルよりもドレープの多い物が流行りのようですよ」

「そうなのね。でも、色まで大人っぽくしたら似合わないかしら？」

「明日いろいろお試しになられたらよろしいですわ」

「そうね！あとでお母様にもご相談してみましよう！」

年頃の娘らしく、三人はうきうきと明日に思いを馳せる。下級貴族の出のリリーは国王主催の王城で催される夜会に出席はできない。そのため、毎年サーシャマリーを着飾らせ、送り出すことをこの時期の何よりの楽しみにしていた。サーシャマリーもそれをよく理解し、リリーとよく話し合っている姿を目にする。

ふと、サーシャマリーがフレアを振り返ると思わぬ問いを投げかけてくる。

「そういえば、フレアは夜会には出ないの？ダン 그레이伯爵はいらっしやるのでしょうか？今年はあなたのお兄様もご出席されるのでは、と聞いたけど」

どこから聞いたのか、と驚いたが、フレアはサーシャマリーに申し訳なさそうな顔を向ける。

「私は夜会が苦手で：陛下主催の夜会を辞退させていただくのは心苦しいのですが、当日は姫様のお支度をお手伝いさせていただくことになります。兄も、今年は婚約者とするでしょうから、相手には困りませんわ」

あえて明るく言うフレアに、二人ともそれ以上なにも言わなかった。

「本日、午前中に城下より生地見本を持った商人たちが参ります。昨日、王妃様から姫様とご一緒に選ばれとお申し出頂きましたので、場所を小広間へと移しました」

朝食後に現れた第三近衛隊の隊長フィールドが、部屋の中にいるサーシャマリーとその侍女たちに今日の予定変更を告げる。王妃と王女が揃って生地を選ぶとなれば、今年一番の商売に間違いない。その上、気に入ってもらえれば商人たちにとっても今後の仕事に箔がつくと言う物だ。前日の夜に決まった王妃と王女の合同商談会は、一夜のうちに彼らの耳に届き、二人が思った以上の騒ぎになっていた。

フィールドの言葉に、サーシャマリーは頷く。

「わかりました。なんだか大ごとになってしまつて…迷惑を掛けます」

「とんでもございません、姫様。年に一度のことですので、楽しんでくださいませ」

恭しく胸に手を当てるフィールドは、だが顔をあげると表情を引き締める。

「ですが姫様。城内に入る時に彼らは嚴重にチェックを受けて入ります。それでも不心得者がいないとは限りません。私どもも警戒を

強めてはおりますが、何卒お気を付けくださいますよう」

生地選びくらいならば警護に付いている近衛隊はその部屋内にいることができる。しかし、試着ともなるとさすがに男性陣は退出するしかない。数少ない女性隊員もいるが心許ないフィールドは心配そうにサーシャマリーに告げる。彼女もそれがわかっているのでフィールドに向かってまた一つ大きく頷いた。

「わかっています。いざとなったら大声で呼びますから、遠慮なく入ってきてちょうだいね」

「姫様、それは…」

国王と皇太子に殺されます、とはさすがに言えなかったが、サーシャマリーのその一言で緊張気味だった部屋の空気がやわらかくなったのを感じ苦笑する。

「…目隠しをして失礼することに致します」

それではどうやって捕まえるの？と笑うサーシャマリーと侍女たちとともに、フィールドも今度はにこりと笑っていた。

第14話（前書き）

長いです（涙）

本当いつもすいません…

第14話

小広間に向かうのは、毎年サーシャマリーのドレス選びに絶対の信頼を得ているリリー。王女お気に入りの方。今年結婚して文官として城に努める夫とともに夜会に出席する予定のアデリー。そしてネルの四人だ。

「ネルも今年は夜会に出席するのね。お相手は婚約者の方？」

「はい。私には過ぎたお方なのですが、良縁に恵まれて……」

広間へ向かう途中にサーシャマリーが聞くのへ、ネルは恥ずかしそうに答える。彼女のドレスを仕立てるにも、今日はいいい下見となるだろう。事情を聞いたサーシャマリーの計らいで、ネルもこの大商談会に付き添うことになったのである。幸せそうな彼女にみんなが微笑みながら広間への移動となった。

小広間は常でない熱気にあふれていた。昨年まではサーシャマリーの部屋で彼女のためだけに商人が集められていたが、今回はその比ではない。扉が開かれ、中にいた商人たちが一斉に立ち上がり、サーシャマリーへ首を垂れる。その様子に王女たち一行は驚き、嘩然となるが、中央の上座でそれを見ていた王妃が悠然と立ち上がるのに気づきサーシャマリーは部屋へと入って行く。

「お母様、遅くなりました」

「いいのよ、私も今来たところだから。それにしても、今年は大盛況のようね」

「ええ、驚きましたわ。いったい何から見ればいいのか……」

困惑顔のサーシャマリーに隣の椅子をすすめて二人が腰掛ける。その後ろへ控えたフレアは、こっそりと隣のリリーに耳打ちする。

「すごいわね。商人たちの目がコワイくらいだわ」

「そうね。でも、急きよ参加した商人たちの寄せ集めの商品なんかに惑わされちゃダメよ。一年前からこの日を待っていた者たちの方が、さすがにいい物を用意しているから」

そう言うリリーの目も輝いている。反対にいる二人を見ても、驚きながらもやはり興奮は隠しきれないようだ。買い物に熱中する女性特有と言ったところか。

「さあ、それでは始めましょうか」

王妃のその一言で小広間はまたたく間に大商談会場と化した。

「姫様、この生地は遠く西の国から取り寄せた品で…」

「いやいや姫様にはこのような柔らかい素材の物がお似合いで…」

「私どもは新たにこのような生地を開発いたしました。是非お手に取っていただきたい…」

収拾がつかなさそうな状態の商人たちにあっけに取られていると、隣から一歩進み出たリリーが手際よくその混乱を収めにかかる。

「サーシャマリー様の目も、耳も、一組ずつしかございません。お話になるのはお一人ずつでお願いしますわ。でなければ日が暮れてしまいます。お呼びしますから、みなさん3歩ずつ下がっていただけます?」

そうしてサーシャマリーの視界を確保する。リリーに感心しながらも、四人はほっと息をついた。

「押しつぶされるかと思ったわ」

「みなさん姫様に気に入っていただきたいんですわ。王妃様はあまりドレスを新調なさいませんし、それにこれからお背も高くなつてこられる姫様に覚えていただければ、と思っているんですわ、きつと」

「でも、わたくしもあまり多くは作らないのだけれど…」

その言葉に、彼女に背を向けていた王妃が振り向く。

「まあ、サーシャ。いい機会じゃないの。確かに背も伸びてきたし、気に入ったのがあったらいくつか作りなさいな。一着ずつこの騒ぎをするよりは、ずっといいと思うわよ」

「お母様！そんな、いったい何着作ればいいの？」

「そうですね。お誕生祭用が…晚餐会、夜会、舞踏会用もいりますわね」

指折り数えるリリーの横からネルも

「各国のご来賓との謁見もご参加されますわ。一般参賀でバルコニーへお立ちになる際にもお着替えをなされますか？」

「もちろん！去年までは夜会と一般参賀だけのご出席でしたが、今年からは立派な淑女としてのご参列です！一部の隙もなく、ご用意しなくては！」

サーシャマリーではなくリリーが答えているのに三人は苦笑する。だが、それだけ彼女の誕生祭への思い入れの強さだろう、と誰も何

も言わなかった。

「では全部で5着ですね。普段用はどんなさいますか？ 姫様」
「…気に入ったら考えるわ」

枚数を区切らなかつたことに深い意味はないサーシャマリーだったが、その言葉を耳に入れた商人たちの目がいつそう輝きを増したのに気付いたフレアは、少し背筋に寒気を感じた。

「進んでいるか？」

唐突に開かれた扉から入ってきたのは、共の者をつけた国王とユーリックだった。共にはオーランジュもいる。マントをつけていることから彼が視察に着いていくようだと思察することができる。

突然現れた二人の姿に、その場にいた王妃とサーシャマリー以外の者が慌てて礼を取る。だが、それを片手で制して国王たちは上座へと近づいてきた。

「あなた。せめてノックくらいはしてください。驚くじゃありませんか」

「すまなかつたな。出かける前に少し覗きに來ただけなのだが」

王妃のそばまで來た国王は、彼女の機嫌を取るようにその頬に顔を寄せ、近くににいるサーシャマリーにも同じようにする。広間の中で生地を物色していたフレア達も、サーシャマリーの近くに戻る。自然、オーランジュのすぐ隣に立つ格好になってしまったフレアはドキドキしてリリーの方へチラリと視線を向けると、先ほどとは違った意味で瞳を輝かせている。フレアはいたたまれなくなって無理

やり国王一家へと顔を向けた。

「サーシャ。今年は全ての式に参列することになるから準備が大変だろう？」

「大丈夫ですわ、お父様。リリーが毎年手伝ってくれていますし、今年はみんなを選びますから」

「サーシャ。夜会や舞踏会は私が並ぶから、ドレスが決まったら教えてくれよ」

「はい、兄様！本当はご意見を頂きたいくらいなんですけど…お出かけなんですね」

残念そうな妹の肩にあてられていた2枚の生地を見比べながら、ユーリックがサーシャマリーに笑顔で応じている。国王も王妃の生地の色合いに注文をつけているようで、周りの商人があたふたと動き出している。

そんな国王一家を微笑ましく見ていたフレアだが、隣からひじをトンと突かれて顔をあげる。オーランジュが視線をユーリックから外さないまま声を掛けてきた。

「お前は？」

「なにが？」

「誕生祭。今年も出ないのか？」

チラッと見下ろしてくる目に、自嘲気味の笑みを返す。

「…出ないわよ」

「…そうか」

国王一家はまだあーでもない、こーでもないで商人や侍女を交えて交わしている。フレアは沈黙が気まづくなり、話題を探した。

「あんたは今年はあるんでしょう？副隊長様だもんね」

「ああ。仕事みたいなもんだが」

「私に縫え、とか言わないでよ」

「さすがにそれは頼まない」

頭の上で微かに笑われた気がして、フレアは自分の自意識過剰気味な言葉を後悔した。その気配を察したのか、オーランジュはぼそりと呟くように

「…近衛隊の正装を着るだけだ」

「あ、そっか」

当たり前の事を教えられてますます恥ずかしい。フレアは内心、早く視察に行ってくれないかと願う。

これ以上、自分が余計なことを言ってしまう前に、と思うのに口が勝手に動く。

「じゃあ、当日まで破ったりしないだね」

「…お前、俺を何だと…」

「よく服を破るマヌケ」

「あのなあ…」

呆れたような声で顔ごとこちらに向いてきたオーランジュに、フレアはますます焦ってきた。そんなことをすればリリーに後で何を言われるかわからない。それに、昨日彼女に言われた言葉も無性に気になる。それを口にしないためだと思うと、考えてもいない言葉ばかりが口をついてくる。

「それにっ！そんなのを頼まれている所をあんたのお相手に見られ

たら厄介じゃない！」

「厄介？」

「身に覚えのない恨みなんて、ごめんだわ」

嫌な顔をしているだろうことを自覚している。だから、こちらを見ているであろうオーランジュと視線を合わせないように、フレアはサーシャマリーの方だけを見ていた。

「そうだ！もし破っちゃったら夜会のお相手に縫ってもらいなさいよ。貴族のご令嬢だったら嗜みで針くらい持てるって……」

「はあ？」

「お相手はあんたの役に立てるって喜ぶし、私は余計な仕事が増えなくて助かるし！」

言った瞬間、オーランジュの体がピクリと動いたのが気配でわかった。しまった、と思ったが遅い。そろり、と隣を見上げるとわずかに眉間に皺を寄せたオーランジュは、もうこちらを見てはいなかった。

「もう、お前黙ってろ」

言われなくても……とぶつぶつ口の中で呟きながら、フレアもサーシャマリーに視線を戻す。仲睦まじい国王一家の姿を見ても、今度は心が晴れなかった。

第15話

昼を少し過ぎたころ、さすがに休憩を、という侍従に促されるまで王妃たちはドレスの生地選びに没頭していた。国王たちは30分ほどで視察に出たが、その時に彼らなりの意見を述べていたため、王妃と王女のやる気が俄然アップしていたのだ。侍女や商人たちもそれに引っ張られるように、彼女たちを盛り上げ、気付けばいつものサーシャマリーの昼食時間をとうに過ぎていた。

隣の部屋に支度を整えていた抜かりのない侍従は、二人を案内していく。その間、フレア達四人や商人たちも休憩となる。1時間ほどで戻ることをサーシャマリーに告げると、四人は食堂へ向かった。

「広間を離れるとどっと疲れが出てくるわね」

「本当に。でも、自分の下見にもいい機会になるわ」

夜会に出席する二人は楽しそうに笑いあいながら先を歩いていく。その後ろをリリーとフレアがついて行く。広間を出てからリリーは険しい顔をしてフレアの隣にぴったりとついていった。フレアは、いつりリーの口からオーランジュのことが出るのかとハラハラしたが、彼女が二人の前で口を開きそうにないことは、そのキッと結ばれた口元からうかがい知れた。

そんなリリーを怪訝そうにネルが振り向く。

「リリー、どうしたの？何かあった？」

「ううん、なんでもないの。あ、そうだ！私とフレアはちよつと相談があるから、お昼は部屋で取るわね。二人はゆっくりして来て！」

「え？私は…」

「いいから!!」

そう言うとりりーは二人に笑顔で手を振り、フレアの腕を掴んで足早に侍女たちの部屋がある方へ向かいだす。立ち止まってきょとん、とするアデリーとネルに見送られながら、フレアは溜息をついた。

「何があつたの!？」

「別に何もないわよ」

フレアの部屋に入り扉を閉めるなり、りりーは机にバン!と手を着いて問い詰めてくる。食堂から持ってきたパンの包みをガサガサ開きながら、フレアはなんとかごまかそうと思う。『夢見る乙女』のりりーにオーランジュとのことなんて言えない。それにはっきり言ってしまうばフレア自身も考えたくもなかった。

「何もなくてオーランジュ様があんな顔するわけないでしょう!そばで見ていてビックリするくらい怖かったんだから!!」

その言葉にフレアは驚く。もともと城内では『そっけない』とか『無表情』で通っているオーランジュだ。あれくらいのことで表情を変えとは思わなかった。

「怖いって…いつもあんな顔じゃない？」

「わかってないわね、フレアは。夢見る乙女の目をごまかせると思ってるの?」

「うわ、認めた」

「ごまかさないの! いい? オーランジュ様は確かに表情豊かな方で

はないわ」

「まあ、そうね」

隣に腰かけ、話す態勢になったリリーに、フレアは大人しく従う。その様子にリリーも頷く。

「でもね、相手によって雰囲気が変わるのよ。私たち侍女にも分け隔てなくお優しい雰囲気で接してくださるけど、陛下や殿下にも時と場合によって変えられてるのよ」

「そうなの？」

「そうなのよ！公私をきっちり使い分けていらっしゃって、その辺りも多くの女性たちの関心を引いてるわ。でもね、緊張感を持たれていたり、まあ、貴族のご令嬢方からのアタックにお断りを入られている時だって、怖くはなかったわ！」

「——どこで見たのかしら？」

気にはなったが余計な口をはさむと長くなりそうな気がして、フレアは黙ってもそもそとパンを食べる。

「鍛錬場で近衛の方たちと剣を交えている時だって、後輩を咎められる時だって！お心に余裕があるからできることだわ」

またしてもうっとり、と両手を組みだしたりリリーだが、突然フレアに怖い顔を向けてくる。

「それが！さっきあなた達こそそ話していたでしょう！？」

詰め寄られ、うっと言葉に詰まる。

「…途中までは良かったのよ」

「よ、よかったの？」

身体を反らしてリリーを避けながら問うと、リリーは感無量、といったように拳を握りだした。

「そうなのよ！なんかこう……いたわり？慈しみ？やわらかい雰囲気だったの。なのに、途中でもう、カチン！よ！カチン！わかる！？凍ったのよ！！」

「凍った……」

「そう！あったか……い雰囲気だったのが、いきなりカチン！なんだから！……怖いでしょう！？」

たしかに、リリーの言うとおりだとしたら怖い。だが、あのオーランジュがそこまで露骨に表に出すだろうか？疑問に思っただけで、リリーはあっさりと首を横に振る。

「みんな国王御一家を見てたから、たぶん気付いてないんじゃないかしら？あなた達二人をずっと見ていたのなんて、私くらいよ」

だから気付いたんだけどね、とこともなげに言うリリーにほっとする。だが、あの場には大勢の商人たちもいた。自分たちの背後で誰かが見ていたとも限らない。原因の一端が自分にあるとわかってはいても、オーランジュらしからぬ失態に眉を寄せる。

そんなフレアの様子にも、リリーは戸惑うことなく聞いてくる。

「で、何があったの？」

「……わからない、のよ」

突然戻された現実には、フレアは泣きそうな顔になる。その様子に興奮状態だったリリーも心配になったようだ。

「わからない？」

「うん。…ううん、私が彼の機嫌を損ねたのはわかるんだけど…なんでそこまで怒ったのか、よくわからないのよ」

膝に置いたパンに視線を落とし、考える。たしかに、余計なことを言ったと思う。あの時はろくに考えもせずに話していたから、悪いことを言ってしまったんだとも思う。だが。

「なにがダメだったのかしら？」

「…どんな話をしたの？」

一転、優しく問いかけてくるリリーにさすがのように、フレアは先ほどの出来事を話した。

「…どこだと思う？」

「どこって…どこもかしこもダメな気がするけど…」

聞かれたリリーも困惑顔だ。

「でも、たぶん後の方の会話よね、きっと」
「最後？」

腕を組んで考え込むリリーに、フレアは顔をあげる。

「『黙ってろ』って…うるさかったってこと？」
「違うわよ、その前よ。『厄介』とか、『余計な仕事』とか言った

んでしょう？」

「う、ん。言った、と思う」

その言葉にリリーはやれやれと肩をすくめる。

「普通、好意を持っている相手にそんなこと言われたら誰だって傷つくでしょう？」

「好意って…前にも言ったけど、彼とは幼馴染で私のことは妹みたいに…」

「あー、はいはい。そうかもね。でも、そうじゃないかもしれないでしょう？ だとしたら、迂闊な言葉だったわね」

そんなことはあり得ない、と言いながらも、迂闊な言葉、という言葉に次の言葉が出てこない。

「人がどんな言葉で傷つくのかなんてわからないわ。幼馴染でも、妹だとしても」

リリーの言葉にその通りだ、と思う。フレアはますます頭を抱えたくなった。

そんなフレアにリリーは慰めるように背中をさする。

「…オーランジュ様はきつと怒ったんじゃないわ。…ちょっとあなたの言葉に傷ついてしまったのかもしれない。それに、傷つけたことが分かっているから、あなたもそんな顔をしているんじゃないの？ フレア」

「そんな顔？」

「ええ。知ってる？ そう言うのをなんていうか」

視線を合わせると、わかっているのかとリリーは首を振る。

「自己嫌悪、って言うのよ」

フレアは顔からベッドに倒れこんだ。

第15話（後書き）

ちよつと直しました。

まだ変なところがあったら教えていただけるとありがたいです。

第16話

リリーと二人で広間へと戻ったフレアは、扉の前で待っていたアデリー、ネルと合流する。

結局フレアはあの後、自分がへこんでいる理由を昏々とリリーから説教されるはめになり、休憩時間は彼女にとってまったく安息の時間にはならなかった。同じ時間を共にしたはずなのに、リリーはすでに気持ちを切り替え、王女のドレス選びのために再び闘志をみなぎらせている。

「さあ、さっさと生地を選んで、次はデザインよ！」

腕まくりをしそうな勢いの彼女につられるように、フレアも意識を広間に向ける。――今は、仕事をしなくちゃ。考え事なんてしてられないんだから！

小広間の扉を開け、四人は再び熱気の中に足を踏み入れた。

「…では、生地はこちらとこちらで…念のため、色見本にあったのと近い色をいくつかお持ちいただけます？」

サーシャマリーの夜会と舞踏会用の生地は同じ商人から発注するところが決まり、フレアはその対応に追われていた。すぐ横ではネルも他の業者に納品の確認を取っている。リリーとアデリーはデザインを決めるためにサーシャマリーの隣でデザイナー達と相談の真っ最中だ。彼らの中には見本を着せた女性を連れているものもあり、商人の大多数が退出した広間が、今度は別の雰囲気でごった返している。

チラリと視線をやれば、五人の見本を着た女性を前にサーシャマリーが真剣な目でデザイナーの話聞いている。アデリーも横でふんふんと頷いている。そんな二人をネルがチラチラと見ているのが気になった。

「ネル、ここはもういいわよ。あとは私がやっておくから、あなたも姫様の所へ行っていた方がいいんじゃない？」

「そう？お言葉に甘えていいのかしら？」

「もちろんよ！あなたも今のうちに情報をたっぷり仕込んでおかなくちゃいけないんだから！」

ただでさえ休みの少ない侍女の仕事に就く者が、新たにドレスを仕立てるのは大変だろう。せっかくサーシャマリーのおかげで商人達と会えたのだ。この機会を逃す手はない、と伝える。

ありがとう、と言い置いてネルはそそくさと彼女たちのもとに寄って行った。サーシャマリーに礼をして一人のデザイナーに声を掛ける。どうやら見本のドレスで気になるものがあつたようだった。それはサーシャマリーには少し大人っぽすぎるが、ネルが着るには申し分ないだろう。王女たちも笑顔でネルに話しかけている。デザイナーの方はサーシャマリーの注意が自分のドレスに向いたのいいことに、他の作品を着た女性たちを急いで呼んでいる。このチャンスにじっくり見てもらおう、ということか。

———しっかりしてな。

商魂の逞しさに苦笑を覚えないでもなかったが、きっと彼にはこんな機会滅多にないのだろう。特に異議を唱えるものでもないので、フレアはそのまま自分の仕事に戻った。思いのほか大量注文になったサーシャマリーのドレスは、生地をより分けるのだけでも一仕事になりそうだった。

小広間での大商談会が開きになったのは、夕方も過ぎたころだった。興奮からくる疲労を休めるべく、四人は控室に向かう。四人で座ったいつもの席にお茶を用意して、ようやく一心地つく。今日一番の働き手だったリリーが肩をぐるぐる回している。

「今年は一段とすごかったわね。まさかあんなに人が来るとは思っていなかったし…」

「でもおかげで私たちもとっても参考になったわ。ネルはあのデザイナーのドレスを注文するの？」

「そうね。一度家に帰って父に相談しようと思ってるんだけど…」

「早くしないと、姫様がご注文されたことが知れ渡ると忙しくて断られちゃうかもよ？」

そんな会話を聞きながら、フレアは一人窓から外を見る。もう日も落ちかけている。オーランジュ達は帰って来ただろうか。近隣の視察だと言っていたし、そう遅くなることはないのだろう。そんなことを考えながらお茶を飲んでみると、ふと他の三人の声が聞こえないのに気付き、視線を戻してぎょつとした。みんながみんな、自分をじっと見ている。

「な、なに？」

「フレア、ちょっと変よ？どうかした？」

アデリーの心配そうな言葉に慌てて首を振る。訳知り顔なリリーは澄ましているが、アデリーとネルにはオーランジュとの関係も話していないのだ。考え事の原因なんて言えない。

取り繕うフレアに、ネルも訝しげな顔を寄せてくる。

「本当、なんか変ね」

「そ、そんなことないって！」

「…そう言えば、午前中にオーランジュ様と何かお話されていたのかった？」

核心を突くネルの言葉にドキツとする。固まりそうになったフレアに手を差し伸べたのはリリーだった。

「なに言ってるのよ、ネルったら！婚約者の方がいらっしゃる身で、他の男性が気になるの？」

「ち、違うわよ！もう、やめてよりりーったら！」

「ふーん。私はてっきりネルがオーランジュ様に未練たっぷりなかなくと…」

「違うったら！そんなの無いって…」

「そんなに慌てないでよ。それとも何？婚約者の方は王城勤めなの？嫉妬深いのかしら？」

「リリー！！わ、私今日は疲れたからお先に失礼するわ！」

顔を赤らめたネルがガタガタと慌ただしく椅子を引いて控室を出ていく。その後ろ姿を呆然と見やりながら、アデリーがリリーに少し怒ってみせる。

「こらっ。いじめ過ぎよ」

「ごめんなさい。まさかあんなに敏感に反応するとは思わなくて」

肩をすくめるリリーに、仕方ないと二人は溜息をつく。だが、確かにあんなに慌てなくてもいいのに、とフレアも思った。

「『私には恐れ多い方』とか言ってたから、ずいぶん身分の高い方なのかしら？」

「そうかもしれないわね。正式な婚約も整ったばかりなのだとしたら、今は繊細な時期だから。そっとしておいてあげましょう」

フレアの問いに既婚者のアデリーが答える。経験のない二人はそんなものか、と思い納得した。ひとしきり王女のドレスについて話した後、各々自室へと引き上げていった。

一度部屋に戻りリリーの目をごまかすと、フレアは肩にショールを引っかけ外に出る。日も暮れかけてきた廊下を足早に通り過ぎると、鍛錬場横の脇道に身体を滑り込ませ、しゃがみこむ。なんで怒っているのかはわからないが、オーランジュの機嫌を損ねたままにいるのは後味が悪い。そうそうに謝ってしまおう、とここまで来たのだ。肌寒くなってきた外の気温に、肩をショールを掻き抱き膝を抱える。

その日、待てど暮らせどオーランジュは姿を現さなかった。

第17話

小広間での大商談会から3週間が経った。今日もサーシャマリーの部屋は試作品のドレスと生地、それにデザイナーと仕立屋で溢れていた。今日は夜会用の華やかなドレスだ。ネルも注文することにしたらしい、あのデザイナー、ルーヴィッツが来ているので、今日はリリーとともに彼女もサーシャマリーの試着を手伝っている。

赤を着たい、と言う彼女の要望に応えるため張り切ったらしいルーヴィッツは、近くで見るとフレアが思っていたよりもずっと年若かった。新進のデザイナーらしく、柔軟な発想で王女の期待に添うよう彼が持参した今日のドレスは、真っ赤な生地の上に目が大きく編まれた絹のレースを乗せ、色の強さを押さえつつも王女の雰囲気合った大人っぽさを引き出している。まだ飾り気のない形ながら、試着を済ませ寝室から出てきた王女にフレア達もお世辞抜きに素晴らしいと思った。

「素敵ですわ、姫様！今までよりもぐっと大人っぽくなって！」

「本当に！これからは赤いドレスもたくさんお召しになりましょう！」

手放しに褒める侍女たちに、恥ずかしそうな顔をしながらもサーシャマリーもまんざらでもなさそうだ。居間に置かれた大きめの鏡の前で全身を映している王女に、ルーヴィッツも満足気だ。

「おおまかな形はこのように。後は装飾をしていこうと思うのですが、何かご要望はございますか？」

そう言うと彼は鏡の前進みサーシャマリーの横に立つ。彼の助手がカバンからたくさんのお飾り品の見本を出してきたので、部屋に

いた他の侍女たちもわつとそのそばへ駆け寄った。手に手に、大きいリボンやレース、花の胸飾りなどを持ちながらどこにどのようなという相談を進めていく。

その様子を、一人離れた所から見ていたフレアはそろそろお茶の時間だなど思い、こちらに気付いたリリーに目配せをしてそっと部屋を出る。

厨房にお茶の支度を取りに行ったフレアは、廊下から中庭を眺めてそっと溜息をつく。

3週間。謝るところか、あれ以来オーランジュに会っていない。ユーリックが毎日のようにサーシャマリーの部屋を訪れるが、一度も供をして来ない。最初は第二近衛隊長のハロルドがいるのだから当たり前だ、と思っていたのだが、彼が不在の時もオーランジュはついてこなかった。第二近衛隊のもう一人の副隊長、ノーランドがつき従っているのを見た時は、フレアは少なからず落胆した。城内にいないのかと思えば、ユーリックの供をしている姿を遠くに見かけることはあるので、仕事で遠方に出ていることもなさそうだ。

以前は必ず繕いものを持って来る彼を苦々しく思っていたりもしたが、こうも出くわさないとさすがに嫌な予感がしてくる。

———もしかして、避けられてる？

本来、広い城内で定期的に会う方が珍しいが、お互いの主が行き来しているためそう難しいこととは思えない。歩きながら考えていると喉から唸り声まで出てくる。通りすぎる侍従に不審げな目を向けられてそれに気付いたフレアは、ハッとしてあえてしつと廊下を進んだ。恥ずかしさと同時に胸がだんだんむかむかしてくる。

———なんで、私がこんな思いしなきゃならないのよ！怒ってるなら怒ってるって、言いに来ればいいじゃない！！

眉間に寄って来た皺を伸ばすように額に手をやるが、一向に消える気配がない。なにより、彼女をいら立たせていたのは、おそらくオ

ーランジュが本当に自分を避けているのだろう、と薄々勘付いているからだ。

この3週間、仕事の合間や終わりにフレアは必ず鍛錬場横の脇道に通っていた。時間は違えど一日一回、頼まれた繕い物ができた、という口実のもと毎日脇道に向かっていたのである。しかし、彼がそばを通ることはおろか、鍛錬場内で姿を見ることがなかった。仕事中に廊下から覗けばちゃんというのに、である。こんなことは今まで一度もなかった。頼まれた物を持っていけば、だいたいオーランジュは程なく現れた。

だが、イライラする気持ちとともに、フレアは気付く。この3週間、毎日通って一度も他の近衛隊に見つかったことなどなかった。それだけ人がいるのが分かりにくい場所なのだ。それなのに、オーランジュは必ず気付いていた。それがどれだけ注意を向けられていたことなのかを、フレアは今さら思い知ったのである。

ふっと窓に目をやれば決して楽しそうではない自分の顔が写る。あれ以来、リリーも彼について全く聞いてこない。フレアは内心、当たり前だ、と思う。こんな顔をしてる人間に何を突っ込めるといふのか。気をつかわせてしまっていることを申し訳なく思うと同時に、友の思いやりに感謝もする。

ほっと息をひとつ吐き、気持ちを切り替える。

———仕事、しなくちゃ。

フレアは目の前の厨房の扉を開いた。

第18話（前書き）

動けゝ

話よ動けゝゝ

第18話

王女の部屋へ戻ると、すっかりもとのドレスに着替え終わったサーシャマリーがソファに腰掛け、向かいに座るルーヴィッツと話している。その前にお茶を出し、次いで彼の前にもそっと差し出す。気付いたルーヴィッツはにっこりとフレアに会釈を返す。二十代後半と思しき彼は、すっかり王女付きの侍女たちを虜にしていた。――この笑顔はクセモノね。そう思いながらもフレアも笑顔で礼を返す。

「本日の手直しをして、明日もう一度ご試着をお願いしたいのですが、よろしいでしょうか？」

「まあ、仕事が早いだね。フレア、明日のわたくしの予定はどうだったかしら？」

傍らのフレアにサーシャマリーが聞く。王女の予定表を頭に思い浮かべながらフレアも考え込む。

「明日は午前、午後ともにすでに予定がございますわ。午前中はお誕生祭に向けての作法の講義、午後は侯爵令嬢の方々とお茶会が組まれていたはずですが……」

「そう：明日でないとダメかしら？」

「正直早い方がありがたいのは確かです。王室の方々のドレスは3着作らねばなりませんし、そのうちの1着を仕立屋に飾って他のご令嬢方にお披露目せねばなりませんので……大商人ではない、私どもでは人手も多くはありませんから、時間はいくらあっても余ることはないかと」

申し訳なさそうに言うルーヴィッツに、サーシャマリーも頷く。

王家の女性が着るドレスは他の貴族の令嬢とかぶることがあってはならない。そのため、いち早く見本を作り上げ公開しなくてはならないのだ。残りの2着は本番用と予備だ。その腕を買われ王女のドレスを仕立てることになったルーヴィッツと彼の仕立屋は、腕は確かであったがまだ駆け出しである。彼の言うように、大商人が抱える大所帯のお針子を抱えられるはずもなく、話によるとルーヴィッツ自身も今回のドレス作りには自ら針を持っているという。夜会用と舞踏会用という、メインとも取れる2着を仕立てられるのは名誉なことだったが、王女の話聞いた他家の令嬢からの注文も入ったということもあり、現在彼の工房は大わらわだそうだ。

そんな彼を慮って、サーシャマリーは考え込む。

「なんとか時間は作れないかしら？」

「ですが、あまりご無理なさって、体調を崩されたら元も子もあります。」

顔を突き合わせる二人に、ネルが後ろからおずおずと声を掛ける。

「お茶会の後なら、多少お時間は取れるのではありませんか？」

「少しならあるけれど：明日はリリーが午後から外出の予定だし、あまり人手が多くはないから：」

「少しで構わないのです！本日のお直しの確認と、ドレスの装飾品を仮縫いでつけて参ります！その位置さえ合わせられれば良いのです！」

首を振るフレアに、ルーヴィッツは飛びつくように懇願してきた。その様子にサーシャマリーも意を決したようだ。

「そのくらいなら大丈夫でしょう。夕方になってしまいうけどいいかしら？」

「ありがとうございます、王女殿下。これで仕事がかどります！」

サーシャマリーが許可をしたことに否を唱えることはできない。フレアもしぶしぶ承諾すると、ルーヴィッツは満面の笑顔で立ちあがり、王女に胸に手を当てて礼をする。

まだ眉間にしわがより気味のフレアに、ネルがこっそり隣に来て耳打ちしてくる。

「お茶会の後、私も手伝うわ」

「でも、あなたは明日午後からお休みじゃ…」

「いいのよ。どのみちルーヴィッツ殿のお店でドレスの打ち合わせだったんですもの。彼がいないのでは進まないでしょう？ ついでに馬車に乗せていってもらうわ」

「…ありがとうございます。助かるわ」

ネルの気づかいにほっとして、フレアも頷く。どうやらこちらも落ち着いたらしいと察したルーヴィッツが退出をしようとした時、サーシャマリーの部屋の扉がノックされる。表を確認したアデリーが、サーシャマリーに来客を告げる。

「ユーリック殿下がいらっしゃっています」

「兄様が？ 視察からずいぶん早くお戻りになったのね。お通しして」

笑顔で告げるとすぐにユーリックが入って来る。共に入室してサーシャマリーに礼を取る近衛がオーランジュだったことに、フレアは驚いた。

二人は視察からそのまま部屋に來たようので、簡易の礼装とマントを身に着けていた。

思いもかけず久しぶりにオーランジュとの対面となったフレアは、とっさに身を引き礼を取ることで彼と視線を合わせないようにしてしまった。

「急にすまないね、サーシャ。ドレスの試着をしていると聞いたから、帰ってそのまま来てしまったんだけど。もう、終わってしまっただのかな？」

「おかえりなさいませ、兄様。残念でしたわ。もう少し早かったらよかったのですけれど。ご紹介しますね。わたくしのドレスを作ってくれているルーヴィッツです。もう、本当に素敵なのを持ってくれるんですよ！」

立ち上がってユーリックにルーヴィッツを紹介する。ルーヴィッツは思いもかけない皇太子との対面に、緊張のためか顔をこわばらせて深く礼を取る。

「お初にお目にかかります。ルーヴィッツと申します。この度は王女殿下のお誕生祭用のご衣裳をご用命いただき、恐悦至極でございます」

「そなた、城内では見ない顔だな」

「はっ。今回王家の方々から初めてご指名を頂きました」

頭を下げ続けるルーヴィッツに、ユーリックはゆっくりとその姿を上から下まで見やる。

「…そうか。なんでも今回は今までのサーシャマリーとは雰囲気が大いぶ違うものらしいな。私も楽しみにしている」

「ありがたきお言葉、身に余る光栄でございます」

「しかと励んでくれ」

「はい、承りました。では、サーシャマリー様、私は今日はこれで

失礼いたします」

ユーリックの半ば威圧のような雰囲気、ルーヴィッツは冷や汗をかきながらもなんとかサーシャマリーに笑顔で退出の挨拶をすると、仕立屋とともに部屋を辞した。見送りに出たネルとルーヴィッツの姿が扉の向こうへ消えると、ぷつと頬を膨らませたサーシャマリーがユーリックに向きなおる。

「兄様、あんなふうに睨みつけてはルーヴィッツが怖がってしまいますわ!」

「:いや、済まない。見ない顔だったからつい、な。ところで、ドレスはどんな感じになるんだい?」

妹の機嫌を取るために話を変えたユーリックに、サーシャマリーはパツと顔を輝かせて、彼のドレスがいかにか素晴らしいかを語りだした。

第19話

ユーリックとサーシャマリーのお茶会は、すぐにいつものなごやかな雰囲気に戻った。だが、フレアは隣にいるオーランジュに気がでない。入室してから彼と一度も目が合っていないことも、フレアの不安を増長させてくる。

——なにになに？まだそんなに怒ってるわけ？

チラリと見やれば、こちらの視線に気付かぬはずもないオーランジュは、しかし視線をまっすぐユーリックに向けたままだ。

——む、むかつく……！！

そもそも、彼が起こっている理由さえ自分にはよくわからないのに、この仕打ちはなんなのだ。腹の内では煮えくりかえるような思いをしていたが、顔に出すわけにはいかないフレアはぎゅっと、自分の両手を握りしめた。

翌日はよく晴れた絶好のお茶会日和だった。侯爵家の令嬢が参加するとあって、午前中フレア達は準備に追われる。サーシャマリーが講義を受けている間に整えるべく、厨房とお茶会の会場となる中庭を往復し、テーブルを整えていく。と、フレアとともにテーブルセッティングをしていたリリーが、周りを見回し人が途切れたのを見るや近づいてきた。

「ねえ、昨日の殿下ちよっと変じゃなかった？」

「え？ルーヴィッツ殿とのこと？」

「うん、それもあるけど：普段視察の恰好のまま姫様の部屋にいらつしゃるなんてないわよね？」

「そういえば、そうね」

昨日はオーランジュに気を取られていたが、確かに入室したばかりのユーリックは少し変だったかもしれない。いつもは人当たりがよく、決して城下の者たちを見てもあのような探るような視線を送ることはない。服装も、サーシャマリーに会う前に必ず整えてくるはずだ。

「ルーヴィッツ殿は緊張して真っ青になってたわよ」

「そうなの？気付かなかったわ：」

今日も来ると言うのに大丈夫だろうか、と城に視線を送る。だがリリーはそんなことより、と楽しげだ。

「久しぶりに殿下の礼装を拝見したわー！やっぱり素敵よね。マントがあるのとないのとで、どうしてあんなに雰囲気が変わるのかしら？」

「そうね。いつも拝見していると麻痺しちゃうけど、たまに違うお姿を見るとドキッとするわね」

「オーランジュ様の礼装も初めて近くで見たけど、やっぱりたまらないわ！！」

拳をぐっと握るリリーに、だがフレアは一瞬ピクリと動きが止まる。その様子に気付いたリリーが聞いてくる。

「まだケンカしてるの？」

驚いたような表情の彼女に、再び手を動かしながらフレアは首を振る。

「ううん。話してない。っていうか、会ってもいない。昨日が本当に久しぶり。でもあれは会えたにはならないわね」

「：まあ、姫様たちの目の前でおしゃべりを始めるわけにはいかなしいね」

「そうね…。ねえリリー？この前の小広間でのことなんだけど…」

「うん？」

「あれってそんなに怒ることなの！？ちょっとしつこくない！？」

一瞬は落ち込んだような顔も見せたフレアだったが、開き直ったのかりりに詰め寄る。詰め寄られた方は、えっ？と身を引く。だが、箍が外れたかのようなフレアはお構いなしにリリーの両手をガシッと掴む。

「だって！オーランジュがお誕生祭に出るのなんてみんな知ってるじゃない！どこぞのご令嬢方がその相手役を狙っていることだってその人たちから自分の身を守るために、ちよっと！ほんのちょこっと『気をつけてね』って言っただけなのに！3週間も避けるなんて、怒りすぎでしょう！？」

「ああ、う、うん。そう、かな…」

フレアの剣幕に押されるリリーの様子にも彼女の勢いは止まらなかった。リリーの掴んだ手を上下にぶんぶん和振り回すようにして捲くし立てる。

「だいたい、器がちっちゃいのよ！そりゃあ私だってちょっつと嫌味っぽくなっちゃったかな、って思ったのよ？それをあの唐変木がっ！」

「と、唐変木…」

「そうよ！この3週間、謝ろうと思って時間さえあれば城内をうろうろうろしてたのよ！貴重な休憩時間を削ってまで！」

「そんなことしてたの…」

「なのに、絶対！ぜったい気付いてたはずなのに！無視！もうこれでもかってくらい無視！！唐変木じゃなかったら何だって言うの！？」

「あ、あのね、フレア…」

諫めようとするリリーに、フレアは何も言うな、とばかりに首を振る。

「ごめんなさい、リリー。あなたの夢をぶち壊すようなこと言ってもね、もうあんなヤツ知らない！勝手に服でもマントでもビリビりにしちゃえばいいんだわ！そんでどこぞのご令嬢に、できもしない繕い物を頼んで、ぐっさぐさにされちゃえばいいのよ！」

「まあ、そういうのはさ、ほら…」

「オーランジュなんて、貴族のご令嬢方にとって食われちゃえばいいのよー、あの唐変木ー！！」

はあはあと肩で息をするフレアの背中を、困ったような顔でさすりながらリリーは彼女の顔を覗き込む。叫んですつきりしたような雰囲気を感じ取ると、背筋をしゃきつと伸ばさせ、その肩に両手を置く。

「フレア。あなたの言いたいことはよくわかったわ」

「…ほんと？」

「ええ。あなたが今まで猫を被っていたことも含めて、ね。でも、私はそんなの気にする方じゃないから安心して。それよりも、しなくちゃいけないことがあるわ」

「あ！ごめんなさい！支度を終わらせなくちゃね！」

ちょっと引っかかりを覚えた言葉ではあったが、目の前のテーブルを見てフレアは仕事申中だったことを思い出す。だが、食器に手を伸ばそうとしたフレアを、肩を掴んだままのリリーが止める。訝しげに顔をあげると、ゆっくりと首を横に振るリリー。その表情はいうなれば「してやったり」だ。にやりと笑うと、フレアの肩に置く両手に力を込める。

「そういうことは、本人に言いなさい」

そう言われて初めて背後に視線を感じる。冷や汗が流れそうだ。ひきつりそうになる顔でリリーの顔を見つめると、彼女の視線はフレアの背後に回っている。

「リリー、私達、友達、よね？」

「ええ、もちろん！すべてはあなたのためよ」

にっこり笑うリリーに、絶対ウソだ、と思う。走って逃げたいフレアの頭上に、あきらかに背の高い人物の影がかぶさる。

「ちょっと顔貸してもらどうぞ、『猫かぶり』」

襟首を掴まれるように引っ張られる。ここはまかせて、と手を振るリリーを今日ほど恨めしく思ったことなどないだろう。

第19話（後書き）

ベタベタな流れになりそうなので、どうかします（汗）

こんなの予定にない…

第20話

ずるずる引きずられるようにして庭園の端にある木立の中に入る。人目から隠れるような位置で、ようやくフレアは解放された。引っぱられたドレスの襟を直しながら、一言も発さない彼——オーランジュに向き直る。

フレアは歩いている間になんて言おうかとずっと考えていた。いや、この3週間考えていたのだ。言葉がないわけではない。だが、あんなことを聞かれた後ではどうしようもない、と気持ちはすっかり開き直っていた。

「…こんなとこまで引っぱってきて、何の用かしら？」

努めて平静を装った声を出す。しかし、一向に答えないどころか、視線を合わせもしない幼馴染にフレアは訝しげな視線を向ける。と、その手にまたしても服らしきものを持っていることに気付いた。また破ったのか、と思ったがそれを口実にできることに少しほっとする。

「今度は何を破ったわけ？縫ってあげるから…」

貸しなさい、と伸ばした手を避けるように、オーランジュは服を背後に隠してしまった。

え？と思って顔を見上げれば、やはり遠くを見たままではそりと答えられる。

「いや、いい」

「な、なによ？そのために来たんじゃないの？」

思わぬ行動を取られ、動揺する。そんなフレアをよそに、オーラン

ジュは気難しげに眉根を寄せた。視線はまだどこかを見たままだ。

「これは…城のお針子に頼むことにする。悪かったな、連れ出して」
「ちょ、ちょっと!!」

くると背を向けだすオーランジュを慌てて呼び止め、腕を掴む。
「……まだ、謝ってないのに！」

焦って呼び止めたはいいものの、言葉が出てこない。オーランジュも足を止めたが、振り向かない。そのことがフレアの心をさらに乱す。

「…なんだ？」

いつまでも固まっているフレアに、先にオーランジュが口を開く。ビクリと身体が跳ねたのは、いつになく彼の声が冷たく聞こえたからだろうか。その感じが彼にも伝わってしまったであろうことに気付き、なおさら焦る。

「あっあのっ！ふく…この前の服！できたんだけど…」

なんとか開いた口は、思っていたのとは別の言葉だったため、語尾が鈍る。だが、オーランジュはそのことに気付いていないのか、ああ、とやっと顔をこちらに向ける。しかし、なんだか無性に後ろめたいフレアは視線をそらしてしまう。

「…今度でいい」

頭上から溜息とともに吐き出された言葉に、フレアの気持ちは沈む。地面とにらめっこをしていたフレアは、するりとはずれた腕が一瞬彼女の頭の上をさまよい、やがて下ろされたことに気付かなか

った。

視界の隅にあったオーランジュの靴が歩き出す。

「お前も早く戻れ」

その言葉に、フレアは彼に背を向けて走り出した。

「———なんなのっ！ いったい何なのよ！ なに様なのよ！？」

唇をかみしめて城内へ戻る。リリーのもとに戻ったフレアは、驚く彼女に「もう嫌だ！」とだけ言っていると、支度が終わって空になった銀盆を掴むとずんずんと歩き出してしまった。後から小走りでついてくるリリーが「なにがあったの！？」と必死に声を掛けてくるが、なんでもないと言っただけ言っただけ唇をかみしめたままだ。

厨房に銀盆を返す——というより叩きつける——と、サーシャマリリーの部屋へ戻ろうとしたフレアの腕をリリーがガッと掴む。

「なに！？」

「なにじゃないわよ！ そんな態度で姫様の前に出る気！？」

「そんなことしないわよ！」

「嘘ね！ なにがあったのか知らないけれど、気持ちの切り替えもろくにできない人を姫様の前に出すわけにはいかないわ！ 部屋に戻りなさい！」

強い語調で言われた言葉にぐうの音も出ない。高ぶっていた気持ちが一気に冷めていくのを感じながら、フレアは再び唇をかみしめた。

———情けない：

リリーの言うとおりであった。このままサーシャマリーの部屋へ戻ったところで、平静さを保てるのか正直自信がない。怒りがおさまると反動で気持ちがどん底まで沈みそうになる。

ぎゅっとドレスを握りしめ俯くフレアを、リリーはそっと抱きしめた。今度は優しく語りかける。

「さっきは行かせてしまつてごめんなさい。こんなつもりじゃなかったのよ…こっちは引き受けるから、部屋で休んで？」

「でも…」

先ほどもリリー一人に任せてしまった。これ以上甘えられない、と顔をあげるがリリーはフレアの顔を自分の、彼女より少し低い肩にそっと押しつける。

「大丈夫。昼から私は出掛けるから…。あなたにはお茶会の後を頼むわ。それに、姫様のドレスだって、しっかり見てもらわなきゃならないんだし」

「ごめん…後で、ちゃんと話すから…」

わざと明るく言うリリーの袖をぎゅっと握りしめ、フレアは頷く。その様子に満足したかのようにリリーはフレアの背中をポンポンと叩くと、ぐっと身体を離れた。

「さあ、私はもう一仕事してくるわ。しっかりご飯も食べるのよ！へましたら承知しないんだから！」

「ええ。ごめんなさい、リリー。…ありがとう」

やっと作った笑顔でリリーに応えようと、彼女はじゃあ、と手を振ってサーシャマリーの部屋へ戻って行った。

第20話（後書き）

すいません、時間がないので一発書きです。
誤字、脱字、表現の誤りなどありましたら教えてくださいませ。

第21話

仕事をさぼるなんて今までにないことだが、フレアはリリーの心遣いを今はありがたく受け取ることにする。それほど自分の心が乱れているのを嫌でも自覚したからだ。

自室に戻る道を歩きながら、ひたすらフレアは考えていた。何がオーランジュを怒らせたのか。なんでさっきはあんな態度を取られたのか。そして、自分はなぜこんなに落ち込んでいるのか。

部屋に戻るとフレアは小さな鏡台の前に座った。鏡には布がかけられている。それをそつとめくり、自分の姿を映した。映るのは明らかに落ち込み気味な顔。そして波打つスマイル色の髪。胸の下まであるその髪をそつとなぞるように鏡に触れる。

———なんで怒ったんだろう、なんてなんとなくわかってる。リリーからオーランジュの話を聞く前から、彼がお針子の所へ行っていなかったことも（私が来る以前から行っていなかったとは思わなかったけど）。彼が自分の結婚話や恋愛に関わる話を私から振られることを嫌うのも、知っていた。

鏡をなぞりながら深く息をつく。まさか、と思いながら見て見ぬふりをし続けてきた。フレアにはそうするしかない理由があったから。だから自分は彼に『幼馴染』以上の気持ちを持ってはいけないことも、そんな自分の思いを否定することも難なくこなしてきたつもりだった。

鏡の中の自分の顔が泣きそうに歪む。ギュッと手を握りしめ、唇をかむとますます醜く見える。それでもフレアは自分から目を離せなかった。

———あんなにキツイなんて：バカだわ、フレア。

彼がいつか誰かを好きになった時、それを祝福できるように。そういうのも言い聞かせていたのに、嫌だ嫌だと言いつつ、オーランジュが繕いものを持って来ることに優越感を覚えていたことを知る。心の中で『幼馴染』を振りかざして、彼のことをどんなふうにも言っても自分は許されるのだ、と思いあがっていたことを知る。

たった一度、彼が自分に背を向けたことがフレアの中で驚くほどの破壊力を持って今までの彼女を壊していく。ギュツと心臓が締め付けられるような痛みを覚え、顔を顰める。ぼやける視界に、涙が流れそうになっていることに気付く。

だが、と思いフレアはぐっと目元をぬぐう。聡いサーシャマリーのことだ。泣いた後の顔で部屋に入れば気を遣わせることになってしまふ。彼女に心配を掛けることだけはできない。そう思ってフレアは鏡に布を掛け、鏡台から立ち上がる。今度は机に向かって、便箋とペンを取り出した。

———どうあっても、知られてはいけない：

固い決意を胸に、インクに浸したペンを便箋に乗せた。

サーシャマリーの部屋へ入ると、そこには茶会から戻ったばかりの王女とネルがいた。令嬢方との茶会の首尾は上々だったらしく、機嫌が良さそうだ。

「フレア！大丈夫？リリーから具合が悪そうだって聞いたけど」

「はい、もうすっかり。ご心配をおかけして申し訳ございませんで

した」

フレアに気がついたサーシャマリーから声を掛けられる。嘘をついた罪悪感がチクリと胸を指すが、あえて気付かぬふりをした。タイミング良くネルが声を掛けてくる。

「もうすぐルーヴィッツ殿もいらっしゃいますよ。お着替えなさいますか？」

「いえ、いいわ。どのみち試着をするのでしょうか？このまま待つわかしこまりました、と頭を下げるネルには聞こえないように、サーシャマリーがフレアに近寄って来る。

「今日もらった手袋をしていたら、みなさんすごく褒めてくれたのよ！」

「まあ！それはようございました。ほんとに良くお似合いで、作ったかいがありましたわ」

にっこり笑うサーシャマリーに、フレアも笑みがこぼれる。そっと、サーシャマリーをソファへ誘い、腰かけた彼女の傍らに控えた時、扉をノックする音がした。茶の支度をしていたネルがすぐさま応じる。

「ルーヴィッツ殿のお越しです」

「早かったわね、どうぞ」

その言葉にネルが扉を開けると、大荷物を持ったルーヴィッツと仕立屋の二人が深々と頭を下げて入ってきた。

「お忙しい時間を頂戴いたしましたして、誠にありがとうございます」

「こちらこそ、手間を掛けます。さあ、さっそく始めましょう」

にこりと笑うサーシャマリーに、こちらも笑顔で答えたルーヴィッツが王女のそばに来る。カバンを開け、さっと取り出された真っ赤なドレスが二人の視界を覆う。

「若干の寸法直しと飾りを取り付けて参りました。ご試着いただけますか？」

ドレスには昨日の今日でよくこれほど、とフレアも感心するような装飾が施されていた。サーシャマリーも目を輝かせている。

「すごいわ！わたくしに似合うかしら？不安になって来るわね。さっそく着替えてきます。フレア、手伝ってもらえる？」

「かしこまりました、姫様。ルーヴィッツ殿、しばしお待ちください」

ルーヴィッツからドレスを受け取ると、フレアとサーシャマリーは寝室へと着替えに入った。

1時間後、ユーリックとオーランジュ達近衛が城外の仕事から帰還すると、真っ青な顔をした彼付きの侍従が走ってきた。

「サーシャマリー様が行方不明にございます！」

第21話（後書き）

すいません、またしても一発書きです。
誤字などありましたらご連絡いただけると助かります。

第22話

国王の執務室がいつになく静まり返っていた。部屋には国王始め数人いたが、誰一人として口を開かない。かれこれ10分も静まり返っていただろうか。扉が静かにノックされる。

「誰だ」

「私です、陛下」

扉の前に控えているであろう侍従を通さず、直接来訪を告げたのは王妃だった。机に肘をつき、両手を顔の前で組んだままだった国王は、一瞬の間ののち入室を許可する。

共の侍女を一人もつけず、単独で入室してきた王妃に、国王以外の全員が礼を取る。それを片手で制し、国王の前にまっすぐ進む。その表情はいささか暗い。

「陛下。何か進展はございましたか？」

「…いや」

国王のその言葉に王妃はそう、と呟くと肩を落とした。ふらりと揺れたその体を支えるように隣にユーリックがそっと寄り添う。

「母上…」

「ユーリック。…大丈夫よ。倒れるのはあの子が見つかったからにするわ。…陛下。私はかいつまんでしか情報が入ってきておりません。一度整理させていただいても？」

「そうだな。バルドー、王妃に詳細を伝えよ」

「はっ。王妃様、よろしければお掛けください」

指名された近衛総隊長のバルドーが王妃に向き直る。ユーリックに促され、王妃が執務室のソファに腰かけると、国王を取り囲んでいた輪が大きく開く。

「サーシャマリー様は今日の午後、侯爵家のご令嬢様方とお茶会の後、姿を消されたと思われます。：通常ではありえないことです。が、本日は王女様付きの侍女の人数がかなり少なく、また茶会が庭園で行われていたことからその片付けにも人手を取られ、お側についていたのは二人だったとのことでした」

「二人：いいわ、続けてちょうだい。まずは全体を把握しなくては：」

考え込みそうな様子の王妃に、一度言葉を切ったバルドーだが、王妃の言葉に頷く。

「本日のご予定は以前から決まっていたこの茶会以外には、午前中の講義のほかはこれと言ってございませんでした。とくに夕方は、最近ユーリック殿下とのために空けていらしたので予定を入れることはほとんどなかったと、王女様付きの侍女頭が申しております。ただ、今日に限っては急きょドレスのご試着が決まったそうです」

「試着：？」

「はい。なんでも『早く作って他のご令嬢方に見本がてら展示をする必要がある』と昨日、仕立屋から要望をされたようです」

「ユーリック、聞いていた？」

王妃の問いかけにユーリックは首を振る。

「いえ：昨日サーシャマリーに会いましたが、そのようなことは一言も：」

「そう：それで、バルドー？」

「はっ。ほんの短時間で良い、とのお申し出を王女殿下は承諾されたようなんですが、『手間を取ることはないの』と言われたようで、入城の許可は取っていたもののお側に控える近衛達も私に報告までしなかったようで…申し訳ございません」

部下の不手際を詫びるバルドーに、王妃は仕方がない、と手を振ってやめさせる。

「その仕立屋に事情は聞いたのよね？」

「それが…仕立屋はナツプ商会という新しい店で、王女殿下のドレスを仕立てていたのはそのルーヴィッツというデザイナーだそうです。先ほど部下を差し向けましたが、ナツプ商会ではそのようなデザイナーも仕立て職人も知らない、と…。サーシャマリー様はその時間にお姿を消されたと思われます」

「…なんてこと」

顔を両手に埋めてしまった王妃に、傍らに膝をついたユーリックが悔しそうに声を掛ける。

「母上…申し訳ございません。私は昨日そのルーヴィッツとやらに会っていたのに…」

「…そうなの？」

「はい。見慣れぬ顔だな、とは思ったのですが、今回は母上とサーシャが合同で商人たちを呼びましたので、目新しい者も多く…それに、サーシャがそのドレスをかなり気に入っていたようなので。水を差すまい、と調べさせるのを怠りました。気になっていたのに…！」

唇をかみしめるユーリックに、顔をあげた王妃がその握られた拳に手を添え、首を振る。

「いいえ、ユーリック。もとはと言えば、私が多くの者を城内に招き入れてしまったのです。あなたのせいではないわ」

「母上…」

「二人とも、そこまでにしろ。責任を取り合っても何もならん。今は、サーシャマリーの行方が最優先だ」

国王の言葉に親子は揃って視線を向け、頷く。

「そうね…何か、犯人からの要求もないの？」

「今のところ、そのようなものは届いておりません」

「では、犯人の目的は…」

わからない、と首を振るバルドーに王妃はちよつと考え込む。

「バルドー。一緒に姿を消した侍女とは？」

「ディケイデット子爵家の娘ネルと、ダングレイ伯爵家のフロアレディアです」

その言葉にハツとしたかのように、王妃は国王を見やる。

「陛下。もしかしたら、なんですが…」

「なんだ、申せ」

「…いえ、その前にダングレイ財務大臣と…近衛にいるグレンバツク侯爵のご子息を呼んでいただけますか？」

オーランジュは国王の部屋の前でダングレー財務大臣——フレアの父を見つけた。

サーシャマリーの姿が消えたことは帰ってすぐに聞いたが、戒厳令が敷かれているためその後の情報は彼には届いていなかった。しかし、ダングレー伯爵の姿に嫌な予感がする。二人が同時に呼ばれることは、共通する一人の人間のため以外にないからだ。

「伯爵様……」

「！オーランジュ！君も陛下からお呼び出しを？」

「ええ、まあ……」

濁した言葉にも、ダングレー伯爵はさっと顔色を変える。オーランジュと同じ考えに至ったのだろう。すぐに扉に向き直ると、部屋内に来訪を告げた。

執務室にはアーデルヴァイド国王夫妻とその一人息子ユーリック、そして近衛総隊長バルドーの姿だけがあつた。他は人払いがすでにされている。二人が国王に最敬礼をしようとするのを手で止め、国王が口火を切る。

「二人に来てもらったのは、王妃が聞きたいことがあると言うのである」

「はっ。なんなりとお尋ねくださいませ」

胸に手を当て頭を下げる伯爵に習い、オーランジュも頭を下げる。ちらりと横目で見れば、伯爵はまったくの無表情だ。事件のことを知らない彼はフレアが何か不手際を犯したと思っているのだろうか、顔には出さない。さすがだな、と思いつつ王妃の言葉を待つ。

「…ダングレイ伯爵。サーシャマリーが何者かに攫われたようです。
…そしてフレアも姿を消しました」

「っ！！王妃様！それはっ！それは誠にございますか！！」

驚きに顔をあげたダングレイは、隣でオーランジュも驚き王妃をじ
っと見つめていることに気付き、王妃と彼の顔を交互に見ている。
王妃はその様子にゆっくりと頷くと居住まいを正した。

「二人に聞きたいことがあります」

第23話（前書き）

今後場面がころころ入れ替わります。
読みにくかったら教えてください。

第23話

フレアは身体の痛みに無理やり眠りから覚醒した。身体どころか頭も痛い。こめかみを押さえながらゆっくりと体を起こす。

——私、どうしたんだっけ？

ぼんやりする視界にごしごしと目をこする。まだぼーっとする頭をはっきりさせようと首を振ると、自分の反対側に倒れているもう一人の人物に気付く。倒れたままの姿から流れる黒髪にハツとなる。

「サーシャマリー様!!」

慌てて膝立ちのまま近付き、呼吸を確認する。わずかに上下する胸にほっとし、あたりを見回すと見たことのない部屋だった。石がむき出しの壁に簡素な調度品、というのも憚られるような家具。一応ベッドもあるが、彼女達が寝かされていたのは床だった。固く、冷たい床の上にどれだけの時間いたのだろう。道理で体が痛むはずだ。窓は彼女の背のはるか上にあり、空が小さく切り取られている。夕闇もそろそろ消えかけている。その様子に、フレアは自分たちの状況を悟る。

——攫われたんだ…

王女付きの侍女として、王女が常にその危険にさらされていることくらいなんとなくわかってはいた。しかし、この3年間一度として身の危険を感じることはなかったために失念していたとしか言えない。理解していたつもりなのに身についていなかった危機感に、フレアは唇を噛む。

その時傍らのサーシャマリーがわずかなうめき声とともに身動きをする。

「姫様。サーシャマリー様…」

「ん……フレア？」

そつと肩に手をやると、薄く眼を開いたサーシャマリーが身体を起こす。背中に手を添え、その手助けをする。

「大丈夫ですか？どこか痛いところはございませんか？」

「ええ…なんだか体中が痛いし、頭もふらふらするけど…大丈夫よ」

サーシャマリーの言葉に一応胸を撫で下ろす。

「ここは…わたくし達どうしたのかしら？」

「わかりません…でも、そうやら城ではなさそうですわね」

不安そうなサーシャマリーの背を抱くようにして答える。王女が起きたことでフレアは自分がしっかりしなければ、と思います。彼女が不安そうにすれば、まだ年若い王女はより心を沈めてしまうだろう。

———私がお守りしなくちゃ。

そう思ってサーシャマリーの肩をぎゅっと抱きしめた。

部屋の片隅に置かれていたテーブルに水差しがあるのを認め、フレアは立ち上がる。水差しからコップに水を注ぎ、匂いをかいで不審がないことを確かめると、まずは自分が口に含んだ。毒などが入っていないさそうなことを確認すると、同じコップに再度水を注ぎサーシャマリーに手渡す。受け取った彼女は、恐る恐る口をつけるが、飲み干すといくらか落ち着いたようだ。

「姫様。床は冷えます。どうぞ、こちらへ」

椅子はなかったのでサーシャマリーをベッドに誘う。サーシャマリーも大人しくそれに従い、二人で腰を下ろした。

「攫われた…のね？」

「そのようですわ…申し訳ございません。私が付いていながら…」

「いいえ、フレアのせいではないわ。とにかく、城へ帰る方法を考えなくちゃ」

サーシャマリーがそう言ったとたん、一つしかないドアがガチャガチャと重い音をたてる。とっさにサーシャマリーの体をかばうように抱きしめる。ぎいっと音を立てて開いた扉から入ってきた人物に二人は驚いた。

「「ルーヴィッツ！！」」

城で見た見た服装と全く同じ格好で、嫌みたらしく礼をする。顔をあげたその表情はいつもと同じにこやかな笑みだったが、フレアにはもうニヤけた卑劣な笑みにしか見えなかった。

「お二人ともお目覚めのようですね」

「…見ればわかるでしょう。ルーヴィッツ、これはどういうことか、説明なさい」

キッと睨みつけるフレアに、ルーヴィッツはいやらしい笑みを向ける。

「おや、わかりませんか？なに、大したことではありませんよ。ち

よつと城から出ていただいただけです」

「姫様にこのようなこと：冗談では済みませんよ？」

「そうかもしれないねえ。でも、仕方がないんですよ。私のような若造が、王都の中で商売をしようと思ったらどこかで賭けに出るしかない」

肩をすくめるその様子に、フレアは怒りを爆発させたかったが、それは得策ではない、と必死で抑える。

「こんなことをして、まだ王都で仕事ができるなんて本気で思っているの？」

「まさか！そこまで愚かではありませんよ」

にやけるルーヴィッツからフレアは視線を外す。おそらく、彼は黒幕ではないのだろう。一商人が起すには事件が大きすぎる。それに彼の口ぶりから、この後ルーヴィッツは少なくとも王都、もしくはアーデルヴァイドを出るつもりなのだろう。だが、それこそ突然来た異国の者に大きい商売をさせるほど他国も甘くはないはずだ。――他国で、それもアーデルヴァイドの王都に匹敵する場所で商売をさせてやれるだけの力を持った人間。フレアはあたりをつけるが、その人数は限られているとはいえ特定することはできない。

「姫様をどうするつもり？」

「どうも。私はあなた方に何もしませんよ。だが、あなた達を『どうにかしたい』方がじきにいらっしゃいます。せいぜい見苦しくないように身支度でも整えておいってください」

そう言って、ルーヴィッツは身をひるがえすと扉から出ていった。ガチャリとカギが閉まる音が部屋に響いたが、フレアとサーシャマリーはその音にほっと胸をなでおろす。とりあえず、しばらくは入

ってこないであろう。

フレアは自身の胸に抱きこんだサーシャマリーを伺う。怯えているかと思ったが、そっとフレアから身体を離すと気丈な眼差しでフレアを見返してきた。

「もうじき、と言っていたわね。あまり時間がなさそうだわ」

「…そうですね。姫様…もしかして、なんですが…」

「なに？」

言いくそうにするフレアに、サーシャマリーが促す。

フレアは迷っていた。『あなた達』。ルーヴィッツは確かにそう言った。それはつまり、誘拐の対象にフレアも含まれている、ということだ。一介の伯爵令嬢にはたして誘拐してまでの利用価値などあるのだろうか。

だが、フレアには確かに思い当たることがあった。決して、他者に悟られることのないように過ごしてきたつもりだったが、きつとどこかで『何か』が知られてしまったのだろう。フレアが狙われるとしたら、理由はそれしか思い当たらない。

本当なら、もう誰にも知ってほしくない。それはフレアの偽らざる本音だ。しかし、この状況でサーシャマリーにそのことを話さないことが、良いことへ向く手段だとはフレアには思えなかった。

一つ息を吐き、サーシャマリーに目を合わせる。

「お話しておかなければならないことがあります」

第24話

「フローレディア嬢は、まだ『呪い』を持っていますか？」

王妃のその言葉に、ユーリックとバルドーは驚き、ダングレイ伯爵とオーランジュは緊張に固まった。そんな四人をよそに、王妃はいっそ淡々と語る。

「彼女が城に上がる時、ダングレイ伯爵夫人が内密に私のもとを訪れました。その時、彼女は私に言ったのです。――フレアには『呪い』がある、と」

その言葉にダングレイ伯爵は俯く。絞り出された言葉は苦しそうだった。

「…ご報告せずに、申し訳ございませんでした」

「伯爵。責めているわけではありません。私はそのことを陛下にもご報告申し上げています。その上で、私達はフローレディアにサーシヤマリー付きの侍女として勤めてほしい、と。彼女自身を見て決めたことです」

慰めるような王妃の言葉も、伯爵には答えることができない。

「…どうなのだ、ダングレイ」

国王の重い言葉に、彼は目線をあげる。意を決したように、二人を見つめる。

「…フローレディアは年に数回、我が家へ帰ってまいります。その

時、娘の髪を切るのは妻の役目でした。：『呪い』が収まったとの話は聞いておりません」

「そうか…」

「オーランジュは、どうだ？城でフローレディアが『呪い』を失ったような気配はしないか？」

「いえ：そもそも彼女は、ここ数年呪いの力を使うことはしていませんでした」

二人の答えに頷いた国王は、傍らの王妃を見る。その視線に彼女も頷き、改めてダングレイとオーランジュを見据えた。

「古より細々と続いている、今は『呪い』と言われてしまった力があるのは承知しています。そして、その力は、恐らく：サーシャマリーにもあります」

国王を除く全員が王妃の言葉に目をむく。

「：サーシャマリーにどのような力があるのかは、わかりません。あえて、確かめなかったの。でも、あの子の髪の色が何よりの証拠。ユリック、黙っていてごめんなさい。あれは、あの子の髪の色は私から受け継いだものなのです」

つらそうに顔を歪める王妃に、誰も二の句が継げない。国王は全て知っているのだろう。ただ一人、目を閉じて王妃の言葉を聞いている。薄い金色の髪を持つ王妃は、息子を見つめながら語る。

「かつて、まだアーデルヴァイドが戦乱の中に会った折、私はその力を極秘裏に使っていました。なぜそんなものがあるのかもわからなかった。とくに辛い思いをしたとは思わなければ、それが希有なものだと知ってからは、近寄る者全てに不安と疑惑を覚えしました。

「利用されるのではないかと」

いい思い出ではないのだろう。眉がわずかにしかめられる。

「国のために力を使ったのは、私の意思でした。史実には残らない形で、しかし確かにそれはあった。でも、限界があるのですよ、ダングレイ伯爵」

つ、と表情を和らげると、視線をダングレイに向ける。まさか、と思ったのは彼だけではなく、隣にいるオーランジュも驚きに王妃を見つめる。

「『呪い』と言われる力の使い方は人それぞれです。私は意識を高めるだけで良かったのだけれど、フローレディアは『髪を切る』という『行動』が必要だったようね。――同じように、おそらく力の限界も彼女独特の方法があるのでしょう。それを見つけることができれば、フローレディアは『呪い』から解放されるはずです」

「…母上は、どうされたのですか？」

王妃の告白に驚きつつも、ユーリックが聞いてくる。それに彼女はにっこりと微笑みかける。

「使い切ったのよ。国を守るためにも使ったけど、何より大きかったのは…陛下とともにあるために。だから、私の髪には『色がない』のよ」

謎めいた言葉だったが、ユーリックはそれ以上追及しなかった。そんな息子に愛しげな眼差しを瞬間送ると、王妃は向き直る。

「サーシャマリーとフローレディアが揃って攫われた、と言うのな

ら目的はそこにあると思います。」

静かに言葉を締める王妃に、オーランジュはぐっと拳を握りしめる。身の内でたぎる怒りを察知したのだろう、バルドーがチラリとオーランジュに視線をやる。

「：先ほど報告がありました。ルーヴィッツなる仕立屋は、王女殿下付きの侍女を伴い退城したそうです。殿下付きの侍女という立場を免罪符にしたのでしょうか。門衛も荷物を検めることなく通したようです」

「その者は、もう一人の侍女か？」

「はい、殿下。ディケイデット子爵家の娘、ネルです」

「サーシャ付きの侍女が手の者なら、隙を見つけるのも容易かったというわけか：用意周到だな」

親指の爪を噛むユーリックに、バルドーが応じる。そのやり取りで、先ほどまでの王妃の驚きの告白で漂っていた静かな空気が、一変ピリピリしたものに変わる。

「はい：なんでも彼女は自分用に、とルーヴィッツからドレスを買う予定だったようです。そのため何度か店にも足を運んでいるのですが、怪しまれることもなかったようです。周りの侍女たちも不審には思わなかったと言っています」

ユーリックの眉間のしわが深くなる。

「それに、小広間での生地選びの際、そのネルと言う侍女が王女殿下にルーヴィッツのドレスをすすめていた、との証言も出ています」

バルドーの報告に、今度は王妃が眉を顰める。自分の思い付きが

娘を危機に陥らせたと思っているのだろう。それに気付いた国王がバルドーを止める。

「バルドー、もうよい。それより、サーシャマリーの行く先だ。王妃の言う通りなら、犯人達がこちらになんらかの要求をしてこない可能性もある」

「つまり…力を利用するためだけに攫った、と」

「…そうだ」

部屋にいた全員が息を飲んだ。手がかりのない中、犯人側から接触がなければ何も掴めないかもしれない。ユーリックが王妃に詰め寄る。

「サーシャは、サーシャの力とはどのようなものなのですか！？彼女が力を使えないとなったら犯人はっ！」

「…落ち着きなさい、ユーリック」

「母上！！」

肩を押さえる母の手を振り払い、ユーリックは父である国王の机にバンッと手をつく。

「父上！なぜサーシャマリーを探さないのですか！？軍を動かさないのですか！？」

「ユーリック。冷静になれ。お前は一人の人間のために、国軍を動かすのか？」

「しかし！サーシャマリーは王女ですよ！？」

詰め寄って来るユーリックに、国王は顔の前に手をやり留める。

「わかっている。しかし、軍を大々的に動かせば他国にもその動向

を感知される。サーシャマリー一人のために、国民の安寧を脅かすわけにはいかない。理解しろ、ユーリック」

強い視線を向けられたユーリックが、なおも言い募ろうとするが、その瞳に父の苦悩を見てとり押し黙る。立ち上がり、息子の肩に一度手を置くとダングレイ伯爵に視線を向けた。

「サーシャマリーに関して、この話は今まで私と王妃しか知らぬ。ダングレイ、フローレディアの髪の『呪い』を知る者はどれほどいる?」

「はっ。私の家族、妻とフローレディアの兄と…ここにおりますグレンバグ侯爵家のご子息、オーランジュ殿とご当主の侯爵様のみでございます。当家では使用人にも明かしてはおりません」

言外に自分も問われたことを察知したオーランジュが、国王に首を垂れながら伯爵に倣う。

「当家でも私と父以外は存じません」

その様子に国王は頷く。が、オーランジュは再び口を開く。

「陛下…一つ、気になることがあるのですが、ご報告させていただいてもよろしいでしょうか」

「…申せ」

国王の許可を得たオーランジュは、部屋内の全員に向けて話した。た。

第25話

ユーリックを筆頭に、バルドーとオーランジュが国王の執務室から出てくる。入室を禁じられていた侍従が、ハッと顔をあげて何かを聞いたそうだったが、彼らは一顧だにせず歩き出した。

「オーランジュ…やつがフレアに目をつけたのは、やはり先日のことがあったからだろうか？」

歩調を緩めず、振り返ることもなくユーリックが背後のオーランジュに問う。見えていないと知りつつも、オーランジュは首を横に振った。

「いいえ。奴がフレアに会ってからすぐに俺の前に現れました。それ以前から目をつけてはいたのでしょう。もしかしたら接触を図って、違う計画があったのかもしれませんが…あの跳ね返りが大人しく言うことを聞くタイプではない、と気付いたのではないかと」

「…ダングレイ伯爵の娘はそんなに勝気な娘だったか？ 清楚な感じだ、と近衛の中では評判だったじゃないか」

バルドーが横から口を出す。その言葉にオーランジュは肩を竦めた。

「猫かぶりなんですよ、あいつは。たぶん、いまだに平気で木にも登れますよ。…大方、話を聞いてやるそぶりも見せなかったんですよ」

「…近衛の奴らが聞いたら驚くだろうな」

軽口をたたきながらも三人は大股で城の中を進む。少しでも暗い

雰囲気を払拭したいのであろうバルドーの言葉に乗りながらも、オーランジュは心の中で激しく己を責めていた。幼稚な自分の感情に流され、何日もフレアと話すことをしなかった。ようやく会ったかと思えば、自分を否定するかのような言葉に動揺し、突き放すような態度をとってしまった。そのすぐ後に彼女達が攫われたことを思えば、過去の自分を殴りつけてやりたいぐらいだ。

いつになく険しい顔をした部下に、おもしろいものを見たとバルドーは内心想う。こんなときでなければ思う存分からかうのだが、今はとにかく目的を遂行することが最優先だった。おそらく、三人のうちの一番冷静なのは己だろう、とバルドーは考える。妹の身を案じるユーリック、幼馴染を攫われたオーランジュ。部下の不始末という責任を負わねばならない立場ながら、二人の方がよほど身を切る痛みに耐えているのはずだ。普段冷静な二人が怒りに身をまかせつつあることを認識して気を引き締める。

———無事に済むといいのだが……

それが攫われた二人へ向けてなのか、これから向かう人物へ向けてなのかは、自分でも判断できなかった。

第四近衛隊・詰所。鍛錬や職務の合間に休息を取る際や、隊の連絡事項などが行われる場所だ。前を進んでいたユーリックがドアの前に立つが、背後からバルドーがその肩を押さえる。

「殿下。ここは私が。殿下自らが先頭を切ってこられては、他の者に不審がられます」

「…そうだな、頼む」

大人しく道を空けたユーリックに、軽く頭を下げるとバルドーはドアを開けた。

中にいた数人が一斉にドアの方を向き、バルドーの姿を認めると立ち上がる。それを軽く手でとどめ、部屋を見回す。

「…デューク・ウィンストーンはどこだ？」

「…デュークは午後から休みをいただいております。なんでも実家の方で急用だとか…」

「なに？ izzu 出ていった？」

眉を顰める総隊長に、その場にいた第四近衛隊の面々は顔をこわばらせる。みな一様にお互いの顔を見あいながら、発言を押し付け合っているようにも見える。

「———だから、貴族の坊ちゃんの箔付け部隊なんて言われるんだ！！」

ぎりっと奥歯をかみしめた音が聞こえたのか一番手前にいた隊員が、ひっと半歩後ずさる。

冷静に、とさっきまで思っていた自分が吹っ飛びそうになった時、バルドーの後ろから声が掛る。

「どけ、バルドー。私が直接聞く」

「ユーリック殿下…」

半ば彼を押しやるようにユーリックが身体を滑り込ませてくる。その様子には隊員達はますます萎縮し、首を垂れたまま固まった。その姿に思い切り不快感を表すと、ユーリックは低い声で問いかける。

「デューク・ウィンストーンだ。やつはizzu 城を出た。知っているものはizzu のか？」

なお沈黙を続ける隊員達に、ユーリックは冷めた目で見下ろしながらバルドーに告げる。

「この者たちは口がきけぬらしい。近衛隊の仕事は無理であろう。そうそうに退城させよ」

「デュ、デュークは！実は朝から姿が見えませんでした！ただ、昨日の晩に外出し、そのまま戻らなかったようなので…その…」

一人が慌てて顔をあげる。その様子に他の者たちはさらにバツが悪そうだが、ユーリック達は気にも留めず、話しだした一人に目を向けている。バルドーが言い淀む隊員に、顎で先を促す。

「お、女の所にも言っているのだろうと…同室の者が」

「…かばっていた、というわけか。すばらしい友情だな。その同室の者はどこにいる？」

バルドーの軽蔑したような眼差しに、居た堪れないのか発言した隊員は俯く。しかし、彼の視線は足元ではなく、部屋の奥にいる一人の隊員に注がれていた。よく見れば他の隊員達も彼を盗み見ている。当の本には真っ青な顔で俯き、小刻みに震えているようだ。

「…なるほどな。お前か、デュークと同室の者は。顔をあげろ」

バルドーの声に、びくつと肩が大きくふるえた後にゆっくりと顔をあげた。

「聞きたいことがある。包み隠さず正直に答えろ」

「は、はい…」

「デュークは昨日どこへ行くと言って城を出たのだ？」

「の、飲みに行くと言っていました。一緒に行こうとしたら、城下

で人と会う約束があるからダメだ、と」

「人と会うと言っていたのだな？ 誰かわかるか？」

「いえ：ですがそこそこ身形を整えていましたので、相応の店に行くのでは、という感じでした」

「デュークはよくそのように外出することが多かったのか？」

ふむ、と考え込んでいるバルドーに、ユーリックが横から口をはさむ。皇太子から直接声を掛けられた隊員は、ますます顔色を失くす。

「い、いえ：帰ってこないなどということは初めてです。仕事の後に城下に降りることは何度かありましたが」

「最近はどうだ？」

「そういえば、ここ1週間ほどは増えていたかと…」

考え込む風の隊員に、ユーリックとバルドーは目配せをし合う。

「邪魔をしたな。引き続き任務にあたれ」

そう言って身を翻すユーリックに頭を下げながら、あからさまにほっとした様子の彼らにバルドーがこそりと呟く。

「戻ったら覚悟しておけ：第四隊は全員一から鍛えなおしだ」

真っ青になった貴族のご令息達を残して二人はドアから出ていった。

第26話

ユーリックとバルドーが第四隊隊舎で聞き取りを行っている間、オーランジュは第二隊の部下数人に城門の門衛の所へ入退城記録を取りに行かせていた。夕闇迫る外で彼らを待ちながら、中の二人の様子にも耳をそばだてる。

ドアの横にもたれかかっていたオーランジュのもとに、この場にふさわしくない姿の者が駆けてくるのが見えた。

「オーランジュ様!!」

「君は…サーシャマリー様付きの…」

息を弾ませながらオーランジュの前にたどり着いたのはリリーだった。普段走ることなどめつたにない侍女が、かなりの距離を来たのだろう。胸に手を当て必死に呼吸を整えている。

リリーはぐつと息を一つ飲むと、無理やり息を整えオーランジュに向き直る。

「サーシャマリー様付きの侍女、リリーと申します。ちょっとよろしいでしょうか？」

必死の形相にただ事ではないと確信し頷く。だが、リリーは人目をはばかりように辺りに視線をやるので、隊舎の裏へと誘う。まだ荒い呼吸のリリーがそれに大人しくついてくる。

「…リリー殿、どうされましたか？」

「あ、あのっ私今日午後から城下に用があって出かけていてっ。それで、今戻って他の侍女たちに姫様のことを聞きました。そ、それで、関係が、もしかしたらあるかもしれないとっ…」

「…なにがあったか、ゆっくりでいいので話してください。なんでも構いません」

焦るリリーを手で留め、落ち着かせる。彼女はその様子にほっとしたように一度呼吸を整える。

「私の生家は城下のはずれにございます。実家の方で用があったので午後からそちらへ参りました。帰る途中、その…よくわからないものを見たのです」

困惑したような顔のリリーに先を促す。

「大通りを一つはずれた道で賃馬車が止まっていました。街の者が乗るような、普通の馬車でございます。その馬車から降りた方はすぐ目の前に止まっていた別の馬車に乗り替えられたのです。…家紋付きの、貴族の方が乗られる物です」

その程度なら後ろめたいことをしている貴族の旦那衆ならよくあることだろう。そう思ってオーランジュも大した反応を示さなかった。リリーも心得ているようで、そんなことが言いたいわけではない、と首を振る。

「私もその時は気にも止めませんでした。ですが、馬車が行ってしまった後これが道に落ちていたんです」

そう言ってリリーが差し出したのは、白い絹で編まれた手袋だった。それを受け取り見てみるが、オーランジュには意味がよくわからなかった。

「…フレアが編んだものです」

リリーのその一言にオーランジュの目つきが変わる。

「以前、私も彼女に編んでもらったことがあるんです。フレアは、手袋は爪や食器ではつれやすいから、と特別な編み方をしているんです。その時に教えてもらいました。だから、それはきつとフレアの物なんです！」

オーランジュにはわからないが、女性なら気付くのだろう。道に落ちていたというそれは、たしかにほつれや糸の伸びもなく形はきれいなままだ。

「姫さまと一緒にフレアも、ネルもいなくなったと聞きました！なにか、手がかりになるのでは、と…」

すがるような目のリリーに、オーランジュは彼女が手袋を持ちかえった幸運に感謝する。頷いて、リリーに問いかける。

「…馬車の家紋は、どこの家の物だ？」

「…ウインストン公爵様の物かと」

「そうか。…馬車を見た位置を覚えているか？」

「はい…その、オーランジュ様？」

恐る恐るといった風のリリーに目をやると、彼女はポケットから一通の手紙を取り出す。

「フレアの机の上にありました…侍女頭様がフレアとネルの部屋を検める、と仰っていたので…一緒について行って見つけたんです。他の方はフレアとオーランジュ様のことはご存知ないので…」

見られないほうがいいかと思った、というリリーから手紙を受け取る。封筒の表に確かに自分の名があるのを見て、閉じられていない封を開ける。

内容は短く、リリーが待ったのはほんの一瞬に思えた。だが、その一瞬でオーランジュの表情は驚くほど変わる。リリーの話を聞いている間、見えない敵に向けての怒りで険しかった顔は、彼に憧れ以上の好意を抱いていなはずの彼女でさえ、胸が痛くなるほどだった。

そつと、手紙を封筒に戻すとオーランジュはそれを上着の内側にしまう。大きく肩を上下させ、顔を掌で一撫ですると、以前の無表情に戻る。

「…あとで人をやるので馬車を見た位置を覚えてくれ」

「かしこまりました……オーランジュ様……！」

そのまま隊舎の表へ戻ろうとするオーランジュの背に、リリーが叫ぶように呼び止める。声に振り返ると、彼女は先ほどまでの怖いくらいの必死の形相から一転、泣きそうな顔で佇んでいる。

「お、お願いします！彼女たちを助けてください！フレアも、ネルも…私の友達を……！」

悲壮なその言葉に、身体ごと改めて向き直り深く頷く。

「わかっている。知らせてくれて助かった。それと…ありがとう」

そのまま今度こそオーランジュはユーリック達のもとへ戻って行った。

後に残ったリリーは、涙も引っ込んだのではないかと思うほど呆然としていた。

「…あの笑顔見てなんで平気なのかしら、フレアは…」

オーランジュの最後の言葉とともに浮かべられた表情に、今の状況も一瞬忘れて首をひねった。

第27話（前書き）

過去編です。

オーランジュ15歳

フレア10歳です。

第27話

10年前、秋。半年ぶりにリュートの別荘に着いたまだ幼いフレアは、久しぶりの自然に浮かれていた。馬車が止まると一番に飛び出し、別荘の玄関へ走り出す。

「兄様！早く早く！！」

「フレア！あまり走ると転ぶよ！」

妹と違い、どちらかと言うとおっとりしている兄——ランスウィットは、苦笑しながらまだ馬車から降りたばかりだ。待ちきれないとばかりに、一度玄関前まで来ていたフレアが走って戻って来る。兄の手を引き別荘のポーチをくぐると、ふと彼女の足が止まった。顔を向けている方をランスウィットを見ると、隣——といってもかなり離れているが——の別荘にも今まさに馬車が着いた所ようだった。

「ああ、グレンバック侯爵様も今着かれたんだな」

ランスウィットがそう言い終わらないうちに、繋いでいた手を離しフレアが走り出す。

「オーランジュ！！」

「フレア！久しぶりだな」

馬車から降りたばかりのオーランジュに、隣から走ってきたフレアがそのままの勢いで抱きつく。オーランジュの胸までしかないフレアの体を難なく受け止めると、彼もまた笑顔をこぼす。頭をぐりぐりと撫でまわすと、怒ったように頬をぷつと膨らませフレアが身体を離す。

「ちょっと！いいかげんその子供扱いやめてくれない？」

「何言ってるんだ、十分子供じゃないか。ちょっと見ない間に縮だんじゃないか？」

「失礼ね！この半年でドレスを全部作りなおさなきゃいけないくらいには伸びたのよ。オーランジュが大きすぎるんだわ」

まだ身体を支えられながらも、一人前に髪を気にして直すしぐさにオーランジュも微笑む。

表の騒ぎを聞きつけ、馬車から侯爵夫婦がこちらにもこやかな笑顔で降りてくる。その姿にフレアはオーランジュからパツと身体を離して二人に向き直ると、ドレスをつまんで可愛らしくお辞儀をした。

「お久しぶりです、グレンバック侯爵様、奥方様」

「元気そうだね、フレア」

「本当に、大きくなりましたね。オーランジュ、女の子はもっと丁寧にしてあげなくてはいけませんよ」

優しい笑顔を向けられ嬉しそうなフレアに対し、オーランジュはいはい、と母に適当な返事をする。

それに日傘を差したグレンバック侯爵夫人は眉をひそめる。

「まったく、これだから男の子は：フレア、あとでお茶にいらつしやい。私に娘ができた気分を味あわせてちょうだいな。オーランジュも、そんなんではフレアに愛想を尽かされてしまいますよ。きちんとお誘いしなさい」

「ありがとうございます、奥方様。私もお土産を持ってきたので、後でお持ちしますね」

にっこり笑うフレアに頷きながら、侯爵夫婦は別荘へ入って行った。

二人が邸へ入ると、とたんオーランジュは再びフレアの頭をぐりぐり撫でまわす。

「ちゃんと挨拶できるようになったじゃないか」

「もう、やめてってば！私だってもう10歳よ。これでも一人前のレディなんですからね」

オーランジュの手から逃れて、ツンの澄ましたように言う。オーランジュはそんな幼馴染に苦笑しながらも、やはり親と一緒に休暇に来てよかったと思う。15歳にもなって両親と行動を共にするというのが気恥ずかしくもあったが、王都ではろくに接点のない幼馴染に会えるのはやはり自分にとって必要な時間なのだろう。

そんなことを思っていたら、何の反応もないことを不審に思ったのか、フレアがオーランジュの顔を覗き込んでいる。幼い彼女に会いたかった、などと言うのはどうにも頂けない気がしてオーランジュはごまかすようにニヤリと笑う。そしてその手を取って、軽く腰を屈める。

「失礼いたしました、レディ・フローレディア。あなたを後ほど我が家の茶会にご招待したいのですが、お受けくださいますか？」

驚いたフレアだったが、次の瞬間はにかんだような満面の笑顔で大きく頷く。

「ええ、もちろん！喜んでお受けしますわ」

そう答えたフレアに視線を合わせると、二人は声を出して笑いだした。

.....

リユートでは一日は穏やかにゆっくりと、しかし楽しい時間は早く過ぎる。その時間を惜しむように両家は交流を深めていく。どちらかの家で茶会や昼食会が催され、三人の子供は大自然に触れる。城では要職に就く二人の父親が、あまり長い時間を別荘で過ごせないことは解りきっていたので、互いの家族はことさらその時間を大切にしていた。

だが、ある日はしゃぎ過ぎたのかランスイットが熱を出す。家中ではしゃげなくなったフレアは、いつも通り隣の邸へ向かった。表へ出るとちょうど出かける様子だったオーランジュがこちらに氣付いて片手をあげる。王都とは違う、簡素な服に身を包んだオーランジュに駆け寄る。

「出かけるの？」

「ああ、たまには馬を走らせようかと思ってな」

「馬？」

邸の裏側にある厩舎に向かう彼について歩く。頷いたオーランジュの手には布袋がぶら下がっている。出かけた先でランチにするつもりなのだろう、いい匂いにするのをフレアは嗅ぎつける。それに苦笑して、頭にポンポンと手を置く。

「お前もいくか？」

「いいの!？」

「ああ、ちゃんと家の人に伝えてこい。着替えてきたら乗せてやる」
「わかった!先に行っちゃダメよ!待っててね!」

ぱっと顔を輝かせると、とたんに走り出す。お弁当持って来るねー

！と叫ぶフレアに軽く手を振って見送ると、オーランジュは厩舎に向かった。

邸に戻ったフレアは昼食の準備をしていた別荘の管理人夫人に昼食を作ってもらい、その間に去年まで着ていた汚れてもいい服を引っ張り出して着替えた。年老いた管理人夫人から弁当を受け取り、大急ぎでオーランジュのもとに戻ると、彼はすでに愛馬に鞍をつけて待っていた。息を弾ませるフレアから荷物を受け取ると、自分の布袋に入れて背負う。

「お前、馬に乗ったことあるのか？」

「馬？　ないわ！」

そつと馬の鼻を撫でていた彼女はオーランジュの言葉にきっぱりと答える。

「ふんぞり返って言うことか：落ちないようにちゃんとつかまってるよ」

そう言うとはひらりと馬の背に乗り、フレアを引っ張り上げる。オーランジュの前に横抱きに座らされると、フレアはその高さに目を輝かせた。貴族の娘らしからぬその仕種に知らず笑みをこぼしながら、二人はゆっくりと馬を森の中へと進めていった。

第27話（後書き）

1話で終わるはずだったのに（涙）

第28話（前書き）

ながっ
（笑）

第28話

リユートにある森は深く、長い。それは隣接している村と別荘地を隔絶するためとも、狩猟のためとも言われている。また、リユート側はある程度整備されているが、途中からは全くの手付かずで自然を満喫できた。

何年もリユートに遊びに来ていたフレアもあまり奥まで行ったことはなかったが、今日は馬ということもあり、森の中ほどにある泉まで二人は足を伸ばした。

「こんな所があったなんて知らなかった！ きれい…」

オーランジュに馬からおろしてもらいながらも、フレアの目は太陽の光を反射してキラキラ光る泉に釘付けた。地面に足が付いてとたん、泉に向かって走り出す。そっと手を差し入れ、その冷たさに驚いている。馬を泉のほとりにつないだオーランジュも傍らから覗きこんでくる。フレアがいたために馬を走らせるというよりピクニックになってしまったが、幼馴染の無邪気な様子にまあいいか、という気になる。

泉の淵から少し離れた木陰に持ってきた敷き布を広げ、二人は外でのランチをとることにした。

王都よりも若干涼しい風がまだ心地よい季節。たびたび飛ぶフレアの話に耳を傾けながらの昼食は穏やかなものだった。

小一時間もそうしていただろうか。あまり長居してグレンバック家のお茶の時間に遅れると母がうるさい、とオーランジュが腰をあげる。

「ええー、もう行くの？」

「また来年来ればいい。泉は逃げないだろ」

不満そうなフレアをなだめながら馬の縄をほどきにかかったその時、二人のいる対岸からガサッと音がして突然人が現れた。

「な、なんだ：あんた達は誰だね？」

「：通りすがりだ。あんたは村の？」

隣村の者だろう男が驚いて声を掛けてくる。突然の出来事に驚いてオーランジュの背に隠れたフレアをかばいながら返事をする。

「こんな所まだ入って来るなんて、珍しいことを：」

男がほっと肩を撫で下ろしたのを不審に感じたオーランジュだったが、さっさと帰るに限ると馬の縄を木から解く。と、とっさに隠れていたフレアが恐る恐るオーランジュの陰から顔を出して男を伺った。

「こ、こんにちは」

一応挨拶くらいはしておこうと頭を下げたフレアだったが、その姿を認めた途端、男の顔が驚愕に固まった。それに二人も驚く。

「あの：？」

「ひいっ！！」

フレアが首を傾げながらさらにオーランジュの背後から出ると、男は顔をひきつらせて後ずさる。それに思わず伸ばしていた手がビクリと止まる。あまりの男の態度に眉を顰めたオーランジュが問いた。だそうと声を発する前に、男が自分の背後に向かって叫びだした。

「おいっ！みんな来てくれっ！！ま、魔障の娘がおるぞー！」
「えっ…？」

大声で叫ぶ男の言葉にオーランジュもフレアも意味がわからなかった。しかし、よくない事態に陥りそうなのは確かだ。ちっと舌打ちをすると、オーランジュはさっと馬に飛び乗った。青い顔で向こう岸を見つめるフレアに腕を伸ばす。

「フレア！行くぞー！！」

「え…う、うん！」

慌てて腕を伸ばし、馬上へ引っ張り上げてもらう。その間にも対岸ではがさがさと盛大な音を立てて数人の男がやって来るのが見える。おろおろとしてぐらつくフレアの体をむりやり抱え込み、オーランジュは馬の首を返した。

「あ！逃げるぞー！！」

「待て！その娘を置いていけー！」

「追えー！逃がすんじゃねえー！！」

チラリと背後を見ると、おそらく狩りの最中だったのだろう、手に弓や剣、中には斧を持った男達がわらわらと現れては追ってくる。引き返している者がいるのを見ると、他の仲間には伝えに行っただか、最悪は馬があるのだろう。なんにしてもオーランジュ一人でどうにかできる人数ではない。ぐっと手綱を握る手に力を込めると馬の腹を強く蹴った。

身をかがめて立ち並ぶ木をやり過す。しがみついてくるフレアを懷に抱えながらは、かなりキツイものがあつたが、相手は地の利

があるせいかなかなか声が遠ざからない。オーランジュは苛立ちながら馬を駆った。

だが、慌てていたためか途中で方角を間違えたらしい。馬は崖の切り立つ場所へ入ってしまう。ぐっと手綱を引き愛馬を止める。額に浮かぶ汗をぬぐいながら腕の中のフレアを見れば、こちらもぐったりとしている。今日初めて馬に乗った彼女にはかなり堪えたはずだ。

「大丈夫か？」

そっと乱れた前髪を撫でれば、微かにだが頷きが返ってきた。それにほっとして辺りを見回す。

「あの人たち…なに？」

怯えを湛える顔で呟かれた言葉に、オーランジュは首を傾げる。

「さあな。なにか勘違いをしているんだろう。それより、早く戻ろう。リユートまでは入ってこないだろう」

そう言うフレアはこくこくと何度も頷き、ぎゅっとしがみついてくる。

抜けられそうな所がなかったので、仕方なく引き返そうと馬の体の向きを変えた。が、その時目の前の茂みのがさりと分けられ数人の男が現れる。

「いたぞ！こっちだ！！」

「兄さん、悪いことは言わねえ。その娘をこっちに渡すんだ！」

険しい顔をした男達が口々に叫ぶ。呼び声に応える声も聞こえてくる。これ以上人数が増える前にこの場を突破しなければと、焦るオ

ーランジュは馬の首を向けて叫ぶ。

「どけっ!!」

しかし彼らはひるむ様子もなくオーランジュに、正確にはフレアに手を伸ばしてくる。

「くそっ、どけ!! いいかげんにしろ!」

からみつく男達の手にも馬が進まない。

「きゃあっ!! いやっ離して!!」

片側を相手にしていれば、反対側からフレアに伸びた手が彼女をひきずり降ろそうと腕を掴んでいる。

それを慌てて振り払うが、今度は逆から手が伸びてきてきりがない。

「や、やだっ!! さわらないでっ!」

「フレアっ!!」

「オーランジュ! やだあ!」

ずるっとオーランジュの前からフレアがとうとう下ろされる。たがいには手を伸ばすが、男達はフレアを馬から離していく。オーランジュも馬から飛び降り、腰の剣を抜こうとするが、いち早く察知した男が素早くオーランジュを取り押さえる。

「いいかげんにしろっ! お前達、伯爵家の娘にこんなことをして、いいと思っているのか!？」

オーランジュのその言葉に、一瞬男たちは怯んだ様子だったが、フ

レアの体を掴む男が頭を振る。

「そんなはずはねえ！ 貴族様の娘が、魔障の娘だなんてありえねえ！！」

「そうだ、兄さん騙されてんだ！あの娘は『呪い』の子だ！！」

「呪いだと！？」

男の腕を振り払おうともかくオーランジュが鋭い視線を背後に向ける。それに集まってきていた他の男達も彼を捕えながら頷く。

「そうだ。あの娘は呪いの色を持っている。：かわいそうだが、返すわけにはいかねえ」

オーランジュは目をむく。

「ふざけんなっフレアを離せ！そいつに触んな！！」

かなり離れた場所でフレアがぼろぼろと涙を流しながら手を伸ばしてくる。身体を後ろから押さえられ、口をふさがれたフレアは声も出せない。

「いかん、呪われるぞ！早く始末するんだ！！」

そう言われた男が腰から大ぶりのナイフを取り出す。もがいていたフレアはそれを見て驚愕に固まった。オーランジュも顔色を失う。

「やめろーっ！！」

渾身の力で男達の腕を振りほどくと、フレアのもとへ足を踏み出す。それを横目で見ていたナイフを持った男が、慌ててナイフをフレア

に振りおろす。

ガツンと、骨と骨がぶつかる音が響く。フレアに刃が届く寸前でオーランジュが男に体当たりをした。同時に吹っ飛ばされたフレアと彼女を捕えていた男も転がる。

「オーランジュ！！」

「あっ！待て！！」

拘束が緩み男の腕から抜け出したフレアが立ち上がろうとするが、すんでの所で足を掴まれ転ぶ。

「フレア！」

振り返り、身体を起こしたオーランジュが手を伸ばすが、彼に体当たりをされた男も起き上がる気配がするのに身構える。

「くそっ！邪魔すんなっ」

そう叫んでナイフを握りなおし、振りかぶる男の前をパラパラと何かが風に乗って流れていく。細い糸のようなそれらの色に、オーランジュがフレアをチラリと見れば、彼女のスマイレ色の髪が右側だけ極端に短くなっている。今度は三人の男に取り押さえられているフレア。その姿にオーランジュの頭にカッと血が上る。

「――切りやがったのかっ……！」

拳を握りしめたその時、風に流れたフレアの切られた髪が彼女の方へと漂う。まるで引き寄せられるかのように。

そして、その髪が彼女の目の前に来た時。

ドンという音とともに、辺り一面が火の海と化した。

第28話（後書き）

またしても見直しなし！
すいません…

第29話

いつルーヴィッツがまた戻るかもしれない中で、フレアはサーシヤマリーに自分の髪のコツを告げる。長い間自分の中に閉じ込めていたことを告白するのは勇気のいることだったが、話している間中握っていたサーシヤマリーの手が一度も離れることなく、それどころかぎゅっと握りしめてくるのがフレアを勇気づけた。

「私はそのまま意識を失いました。気が付けばリユートの邸で…目が覚めた時の母の泣き顔が今でも忘れられません」

「…オーランジュは、なんと？」

「…気にするな、と。忘れろと言われました。でも、私は彼も傷つけたんです」

涙が出そうなのを必死でこらえる。

あれから一度も見たことはないが、彼の背中にはやけどの跡があるはずだ。

「彼は、その後すぐに近衛隊に入隊してしまいましたし、私もそれ以来リユートに近づくこともなかったの…城へ勤めに出るまで、会うことはなかったのです。一度も」

オーランジュのことも、あの男達がどうなったのかも、誰も彼女に教えてはくれなかった。フレア自身も恐ろしさに自ら調べることがせず今日まで来てしまった。

あの事件でフレアは全くの無傷だったが、確実に『呪い』は彼女に掛ったのだった。フレアはあれ以来無邪気なだけの少女でいるこ

とはできなくなる。家族の迷惑にならないように、これ以上誰かを巻き込まないように。働きに出る、と言い出したのも一生を独りで過ごせるようにならなければ、との思いからだ。それが今、大切に思っている主をも危険に巻き込んでしまっている。己の浅はかさがフレアは憎かった。ぎゅつと唇を噛んで俯くフレアに、サーシャマリーはそつと呟く。

「…大変な目に、あってきたのね」

フレアは泣きそうな顔で首を振る。

「お話しなくて、申し訳ございませんでした」

「いいの。きっと、こんなことがなければあなたはこれからも誰にも話すつもりではなかったのでしょうか？憎むべきはあなたではなくて、今わたくし達をこんな状況に追い込んだ者たちよ」

幼い主の強い言葉に励まされ、フレアは頷く。

「この『呪い』。今なら姫様のお役にたてるかもしれません」

二人は大きく頷き合った。

ガチャガチャと音がしてドアが開く。入室してきたのはルーヴィツツともう一人、大柄な年輩の男だった。ベッドに腰掛けたまま二人を見上げる。慇懃に礼をするとルーヴィツツは相変わらずのいやらしい笑みを浮かべる。

「だいぶ落ち着かれたようですね、お二人とも」

ぎゅっとサーシャマリーの肩を抱きしめ、フレアはルーヴィッツを睨む。もう一人の男がジロジロと二人を目踏みするかのような視線を向けてくるのも不愉快だった。

身形のいい男に、フレアは見覚えがない。が、サーシャマリーは違ったようだ。

「ウィンストーン公爵…」

青い顔で呟くサーシャマリーの言葉にハツとなる。

対して、男はその言葉にやりとなる。整った顎ひげを撫でながら口を開いた。

「お久しぶりですな、サーシャマリー殿下。お元気そうでなによりですのお」

「お気に召していただけましたか、侯爵？」

低いその声に背筋がぞわぞわする。

「よくやった。まさかこうも事がうまく運ぶとは思わなかったな」

「…このようなことを、なぜ…？」

顔色を失ったサーシャマリーが呟く。それにニヤニヤしながら公爵は髭を撫でている。

「殿下はご自分のことをあまりにもご存知なさすぎる…そこのお嬢さんはちゃんとして承知のようだがね」

「わたくしが、何を知らないと？」

「ふふっ…いずれわかること。それかお母上にお聞きなさい。まあ、今一度会うことがあれば、の話ですがね」

下唇を悔しそうに噛みながらも、サーシャマリーは気丈に公爵を睨む。だが、公爵は気にもならないとばかりに彼女達に背を向けてしまった。

「ルーヴィッツ、二人から目を離すな。準備ができ次第出立する」

そう言うところらを顧みることなく出ていった。

「…わたくしが、いったい何を知らないというの？」

「…姫様」

ぎゅっとドレスを握りしめるサーシャマリーの肩をそっと抱く。本当は慰めたい。しかし時間もない。フレアは一度サーシャマリーを強く抱きしめると、身体を離し目線を合わせる。

「…帰ってから、王妃様にお聞きすればいいことです。今は…逃げなくては」

サーシャマリーも今は気持を押さえることにし、大きく頷く。

そしてフレアは覚悟を決めた。

「……サーシャマリーを守る。彼女を生きて城に帰す。」

大きく息を吐くと、フレアはすっと立ち上がった。

第30話

リリーから情報を得たオーランジュ達は、一様に慌ただしくなった。事を公にしていなかったために動ける人数は限られてくる。すぐにでも飛び出したいユーリックとオーランジュを押さえたのはバルドーだ。

「殿下は、まず陛下へのご報告を。もし殿下自ら動かれるのであれば、陛下の許可はなくてはなりませんまい。オーランジュは場所の特定を急げ。それとハロルドとフィールドにも連絡を。俺は隊舎にいる。おそらく、軍を動かさない以上近衛だけが動くことになるだろう。信の置けるものを選ばねばならん」

一様に嫌そうな顔をした二人に、バルドーはなだめるように両手で制す。

「焦って事を仕損じれば、今度こそ手掛かりはない。二人を救出する最初で最後のチャンスです。相手もこちらが何も手を打って来ないなどとは思っていないはず。なればこそ、慎重にかつ迅速に動かねばなりません。それとも、やみくもに城を飛び出して二人の居場所を探せる自信がおりか？」

最後の一言はとくに響いたようで、バルドーは多少落ち着きを取り戻した二人に満足げだ。

「…陛下の部屋にいる。二人とも、準備が整い次第来てくれ」

ユーリックはすぐさま踵を返して廊下を進んでいった。その背を見送りオーランジュとバルドーも歩き出す。

「まったく。じき二十歳になろうってご令嬢をいつまでも放っておくから、こんなことになるんだ」

呆れたように言うバルドーをじろりと睨む。

「：簡単に捕まってくれるような女じゃないもんで」

「その挙句がこのざまか？モテモテの副隊長殿もたいしたことないな」

「：放つといってください。：ところで、なんで総隊長がフレアの年を知っているんですか？」

眉を顰めるオーランジュに、バルドーは肩を軽くすくめる。

「そのくらいみんな知ってるさ。彼女はお前が思っているより注目されてるんだよ」

オーランジュは片手で顔を覆うと大きく溜息をついた。今までかなりの数を追いやってきたつもりだったのだが、あまり効果はなかったようだ。そんな部下の滅多に見ない姿に、バルドーは内心笑い転げる。

「甘かったな、オーランジュ。少し懲りることだ」

「：そうします。今度からは徹底的に排除することにしますよ」

「おいおい、冗談だろ？」

そっちじゃないだろう、と思うバルドーをよそに、オーランジュは不敵な笑みを浮かべる。

「フレアに目なんかつけるからですよ。：それでは、総隊長。俺は隊長達に知らせてきますので。場所の特定には第二隊の奴らだけで

あたります」

そういうと、隊舎とは別の方角へ伸びる廊下へさっさと歩きだしてしまった。その後ろ姿に向ける視線は憐みを含む。男を排除、じゃなくて女を捕まえる、だろうに…。

大いに世の女性達を虜にしている男が、意外と奥手なのだなあ…と思うが、自身の妻をめぐる数年前のできごとを思い出し、バルドーは人のことを言えない身の上に苦笑した。

———隊員にあまり犠牲者が出ないといいんだがなあ

そして隊舎への一步を踏み出す。近衛の総隊長へ登りつめた男は一気に頭を切り替える。その顔は先ほどまでのんきに部下をからかっていたものではない。獲物を狙う獣のような目を輝かせている。アーデルヴァイドが平穩になって久しい。今回の大捕り物は久しぶりに彼の闘志に火をつけていた。

国王執務室にオーランジュが隊長のハロルドと入ると、すでに中にはユーリックとバルドー、フィールドが来ていた。正面の机に座る国王とその横に立つ王妃、合わせて五人が彼らが来るのを待っていたのを知る。

「場所は割り出せたか？」

そう問うバルドーに頷き机に持ってきていた地図を広げる。

「第二隊の者に近所から聞きこみをさせました。ウィンストン公爵家から出た馬車は全部で3台。リリーが見たのもそのうちの一台です。おそらく、攪乱のために複数馬車を出したのですが、相

手にとっても彼女の目撃は予想外だったのでしょ」

ハロルドは広げられた地図には王都の侯爵家から3本の線が引かれ、それぞれの馬車の通った道筋がたどられている。そのうちの1本を指す。

「リリーが馬車を目撃したのがこの位置。王都を出た後の先が曖昧ですが、ウィンストン家と縁のある場所をこの先で探させました」

「あつたのか？」

ユーリックの言葉に、はいと答える。

「直接の持ち物ではないですが、公爵の姉が嫁いだ先の家の別邸があります。と言っても、今はほぼ使われておらず、婚家でも存在を忘れていたような物です。邸に管理人などは置いてなく、ここ数年は完全に放置されていたといえます」

引かれた線は途中で途切れていたが、オーランジュがその先にある土地を指し示す。

「…リ्यूト？」

「はい。貴族の別荘地として有名ですが、今の時期に行く者はいないでしょう。家と家の間も王都より広く取られていますし、もしどこかの管理人がウィンストン家の馬車に気付いても公爵家のことに口を出す者はおりません。…まさに打ってつけかと」

みなが一様に地図を覗き込んでいる。険しい顔をした国王がオーランジュに視線を向けた。

「確証は？」

その言葉にはオーランジュも眉を顰めた。隣のハロルドも眉を寄せている。

「当たりをつけてすぐに部下をやりましたが、馬を飛ばしても往復で半日以上かかります」

「そんなに時間はないわ」

オーランジュの言葉に、王妃は頭を振る。

「彼らがフローレディアの：ましてサーシャマリーの力でさえも欲しているというのなら、いつまでもリユートに置いてはいないでしょうね」

その言葉に皆が国王へ瞳を向ける。それを受け、一度ゆっくりと瞼を伏せると、再びその瞳を現した国王は立ち上がって告げる。

「バルドー、近衛を動かせ。ただし、どのような者でも第四隊からは一人も連れて行くな。不足があるようなら軍から補充することは構わないが、主だつ者は第一から第三隊の近衛から選べ。ユーリツク、指揮を執れ。お前に一任する」

「父上…！」

「軍は動かさん。事が大きくなる。だが、それ以外では最優先事項とする。サーシャマリーとフローレディアの救出、ウィンストンとその一味を捕らえて来い」

低い声に国王が顔にこそ出さないが怒りを湛えていることは、全員がわかった。だからこそ、一つの否もなく全員が首を垂れてその命に従った。

第31話（前書き）

お久しぶりです。

めっちゃ久しぶりになってしまいました。

しかもまた一発書き（笑）

誤字、脱字報告お待ちしています…

第31話

日も沈みかけ、空には月と星が煌めきだした時刻。焚火に赤々と照らされた城門がゆっくりと開く。中から出てきたおよそ120名の近衛隊は全員が簡易とはいえ礼装に身を包んでいた。先頭を進むのは近衛隊総隊長のバルドー。そして、ユーリック、オーランジュらも王都の道を揃って馬をすすめていく。町の明かりに照らされた彼らは、あたかもパレードのように華やかだったと、後に民達の口に乗った。たとえば、本人達のはやる気持ちを必死に押さえていたのだとしても、彼らにそれを知る術はないのだ。

フレアはそつと扉に近付き耳を当てた。分厚い扉は外の音をあまり通さずよくは聞こえないが、人の気配はないようだ。嚴重な鍵は開きそうにないので逃げられる恐れはないと思っているのだろう。それでも、フレアは極力音をたてないようにそつと扉から離れると、テーブルに乗っていたグラスを一つ手に取りサシヤマリーのもとへ戻る。ベットからサシヤマリーを立たせ、シーツを剥ぎグラスに巻きつけ床に置き、さらにおまけのように置かれていた枕をその上に乗せると、ぐつと体重を掛けた。安物であろうグラスは思いのほか簡単にフレアの手の下で碎ける。微かにたった音に、フレアは心臓が跳ねる思いだった。扉の外の気配に変化はない。それにほっとしながら、ゆっくりとシーツを広げていった。チャリ、と音を立てる破片の中から比較的大きくて角の鋭い物を選びだし、残りはシートとともに畳んでベットの下へ押し込む。

不安そうなサシヤマリーに、大丈夫、と微笑むとフレアは胸元に垂れる髪を掴むとグラスの破片をぐつと当てて一息に切り落とした。ザクツという音が頭に響く。思わずつぶってしまった目を恐る

恐る開くと、しかし手には一見なんの変哲もない一握りの髪。色が珍しいということだけで、何の変化もない。だが、フレアは手早く切った髪を二つに分けると、一つを自分のポケットに押し込みもう一つをハンカチで包むとサーシャマリーへと差し出す。

「お持ちに、なっていてください」

「でもっ…」

「お願いします。サーシャマリー様は、絶対に城に戻られなければなりません。手段は：問えないのです。今は」

ためらうサーシャマリーの手へ、フレアはぐっとハンカチを押し付ける。一度は手を引きそうになったサーシャマリーだが、フレアの言葉に頷くとドレスの胸元にそれを押し込んだ。

その時、外がにわか騒がしくなる。ハッとして窓の方を見やるが、高い位置にある窓からは今や暗くなった空しか見えない。しかし、何か動きがあったのだけはわかるので、二人は緊張に身を固めながらも先ほどと同じようにベッドへ腰かけなおした。

ぶ厚い扉からは外の声ははっきりとは聞き取れない。だが、誰かが部屋へとやって来る気配に身を固くする。フレアはサーシャマリーの両手をぎゅっと握り、かばうように身を少しだけ前に乗り出して扉を見つめた。

すぐに重い鍵の開かれる音がして扉がゆっくりと開く。そこにいた人物に、二人はまたしても驚かされることになった。

「これはこれは。ようこそ、お二方。ご気分はいかがですか？」

白々しくもそう言いながら入ってきたのは、先日王女の私室で初対面したばかりのデュークだった。さらにその後ろにはネルが手に燭台を持ちながらうつむきがちに付き従っている。

共に午後の仕事にあたっていたフレアは、この部屋に彼女がいな
いことに對しもしや、という思いとそんなはずはない、という思い
の両方があったが、今まさにそれが証明されてしまい悔しさに胸が
締め付けられる。

「ネル、あなた、どうしてこんなことを…」

にやにや笑って自分達を見下ろすデュークを無視し、フレアはこち
らに視線を向けようとしないうネルをきつい目で見据える。名前を呼
ばれた瞬間、ビクリとわずかに肩を揺らしたネルはゆっくりと顔を
あげた。

「フレア…サーシャマリー様…」

わずかに震える声に、彼女が決して快くこの策略に加担したわけ
ではないような気配を察する。しかし、彼女が王城から二人を連れ出
すのに多大な手引きをしたことは想像に難くない。緩みそうになる
視線をぎゅっと唇をかむことで耐え、フレアはネルを睨み続ける。

「何をしたか、わかっているの？」

低い声で問われたネルは、その言葉に再び俯き黙ってしまう。さら
に口を開こうとしたフレアだが、様子を目の前で見ていたデューク
に遮られた。

「…僕を無視して話さないでくれるかなあ」

言葉ぶりはのんきそうだが、イライラとした気配がありありと伝わ
ってきたので、仕方なくフレアはデュークに目をやる。

「：お久しぶりですわ、デューク殿。今日はどんなご用件かしら？」
「ふふ：随分と気が強くてらっしゃるな、フレア嬢は。まさか僕がただのご機嫌伺いで来たなんて思ってたんでしょう？」

「当然ね。私達がこんな所にいるなんて誰も知らないはずですもの。ああ、それともデューク殿は私達を城へ帰すために迎えに来てくださったのかしら？」

わざと嫌味たらしく言えば、デュークはますます口元を歪めて笑う。

「それは残念。僕はあなた方を城から出すことはしても、戻すことなんて絶対にしないね」

でしょうね、と呟いて肩をすくめる。大げさに溜息をついたフレアは、視線をデュークに戻すときつい口調で問い詰める。

「私達を：いえ、サーシャマリー様をどうするつもり？こんなことをして、陛下やユリック殿下が黙っていると思ってるの！？いくら公爵家の血筋だからと言って、ただではすまないわよ！」

「陛下：殿下：。そうだねえ、黙ってはいないだろうねえ。僕も公爵家の跡取りだからって、無罪放免とはいかないだろうねえ」

くつくつくと肩を揺らしながらそう告げるデュークに、フレアは背筋がぞわりとする。

「なにを：企んでいるの？」

「べつに。ただ、陛下には玉座を降りて頂きたいだけだよ」

第31話（後書き）

いや～なヤツがいますね～
でもいや～な奴って書きやすいですね～（笑）

第32話

「陛下には玉座を降りて頂きたいだけだよ」

なんでもないことのように言い放たれた言葉に、フレアもサーシャマリーも息を飲む。フレアに庇われるようになっていたサーシャマリーは、身体を乗り出して声をあげる。

「まさか！謀反など、許されませんわ！それに、お父様がそうやすやすと退位されると思っているの！？」

「どうかなあ。できれば簡単に降りてもらいたいんだけどねえ。僕らもあなた達を殺したくなんてないし」

腕を組んでこちらを見下ろすデュークに、サーシャマリーは今にも掴みかかりそうな気がして、フレアは彼女の前に立ちあがり、視界からデュークの姿を隠した。

「：取引の、材料として使うつもり？」

「それも、ある。でも君はちょっと違うけどね」

デュークも自分の力を知っている。そう思うと吐き気がこみ上げてきそうだった。今まで自分が、いや自分達がどれだけ必死になって隠してきたことか。どんな伝手を使ったのかわからないが、こんな奴等が公爵の地位に生まれてしまったことを呪うしかない。悔しさに自然と手を握りしめていた。

デュークの完全に人を見下したその表情には、以前城であった時のような軽薄さはかけらもない。あるのは酷薄な、黒い、いやらしいばかりの笑みだ。

「今ごろオーランジュはどんな顔してるんだろうね。悔やまれるのは、今やつの顔を見れないことくらいかな」

オーランジュという名に、フレアは目を見開く。デュークはそれに満足そうに目を眇める。

「バレてないとも思ってた？ 木陰でこそ二人で会っていたこと。まあ、無能な他の近衛隊員達は知らないだろうけどね。僕は気付いてたよ、フレア。君が、オーランジュの弱みだろうって、ね」
「なにを…言っているの」

デュークの言葉に声が震えそうになる。

「おやおや、清純ぶりっ子かい？ まさかオーランジュが君のことを本当に『幼馴染の妹』みたいにしか思っていないなんて、本気で言わないだろうね？」

デュークのにやけ面が深くなる。

「よかったよ、フレア。君が魔障持ちの『呪い』の娘で。あいつの鼻を明すのに、これ以上の人材はないね」

そういうとデュークはゆっくりとフレアの正面に立つ。睨みつけるフレアの視線を意に介さず、デュークはフレアの髪に手を伸ばした。

「許さないわ」

低い、しかしはっきりとしたフレアの声にデュークは触れる寸前だった手を止める。まっすぐに自分を睨むフレアと目を合わせる。

「あなたが私の髪に触れるなんて、許さないわ。…あなたなんかがね」

サーシャマリーだけでなく、オーランジュにまで手を伸ばそうとしているデュークに、震えそうだった心が今はピタリと止んでいるのを感じた。あれほど、オーランジュに頭を撫でまわされていても感じなかった不快感が、今は手を伸ばされただけで全身を悪寒が走る。

——髪が、嫌がってる…触れるなど言っている…
心の中に響き渡る姿なき声に、フレアは従うように口を開いた。

「…許さないわ」

そう言ってデュークから距離を取るように一步下がる。
さっきまでとは明らかに態度の変ったフレアに、デュークは一瞬呆気にとられたようだが、中に浮いたままの自分の手を見つけると拒否されたことをようやく察知したのか、その手を拳に握り顔から笑みを消し去った。

「…そうやって、お前たちは僕を拒絶するんだ！」

噛み締められた唇から発せられた言葉に、フレアは無言で返す。
だが、何かが切れてしまったかのように、デュークは顔を赤く染めて叫びだした。

「お前も！オーランジュも！お前の兄も！！僕のことを認めようとし
ない！僕を受け入れない！まるで、何もできないような、弱い人
間を見るような目をする！ふざけるなっ！！そうするべきなのは僕
なんだ！」

フレアを、次いでサーシャマリーさえも指差し大声を張り上げる。

「僕は公爵家の嫡男だぞ？偉いんだ！生まれながらにして人の上に立つことを許されているんだ！それなのに父上は僕を近衛なんか勝手に入れて！拳句の果てに第4隊だと！？なんでだ！僕はもつと上にいる人間だ！あんな低能な奴らと僕と一緒にするなんて、ありえない！そのうえオーランジュが副隊長だって！？なんであいつなんだ！そこにいるのは僕のはずなのに！！」

一気に捲くし立てたデュークは、そこでピタリと言葉も動きも止まる。叫んだ表紙に仰向いたままだった顔に表情はなく、目は中を見たまま見開いている。

言葉よりもその姿に寒気を覚えたフレアは、そつとサーシャマリーをかばうように身を屈める。

やがて、ゆっくりと大きな息を一つ吐いたデュークは、乱れた前髪を払うと抱き合うようにしているフレアとサーシャマリーに視点を合わせた。そして大きく口元を歪ませる。

「だからね、こんな王家なくなっちゃえばいいと思ったんだよ」

長年積もったコンプレックスなのだろう。もはやフレアにはデュークの気持ちなどかけらも理解できなかった。だが、デュークはすでに彼女たちの反応など気にもしないようだ。いつそ得意げに腕を組みなおす。

「僕の有能さを理解できないような奴らしかないんじゃないんじゃ、このアーデルヴァイドの未来もたかが知れてるよ。だから、僕達が代わってあげようってわけ。あなた方二人には、せいぜい役に立ってもらうよ」

そう告げるとさっと身を翻して扉から出て行った。その後を追って逃げるように部屋を出たネルの表情は、今のできごとに青ざめていた。

ガチャンと一際大きな音がして鍵が閉まる。はあという溜息とともに、サーシャマリイの身体から力が抜けたので、慌ててフレアは彼女を抱え直す。

「大丈夫ですか？ 姫様」

「ええ：でもいつまでもこうしてはいられないわね。早くお父様に知らせなくちゃっ」

たしかに彼らが本当に謀反を企んでいるのだとすれば、策はサーシャマリイを誘拐しただけではないはずだ。王城にいる国王一家にも危険が忍び寄っている可能性が高い。

二人は改めて頷き合った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5453q/>

幼馴染の溜息

2011年4月7日14時17分発行